

荒神峪遺跡

—津山総合流通センター埋蔵文化財発掘調査報告3—

1999

津山市土地開発公社
津山市教育委員会

荒神峪遺跡

—津山総合流通センター埋蔵文化財発掘調査報告3—



1999

津山市土地開発公社
津山市教育委員会

卷頭図版 1



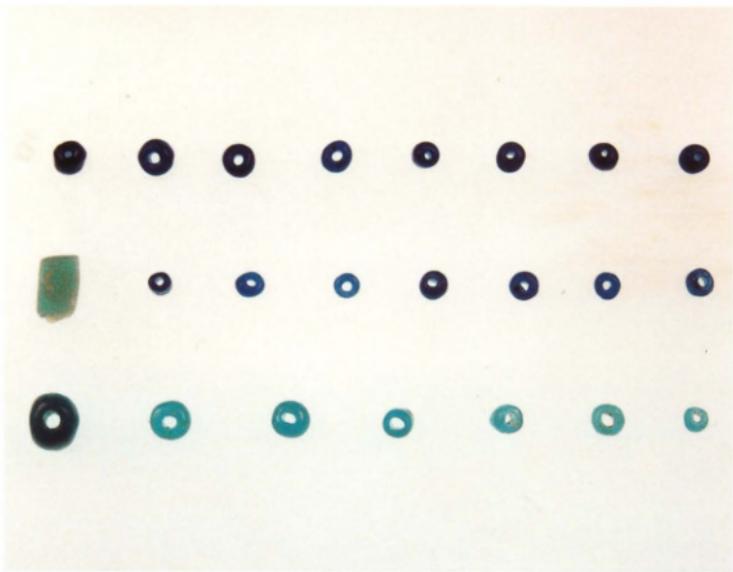
1. 荒神峯遺跡遠景(北から)



2. 荒神峯遺跡全景



1. 住居跡 6 全景



2. 住居跡 6 出土ガラス製玉類

序

荒神峪遺跡は、中国自動車道の院庄インター近くに計画された、津山総合流通センター建設に伴い調査されたものであります。流通センター建設に伴い8遺跡が調査され、ほとんどが記録保存と言う形で開発に伴い消滅してしまいましたが、唯一田邑丸山古墳群は古墳公園として保存され、現在は整備されております。また、これら調査の記録をまとめた報告書もすでに2冊が刊行され、本報告書は3冊目にあたります。これら報告書は来年度ですべて刊行する予定にしております。

荒神峪遺跡は弥生時代の集落遺跡であります。検出した住居跡の中には美作地方でも最大規模を誇るものがあり、さらに出土遺物の中には青銅製の鏡（腕飾り）やガラス製の正製品（首飾り）など当時としては貴重な資料もあります。これら出土遺物は美作地方の弥生時代集落について研究する良好な資料であり、さらに当時の社会情勢を研究する一助となるものと期待しております。

なお、末筆ではございますが、発掘調査から報告書作成に至るまで多くなるご協力をいただいた津山市土地開発公社、津山市シルバー人材センター並びに関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成11年3月3日

津市教育委員会
教育長 松尾 康義

例　　言

1. 本書は津山総合流通センター造成に伴う荒神峪（こうじんぎこ）遺跡の発掘調査報告書である。
1. 津山総合流通センター造成事業で9箇所の遺跡が調査された。報告書は5冊にまとめて刊行する予定であり、本書はその第3冊目である。
1. 発掘調査経費はすべて、原因者である津山市土地開発公社の負担によるものである。
1. 発掘調査は津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センター安川豊史、小郷利幸が担当した。
1. 本書の執筆・編集は小郷がおこなった。
1. 本書に用いたレベル高は海拔高である。また、方位は平面直角座標系第V系の北である。
1. 本書第3図に使用した「津山総合流通センター内道路と周辺の遺跡分布図」は建設省国土地理院発行5万分の1（津山西部）を複製したものである。
1. 本書には挿図等に遺構の略称を用いている。略称は次のとおりである。
S H : 住居跡 S B : 建物跡 S T : 段状遺構 S G : 土壙墓 S K : 上壙 S D : 溝
S A : 構列
1. 整理作業から報告書作成に至るまで、小澤かおり、大谷みゆき、丸王住苗、橋本玲恵、浅岡美恵、広政美智子、八幡佳奈絵、山本有希、上原香里、三谷順子、野上恭子、岩木えり子、家元博子各諸氏の協力を得た。
1. 自然科学的分析として、岡山理科大学自然科学研究所白石純氏に「荒神峪遺跡出土黒曜石、サヌカイト製石器の産地について」の玉稿をいただいた。記して謝意を表します。
1. 出土遺物及び図面類は津山弥生の里文化財センター（岡山県津山市沼600-1）に保管している。

本文目次

| | | |
|-----|----------------------------|----|
| I | 津山総合流通センター造成と発掘調査に至る経過 | 1 |
| 1. | 津山総合流通センター造成に至る経過 | 1 |
| 2. | 発掘調査に至る経過 | 1 |
| II | 津山総合流通センター内の遺跡と周辺の遺跡 | 2 |
| 1. | 津山総合流通センター内の遺跡 | 2 |
| 2. | 周辺の遺跡 | 6 |
| III | 遺跡の立地と調査の経過 | 8 |
| 1. | 遺跡の位置と立地 | 8 |
| 2. | 調査経過 | 8 |
| (1) | 調査に至る経過 | 8 |
| (2) | 調査の経過 | 8 |
| (3) | 調査体制 | 9 |
| IV | 調査の記録（荒神崎遺跡） | 13 |
| 1. | 弥生時代 | 13 |
| (1) | 住居跡 | 13 |
| (2) | 建物跡 | 35 |
| (3) | 柵列 | 41 |
| (4) | 段状遺構 | 41 |
| (5) | 土塙 | 49 |
| (6) | その他の遺構及び遺構に伴わない遺物 | 70 |
| 2. | 近世 | 71 |
| (1) | 墓 | 71 |
| 3. | その他の時代 | 80 |
| (1) | 上塙 | 80 |
| (2) | 遺構に伴わない遺物 | 80 |
| V | 自然科学的分析 | 81 |
| 1. | 荒神崎遺跡出土黒曜石、サヌカイト製石器の産地について | 81 |
| VI | まとめ | 84 |
| 1. | 荒神崎遺跡の評価 | 84 |
| (1) | 弥生時代の集落の構造と時期 | 84 |
| (2) | 出土遺物について | 89 |
| (3) | 近世墓について | 92 |
| 2. | 津山総合流通センター内の遺跡について | 93 |
| (1) | 弥生時代後期の集落と墓地 | 93 |

挿 図

| | | |
|------|--------------------------------------|-------|
| 第1図 | 津市位置図 | 1 |
| 第2図 | 津山総合流通センター内周知の遺跡(左) と実際に調査した遺跡(右) | 3 |
| 第3図 | 津山総合流通センター内遺跡と 周辺の遺跡分布図 | 5 |
| 第4図 | 荒神嶽遺跡周辺地形図 及びグリッド配置図 | 10 |
| 第5図 | 荒神嶽遺跡構全体図 | 11~12 |
| 第6図 | 住居跡1平・断面図 | 14 |
| 第7図 | 住居跡1出土遺物 | 15 |
| 第8図 | 住居跡2・3平・断面図 | 16 |
| 第9図 | 住居跡2・3出土遺物 | 17 |
| 第10図 | 住居跡4平・断面図 | 17 |
| 第11図 | 住居跡4出土遺物 | 18 |
| 第12図 | 住居跡5平・断面図及び出土遺物 | 19 |
| 第13図 | 住居跡6平・断面図 | 21 |
| 第14図 | 住居跡6出土遺物(1) | 22 |
| 第15図 | 住居跡6出土遺物(2) | 23 |
| 第16図 | 住居跡7~9平・断面図 | 24 |
| 第17図 | 住居跡7・8出土遺物 | 25 |
| 第18図 | 住居跡10平・断面図及び出土遺物 | 26 |
| 第19図 | 住居跡11平・断面図及び出土遺物 | 27 |
| 第20図 | 住居跡12平・断面図及び出土遺物 | 29 |
| 第21図 | 住居跡13・14平・断面図 | 30 |
| 第22図 | 住居跡13出土遺物 | 30 |
| 第23図 | 住居跡15平・断面図 | 31 |
| 第24図 | 住居跡16平・断面図及び出土遺物 | 32 |
| 第25図 | 住居跡17平・断面図及び出土遺物 | 33 |
| 第26図 | 住居跡18平・断面図 | 34 |
| 第27図 | 建物跡1・2平・断面図 | 36 |
| 第28図 | 建物跡3・4平・断面図 | 37 |
| 第29図 | 建物跡5平・断面図 | 38 |
| 第30図 | 建物跡出土遺物 | 38 |
| 第31図 | 建物跡6平・断面図 | 39 |
| 第32図 | 横列1~5平・断面図 | 40 |
| 第33図 | 段状遺構1・2平・断面図 | 42 |
| 第34図 | 段状遺構3~7平・断面図 | 43 |

目 次

| | | |
|------|---|----|
| 第35図 | 段状遺構8~10平・断面図 | 44 |
| 第36図 | 段状遺構11・12平・断面図 | 45 |
| 第37図 | 段状遺構13~15平・断面図 | 47 |
| 第38図 | 段状遺構出土遺物 | 48 |
| 第39図 | 土壤2・9・15~17平・断面図 | 50 |
| 第40図 | 土壤19・22~26・28平・断面図 | 51 |
| 第41図 | 土壤29~32・34・36~39平・断面図 | 52 |
| 第42図 | 土壤出土遺物(1) | 54 |
| 第43図 | 土壤40・41平・断面図及び 土壤40遺物出土状況 | 55 |
| 第44図 | 土壤40出土遺物 | 56 |
| 第45図 | 土壤42・45・47・48・50~53・57 平・断面図 | 58 |
| 第46図 | 土壤58・61~68平・断面図 | 61 |
| 第47図 | 土壤69・71・72・75~80平・断面図 | 63 |
| 第48図 | 土壤81~84・86・88・89平・断面図 | 64 |
| 第49図 | 土壤90~93・95・96平・断面図 | 66 |
| 第50図 | 土壤98・100・101・104・106・108・ 109平・断面図 | 68 |
| 第51図 | 土壤出土遺物(2) | 69 |
| 第52図 | その他の遺構、遺構に伴わない 出土遺物 | 70 |
| 第53図 | 近世墓1~10平・断面図 | 72 |
| 第54図 | 近世墓11~13平・断面図 | 73 |
| 第55図 | 近世墓出土遺物 | 74 |
| 第56図 | 土壤1・3・4~8・11~12平・断面図 | 75 |
| 第57図 | 土壤13・14・18・20~22・33・35・43 平・断面図 | 76 |
| 第58図 | 土壤44・46・49・54~56・59・60・70 平・断面図 | 77 |
| 第59図 | 土壤73~74・84~85・94~97~99~102~103・ 105・107平・断面図 | 78 |
| 第60図 | 遺構に伴わない出土遺物 | 80 |
| 第1図 | 荒神嶽遺跡出土黒曜石の原産地推定 | 83 |
| 第2図 | 荒神嶽遺跡出土黒曜石の原産地推定 | 83 |
| 第3図 | 荒神嶽遺跡出土サヌカイトの 原産地推定 | 83 |

| | | | |
|-----------------|----|-----------------|----|
| 第61図 堅穴住居の規模と柱数 | 86 | 第63図 建物・横列の主軸方向 | 88 |
| 第62図 時期別遺構分布図 | 87 | | |

表 目 次

| | | | |
|-------------------------|----|-------------------------|----|
| 第1表 津山総合流通センター地内遺跡調査一覧表 | 4 | 第1表 石器石材分析値一覧表 | 82 |
| 第2表 住居跡6出土玉類一覧表 | 23 | 第5表 荒神峪遺跡住居跡一覧表 | 86 |
| 第3表 近世墓一覧表 | 74 | 第6表 津山市内弥生時代玉類出土遺跡一覧表90 | |
| 第4表 土壙一覧表 | 79 | 第7表 津山市内弥生時代鉄器出土遺跡一覧表91 | |

図 版 目 次

| | |
|----------------------|-----------------------|
| 卷頭図版 1 - 1 荒神峪遺跡遠景 | 3 住居跡11 |
| 2 荒神峪遺跡全景 | 図版 9 - 1 住居跡12・13全景 |
| 卷頭図版 2 - 1 住居跡6全景 | 2 住居跡12 |
| 2 住居跡6出土ガラス製玉類 | 3 住居跡13 |
| 図版 1 - 1 荒神峪遺跡遠景 | 図版 10 - 1 住居跡13遺物出土状況 |
| 2 荒神峪遺跡遠景 | 2 住居跡14 |
| 3 荒神峪遺跡全景 | 3 住居跡15~17 |
| 図版 2 - 1 住居跡1・建物跡1全景 | 図版 11 - 1 住居跡15 |
| 2 住居跡1 調査風景 | 2 住居跡16 |
| 3 住居跡1 | 3 住居跡17 |
| 図版 3 - 1 住居跡2・3全景 | 図版 12 - 1 住居跡17遺物出土状況 |
| 2 住居跡2 | 2 住居跡18 |
| 3 住居跡3 | 3 建物跡1 |
| 図版 4 - 1 住居跡4 土層 | 図版 13 - 1 建物跡2 |
| 2 住居跡4 遺物出土状況 | 2 建物跡3・段状遺構2 |
| 3 住居跡4 | 3 建物跡4・段状遺構6・7 |
| 図版 5 - 1 住居跡5全景 | 図版 14 - 1 建物跡5・段状遺構14 |
| 2 住居跡5 | 2 建物跡6全景 |
| 3 住居跡5 遺物出土状況 | 3 建物跡6 |
| 図版 6 - 1 住居跡6調査風景 | 図版 15 - 1 横列1・2全景 |
| 2 住居跡6 | 2 段状遺構1・2 |
| 3 住居跡6 | 3 段状遺構1 |
| 図版 7 - 1 住居跡7 | 図版 16 - 1 段状遺構3 |
| 2 住居跡8 | 2 段状遺構4 |
| 3 住居跡9 | 3 段状遺構5 |
| 図版 8 - 1 住居跡10検出状況 | 図版 17 - 1 段状遺構8・9 |
| 2 住居跡10 | 2 段状遺構10 |

| | |
|--|--|
| 3 段状遺構11・12全景 | 1、土壙墓2、上壙墓3、土壤墓4、 |
| 図版18-1 段状遺構11・12 | 上壙墓5、土壤墓6 |
| 2 段状遺構13 | 図版27-1～8 土壙墓7、土壤墓8、土壤墓9、 |
| 3 段状遺構15 | 土壤墓10～13、土壤墓10、土壤墓11、 土壤墓12、七壙墓13 |
| 図版19-1～8 土壙2土層、土壤2、土壤15上層、土壤15、土壤16上層、土壤16、土壤17上層、土壤17 | 図版28-1～7 土壙1土層、土壤6、土壤1、土壤4、土壤5、土壤6、土壤11 |
| 図版20-1～8 土壙19、土壤22～24、土壤28、土壤29、土壤37、土壤38、土壤39上層、土壤39 | 図版29-1～7 土壙11上層、土壤13、土壤8、土壤35、土壤44、土壤33、土壤46 |
| 図版21-1～8 土壙40土層、土壤40、土壤47、土壤50、土壤51、土壤57、土壤58、土壤61 | 図版30-1～8 土壙54、土壤74、土壤55、土壤56、土壤60、土壤70、土壤73、土壤97 |
| 図版22-1～7 土壙62、土壤65、土壤66、土壤72、土壤78、土壤71、土壤76 | 図版31-1～8 土壙94土層、土壤94、土壤99土層、土壤99、土壤102、土壤103、土壤105、土壤107 |
| 図版23-1～8 土壙80、土壤83・84、土壤88土層、土壤88、土壤89上層、土壤89、土壤87、土壤90～93 | 図版32 親子発掘体験教室、現地説明会、堅穴式住居の復元 |
| 図版24-1～8 土壙90土層、土壤90、土壤91上層、土壤91、土壤92土層、土壤92、土壤93土層、土壤93 | 図版33 出土遺物(1) |
| 図版25-1～8 土壙98土層、土壤98、土壤100土層、土壤100、土壤101、土壤104、土壤108土層、土壤108 | 図版34 出土遺物(2) |
| 図版26-1～8 土壙109土層、土壤109、土壤墓 | 図版35 出土遺物(3) 図版36 出土遺物(4) 図版37 出土遺物(5) 図版38 出土遺物(6) 図版39 出土遺物(7) 図版40 出土遺物(8) |

I 津山総合流通センター造成と発掘調査に至る経過

1. 津山総合流通センター造成に至る経過

津山市は、岡山県の北部、中国山地と吉備高原の中間に位置し人口約9万人、南北19km、東西15km、面積約185km²、面積の約54%を山林・原野が占め、宅地となっているのは約11%ほどである。市内の西から南へと県内三大河川の吉井川が、加茂川や広戸川など多くの支流をしたがえて流れている。本市の地質は、主に古牛層と第三紀層、第四紀層で構成されている。また、市内最高峰は加茂町との境にある天狗守山(831.8m)である。

この盆地をぬうように昭和50年中国自動車道が開通し、市内に2つのインターチェンジ(津山・院庄)が設けられる。これが産業・教育・文化等あらゆる面に多大なる影響を与え、これを契機に工業団地(院庄工業団地、綾部工業団地、草加部工業団地、国分寺工業団地、高野工業団地、津山中核工業団地)の造成が各地で行われた。この事により阪神地域や九州地域などとの物流の拠点として、中国地方内陸部の中核都市としてますますの発展が期待された。その後、中国横断道が米子さらには総社まで開通し、瀬戸大橋を経由する事により山陰・四国地方を含めた高速交通網が整い、さらに広範囲の物流も可能となる。また、岡山空港の整備からさらに広域流通網が徐々にではあるが整いつつある。その中で、21世紀へ飛躍する物流・情報の発信基地、情報により高度化した流通団地の形成と情報ネットワークによる配送システムの確立をめざし、中国自動車道院庄インターチェンジ近くに計画されたのが、津山総合流通センターである。

2. 発掘調査に至る経過

津山総合流通センター建設予定地は、津山市と鏡野町との境に位置する約93haである。そのほとんどが津山市域であるものの鏡野町域もあるため、開発主体の津山市土地開発公社、鏡野町教育委員会、津山市教育委員会の三者が、埋蔵文化財の取り扱いについて事前に協議を行った。その結果敷地内の鏡野町域については同町教育委員会が、他の津山市域については同市教育委員会が、埋蔵文化財の有無



第1図 津山市位置図

を確認し、あわせて発掘調査も担当する事とした。その後平成7年3月に造成計画の工程が確定したため、その工程計画に合わせ、埋蔵文化財の調査を実施する事とした。

平成7年6月26日付津上公第17号で文化財保護法第57条の3第1項に基づき、津市土地開発公社理事長中尾嘉伸から「埋蔵文化財発掘の通知」が文化庁長官に提出された。この段階では周知の遺跡として認識されていたのは、田邑丸山古墳群と戸島・戸島B遺跡だけであった。しかし、開発面積が広いため、これら以外についても地形的に遺跡の立地が予想される部分については、立木伐採後に分布調査を実施する事とした。この分布調査の結果、遺跡の立地が広範囲に及ぶと予測されたので、必要箇所については確認調査を実施する事とした。確認調査はバックホーを借り上げ、幅2m程のトレンチを尾根の稜線に直行するように設定した。その結果、遺跡は敷地の東側丘陵に存在する事が判明したため、全面発掘調査は避けられない結果となった。発掘調査の対象となったのは、有本古墳群、有本遺跡（A・B地区）、上述戸島遺跡、男戸島遺跡、男戸島古墳、荒神峯遺跡、有元遺跡の7遺跡である。発掘調査に先立ち平成7年7月1日付、津教委文第48号により津市市教育委員会教育長藤原修己から文化財保護法第98条の2第1項に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知」が文化庁長官宛に提出された。なお、田邑丸山古墳群については現状のまま保存される事となった。

II 津山総合流通センター内の遺跡と周辺の遺跡

1. 津山総合流通センター内の遺跡

津山総合流通センターは、津市上田邑、下田邑、戸島、鏡野町布原、沖にまたがる約9.3haが建設予定の敷地である。その大半を占める津山市域の中に、周知の遺跡として認識されていたのは、第2回左のとおり戸島・戸島B遺跡（男戸島遺跡の一部）と田邑丸山古墳群だけであった。今回の調査に先立ち立木伐採前に事前に分布調査を行い、その際に新たに有本古墳群の一部を確認した。さらに立木伐採前の段階では樹木の繁茂がはげしく古墳の確認も困難であり、集落遺跡の存在する可能性の大きい丘陵も存在する事から、立木伐採後に再度分布調査を行い、あわせてトレント調査による確認調査を実施する事とした。その際の調査面積は約153,000m²である。その結果第2回右のとおり6遺跡（有本遺跡、上述戸島遺跡、男戸島古墳、男戸島遺跡、有元遺跡、荒神峯遺跡）を新たに確認し、結局流通センター建設予定地内の遺跡（津山市域）は合計8遺跡となり、田邑丸山古墳群が保存される以外はすべて発掘調査が行われる結果となり、発掘調査面積は約37,000m²である。なお、鏡野町域については葡萄田頭遺跡と横之木峯古墳の2遺跡が発掘調査の対象となった。

以下、各遺跡の概要を記す事にする。

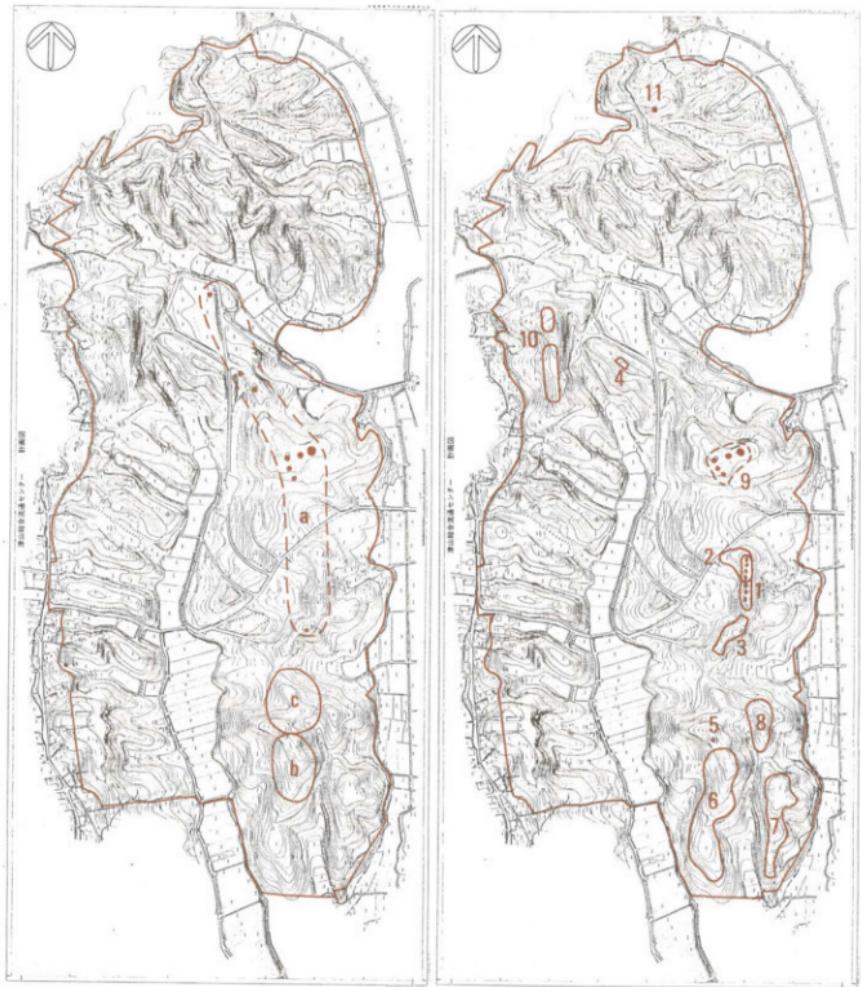
（1）有本古墳群（よりもと、第2回1）

方墳7基からなる古墳群である。埋葬施設はいずれも東西方向を向いており、竪穴式石室が1基ある以外はほとんど木棺を使用している。内部に枕石を置くもの他に鼓形器台を転用しているものもある。副葬品としては、鉄剣、鉄鎌などの鉄製品の他、ヒスイ製勾玉、碧玉製管玉、ガラス製勾玉などの装身具が出土している。これら出土遺物から時期は古墳時代前期と考えられる。

「有本古墳群」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第59集」津市土地開発公社・津山市教育委員会 1997

（2）有本遺跡（よりもと、同2・3）

弥生時代後期の集落遺跡が中心であり、便宜的にA・B両地区にわけている。A地区は住居跡4軒、



a. 田邑丸山古墳群
b. 戸島遺跡
c. 戸島B遺跡

| | |
|--------------|------------|
| 1. 有本古墳群 | 7. 荒神峠遺跡 |
| 2. 有本遺跡(A地区) | 8. 有元遺跡 |
| 3. " (B地区) | 9. 田邑丸山古墳群 |
| 4. 上戸嶋遺跡 | 10. 葡萄田頭遺跡 |
| 5. 男戸嶋古墳 | 11. 横之木崎古墳 |
| 6. 男戸嶋遺跡 | |

第2図 津山総合流通センター内周知の遺跡(左)と実際に調査した遺跡(右)(S = 1 : 10,000)

建物跡6軒、貯蔵穴4基などがある。B地区は集団墓地である。溝や石列による区画が3基ありこの区画内外で約140基の土壙墓を検出した。鉄錐、ガラス製管玉の他特殊器台の破片が出土している。これ以外に江戸時代の近世墓16基と弥生時代中期の段状遺構も検出している。

「有本遺跡他」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第62集』津山市教育委員会・津山市土地開発公社1998

(3) 上遠戸鷦遺跡（かみおんどしま、同4）

弥生時代中期の集落遺跡であり、住居跡1軒を確認した。この住居から石斧、石錘、砥石などが出土している。

「上遠戸鷦遺跡他」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第62集』津山市教育委員会・津山市土地開発公社1998

(4) 男戸嶋古墳（おんどしま、同5）

直径15.5m、高さ1.5m程の円墳で、周溝が部分的にめぐっている。埋葬施設は木棺1基で主軸は北東方向を向いている。副葬品として鉄刀2、鉄錐がある。特に鉄錐は複数が束となってまとまって出土している。また、周溝外に土師器の甕に赤色顔料を詰め高杯で蓋をしたものがあり、その周辺から滑石製の小玉も1点出土している。

「男戸嶋古墳他」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第62集』津山市教育委員会・津山市土地開発公社1998

(5) 男戸嶋遺跡（おんどしま、同6）

弥生時代中期の集落遺跡と近世墓からなる。弥生時代の集落は、住居跡18軒、建物跡7軒、貯蔵穴などからなる。住居跡から碧玉製の管玉が出土している。近世墓は9基あり、寛永通宝、くしなどが出上

| 番号 | 遺跡名 | 調査面積(m ²) | 調査期間 | 調査担当者 | 報告書刊行予定 |
|----|----------------|-----------------------|--------------------------|-------|---------|
| 1 | 有本古墳群 | 4,000 | H7.8.1~12.4 | 安川・小郷 | 平成8年度 |
| 2 | 有本遺跡(A地区) | 4,500 | H7.9.1~10.13 | タ | 平成9年度 |
| 3 | タ(B地区) | 2,800 | H7.10.13~ H8.4.10 | 小郷 | タ |
| 4 | 上遠戸鷦遺跡 | 400 | H7.12.12~12.15 | 安川・小郷 | タ |
| 5 | 男戸嶋古墳 | 650 | H8.2.16~2.28 5.7~6.14 | 小郷 | タ |
| 6 | 男戸嶋遺跡 | 14,000 | H8.2.29~10.8 | 安川・小郷 | 平成10年度 |
| 7 | 荒神船遺跡 | 6,800 | H8.5.15~12.24 | 小郷 | タ |
| 8 | 有元遺跡 | 3,200 | H8.10.4~ H9.1.20 | 安川 | タ |
| 9 | 田邑丸山古墳群 タ遺跡 | 350 | H9.1.21~4.9 | 小郷 | 平成11年度 |

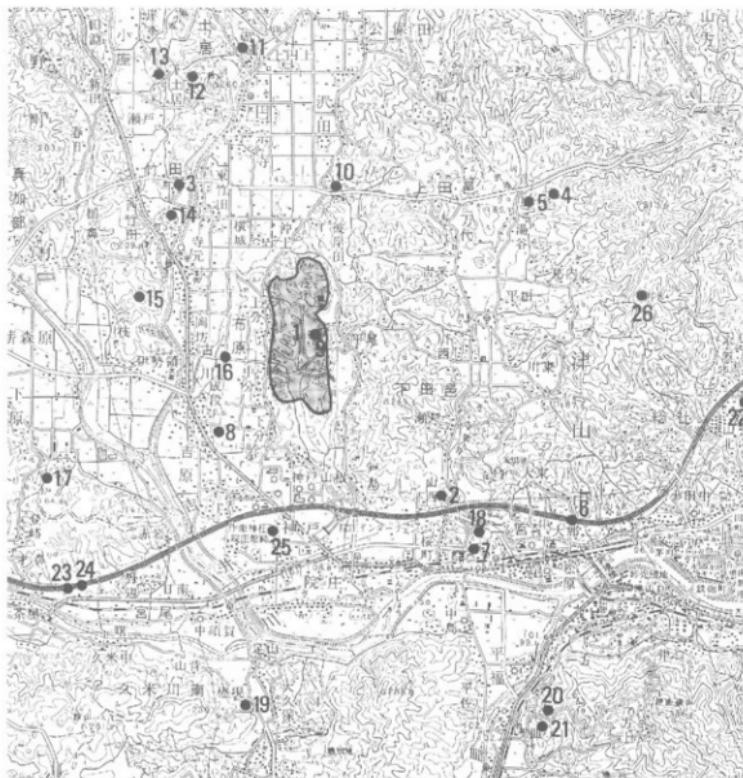
第1表 津山総合流通センター地内遺跡調査一覧表(番号は第2図に対応)

している。

(6) 荒神崎遺跡 (こうじんざこ、同7)

弥生時代後期の集落遺跡。住居跡20軒、建物跡3軒、貯蔵穴などからなる。住居跡には直径が11mを測る大形住居もある。石包丁や青銅製の銅鏡、ガラス製の勾玉、小玉などが出土している。その他、縄文時代と考えられる落とし穴や近世墓などがある。(本報告書参照)

(7) 有元遺跡 (ありもと、同8)



- | | | | |
|------------------|-------------|------------|-----------|
| 1. 津山総合流通センター内遺跡 | 8. 九番丁場遺跡 | 15. 古川3号墳 | 22. 美作国府跡 |
| 2. 大開遺跡 | 9. 田邑丸山古墳群 | 16. 大開遺跡 | 23. 久米庵寺 |
| 3. 竹田遺跡 | 10. 東花穴古墳群 | 17. 郷覗音山古墳 | 24. 宮尾遺跡 |
| 4. アモウラ東遺跡 | 11. 赤堀古墳 | 18. 美和山古墳群 | 25. 院庄館跡 |
| 5. アモウラ遺跡 | 12. 土居天王山古墳 | 19. 狐塚古墳 | 26. 神奈尾城跡 |
| 6. 二宮大成遺跡 | 13. 土居妙見山古墳 | 20. 門の山古墳群 | |
| 7. 二宮遺跡 | 14. 竹田妙見山古墳 | 21. 寺山古墳群 | |

第3図 津山総合流通センター内遺跡(トーン部分)と周辺の遺跡分布図(S = 1 : 50,000)

弥生時代後期と古墳時代後期の集落遺跡である。弥生時代は住居跡2軒、貯蔵穴などを検出した。古墳時代としては、住居跡4軒、建物跡2軒、段状遺構などを検出し、須恵器、土師器、鉄滓が出土している。

(8) 田邑丸山古墳群・遺跡（たのむらまるやま、同9）

円墳9基で構成されていたが現存するのは5基である。その内1号墳は直径37mの円墳で堅穴式石棺から乳文鏡1面、鉄斧、剣、車輪石形銅器2点が出土している。2号墳は、円墳と考えられていたが、確認調査の結果全長40m程の前方後方墳で堅穴式石棺から鏡が4面出土したと伝えられているが、所在は不明である。3～5号墳については出土遺物は知られていない。また、9号墳（古墳かどうかは不明）から鼓形器台の破片が発見されている（註1）。本古墳群（1～5号墳）は緑地公園として整備された。また、古墳の東側の丘陵斜面から弥生時代の住居跡2軒が検出された。

(9) 葡萄田頭遺跡（ぶどうだがしら、鏡野町、同10、註2）

弥生時代中期から後期の集落遺跡。住居跡、建物跡、貯蔵穴、木棺墓などを検出。

(10) 横之木崎古墳（まきのきざこ、鏡野町、同11、註2）

円墳で埋葬施設は木棺と推定される。須恵器が出土しており、6世紀後半ごろの古墳である。

2. 周辺の遺跡

津山総合流通センターは、吉井川の支流戸鳥川右岸の南北に長い低丘陵一帯が敷地であり、樹枝状に小さな丘陵が派生している。周辺では西側の鏡野町布原地区にかなり広い平野部が存在するが、反対の東側は西側ほど広くではなく、どちらかと言えば奥まった地形である。そのため集落としての生活基盤を周辺に求めると西側の布原地域の方が重要視されていたと考えられる。この事が周辺の遺跡の分布状況（西側の鏡野町側に多い）からも伺える。

以下周辺の遺跡を時代別に概観してみる（第3図参照）。

(旧石器・縄文時代)

旧石器時代の遺跡としては、大開遺跡（津山市、註3）が知られており、ナイフ形石器が1点出土している。この遺跡では縄文時代早期の押頬文土器や石鏃などが出土しているが明確な遺構は確認されていない。同じく早期の遺跡として、竹田遺跡（註4）がある。この遺跡では住居跡6軒などの遺構が検出され、数多くの土器片と石鏃などが出土している。流通センター内の遺跡では遺物の出土はほとんどないが、狩猟用の落とし穴と考えられる遺構が多数検出されている。

(弥生時代)

この時代は丘陵上に集落が営まれている事が多い。中国自動車道建設などに伴い調査された「宮大成遺跡（註5）、二宮遺跡（註6）、アモウラ遺跡（註7）などがあり、大開遺跡（津山市）では、住居跡4軒が検出され板状铁斧が出土している。また竹田遺跡（註8）では、列石による区画をもつ墳墓が調査されている。この墳墓は埋葬施設として土壙墓14基、土器棺4基があり、後期前半頃の所産である。また、九番丁場遺跡（註9）では、直径11.9mの大形住居からガラス製の管玉が出土している。

(古墳時代)

集落遺跡としては西側布原地域の平野部に大開遺跡（鏡野町、註10）があり古墳時代初頭の住居跡が検出されている。また、アモウラ東遺跡（註11）では、住居跡や段状遺構が検出され鐵滓や須恵器、土師器が多量に出土し、6世紀末から7世紀初頭頃と考えられている。古墳では吉井川の流域と内陸部で

は、古墳群の構成が大きく異なっている。内陸部では円・方を主体とした古墳群であるのに対し、流域では前方後円墳が一定間隔に築かれている。内陸部では流通センター予定地内の有本古墳群（方墳）、東花穴古墳群（方墳7基、註12）などがあり、前方後円墳は見られない。逆に吉井川流域では、美作最大の美和山1号墳（全長80m註13）、狐塚古墳（全長60m註14）、郷親音山古墳（全長43m註15）、古川3号墳（全長30m註16）、赤峰古墳（全長45m註17）、竹田妙見山古墳（全長36m註18）、土居天王山古墳（全長27m註19）などがあり、首長の系譜がある程度たどれる地域である。

（古代以降）

古代になり東4kmに美作国府（註20）が沖積地を臨む段丘上につくられると、南西3kmには出雲街道沿いに久米郡に比定されている宮尾遺跡（註21）、久米庵寺（註22）が隣接して存在する。また、中世になると院庄館跡（註23）が南1.5kmに置かれる。この事から、おそらくこの辺りが古代～中世にかけて交通の要所であった事が伺える。ただ近世になるとこの院庄もお城の候補地としてあげられるが、東5kmの鶴山に津山城が築かれ、同時に城下町や街道が整備されていく。

（註1）上居徹他『田邑丸山古墳群』津山市文化財年報1 津山市教育委員会1975

（註2）鏡野町教育委員会立石盛洞式に御教示を得た。

（註3）平岡正宏「大開古墳群・大開遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第51集』津山市教育委員会1994

（註4）上居徹『竹田遺跡』『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会1986

（註5）栗野克巳他『二宮大成遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告6』岡山県教育委員会1973

（註6）高畠知功他『二宮遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28』岡山県教育委員会1979

（註7）1981～1982年広域林業構造改善事業文化財発掘調査委員会が調査を実施。報告書未刊。

（註8）今井亮他『竹田墳群』鏡野町教育委員会1984

（註9）氏平昭則「九番丁場遺跡」「最近の岡山県下における埋蔵文化財発掘調査概要の報告会」1996

（註10）鏡野町教育委員会が1994年～1995年、岡山県教育委員会が1995年に調査。

井上弘「因道179号改貢工事に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告26』岡山県教育委員会1996

（註11）行田裕美「アモウラ東遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第36集』津山市教育委員会1990

（註12）立石盛洞「鏡野町東花穴古墳群の調査」「調査団ニュース第3号」岡山県遺跡保護調査会1992

（註13）中山俊紀「史跡美和山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第42集』津山市教育委員会1992

（註14）小郷利幸「狐塚古墳」「前方後円墳集成中国・四国編」山川出版社1991

（註15）土居徹「郷親音山古墳」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会1986

（註16）安川豈史「古川3号墳」「前方後円墳集成中国・四国編」山川出版社1991

（註17）近藤義郎「赤峰古墳」「岡山県史考古資料」岡山県史編纂委員会1986

（註18）七居徹「美作鏡野町土居妙見山古墳」「古代吉備第6集」古代吉備研究会1969

（註19）安川豈史「土居天王山古墳」「前方後円墳集成中国・四国編」山川出版社1991

（註20）岡田博他「美作国府」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告6」岡山県教育委員会1973

岡田博「美作国府跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告21」岡山県教育委員会1978

安川豈史「美作国府跡」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告第50集」津山市教育委員会1994

（註21）橋本聰司他「宮尾遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4」岡山県教育委員会1973

（註22）栗野克巳「久米庵寺」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4」岡山県教育委員会1973

栗野克巳「久米庵寺」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告24」岡山県教育委員会1978

（註23）河本清「史跡院庄館跡発掘調査報告」津山市教育委員会1974

行田裕美「史跡院庄館跡」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告第7集」津山市教育委員会1981

III 遺跡の立地と調査の経過

1. 遺跡の位置と立地

荒神峪遺跡は岡山県津山市戸島662他に所在する。津山総合流通センター内の遺跡は約93haの敷地内の中央に南北存在する谷を挟んで東西に分布し、その中でも遺跡の多くは東側部分に存在する。本遺跡は流通センター建設予定地の南東端に位置し、南北にのびる丘陵線線上に立地する（第4図参照）。西側にも同様な丘陵があり、この部分には男戸鷦遺跡が存在し、その北最高所には円墳である男戸鷦古墳が単独で立地している。また、荒神峪遺跡の北側にも鞍部を挟んでやや低い丘陵があり、この部分にも有元遺跡が存在する。これら遺跡はいずれも弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡が中心である。荒神峪遺跡の立地する丘陵は北側に最高所があり標高148mで、遺跡の範囲は標高およそ133～148m、遺跡の東側には戸島川流域の平野部があり、この平野部との比高差はおよそ13～28mである。

2. 調査経過

(1) 調査に至る経過

流通センター建設予定地内で周知の遺跡は田邑丸山古墳群と男戸鷦遺跡だけで、その他の遺跡については樹木伐採後の分布調査や確認調査によって確認されたものである。今回新たに確認された遺跡は有本遺跡、有本古墳群、上戸島鷦遺跡、男戸鷦古墳、荒神峪遺跡、有元遺跡、田邑丸山遺跡の7遺跡と周知の男戸鷦遺跡の範囲が広範囲に及ぶことが確認された。そのため、これら8遺跡の調査面積は36,700m²にも及び、調査期間も限られているため、年間の調査計画を立て造成工事計画にも合わせて調査を実施していった。まず、有本古墳群から調査を開始し随時継続して各遺跡の調査を実施した。各遺跡の調査期間などについては第1表を参照していただきたい。

以下、荒神峪遺跡を中心に調査の経過を述べる。

(2) 調査の経過

平成8年5月15日から遺構の検出を開始した。表土を重機で除去した段階で、丘陵の斜面全域に遺構が存在することが判明し、南側から随時遺構の検出、掘り下げを行っていった。主な遺構は住居跡、建物跡、段状造構、土壤（貯蔵穴、落とし穴）などである。7月26日には小学生を対象とした夏休み親子発掘体験教室を実施し、親子27名が参加した。親子には住居跡12の柱穴を実際に掘ってもらった。その際、偶然にも一つの柱穴の埋土から青銅製の銅鏡の破片が出土した。津山市内では初めての出土で県内でも3例目であった。その後、遺構の検出がほぼ終了し、10月22日にラジコンのヘリコプターで航空写真を撮影した。また、12月14日には一般を対象とした現地説明会を実施した。当日は天気にも恵まれ参加者は市内外から約110名であった。その後遺構の測量を行い、12月24日には調査が終了した。その後は有元遺跡の調査が継続して行われ、並行して有本古墳群の報告書作成を行った。翌平成9年1月21日からは田邑丸山古墳群の調査を開始した。この古墳群については古墳公園として保存されるため、各古墳に確認調査のトレチを入れ、古墳の規模や構造などを確認した。その結果、円墳のみで構成されると考えられていた本古墳群が円墳と前方後方墳で構成される事がほぼ判明した。また、この古墳群の南側の丘陵で造成工事中に住居跡が2軒が見つかり、急遽調査を実施した。3月27日には流通センター内のすべての発掘調査を終了した。その後、平成8年度に「有本古墳群」の報告書、平成9年度に「有本遺跡・上戸島鷦遺跡・男戸鷦遺跡」の報告書を、平成10年度に本報告書（荒神峪遺跡）を作成した。

(3) 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は以下の通りである。

| | |
|--------------|--------------------------------|
| 津山市教育委員会 教育長 | 藤原修己（～H. 8. 9. 30） |
| | 松尾康義（H 8. 10. 1～） |
| 教育次長 | 内田康雄（～H 8. 3. 31） |
| | 中尾義明（H 8. 4. 1～H 9. 3. 31） |
| | 山本直樹（H 9. 4. 1～H 10. 3. 31） |
| | 菊島俊明（H 10. 4. 1～） |
| 文化課長 | 柳山三千穂（～H 9. 3. 31） |
| | 水禮宣子（H 9. 4. 1～） |
| 文化財センター所長 | 神田久遠（～H 10. 3. 31） |
| | 中山俊紀（H 10. 4. 1～） |
| 主査 | 安川憲史（調査担当） |
| 主事 | 小郷利幸（　　） |
| 主任 | 青木睦子（事務担当、～H 8. 9. 30） |
| 主事 | 坂本裕子（　　、H 9. 4. 1～H 10. 3. 31） |
| 事務員 | 川村雪絵（　　、H 10. 4. 1～） |

整理作業は文化財センター野上恭子、岩木えり子、家元弘子、小澤かおり、大谷ゆかり、丸王佳苗、橋本玲恵、浅岡美恵、広政美智子、八幡佳奈絵、山本有希、上原香里、三谷順子が担当した。

発掘作業は社団法人津山市シルバー人材センターにお願いした。作業従事者は下記の方々である。

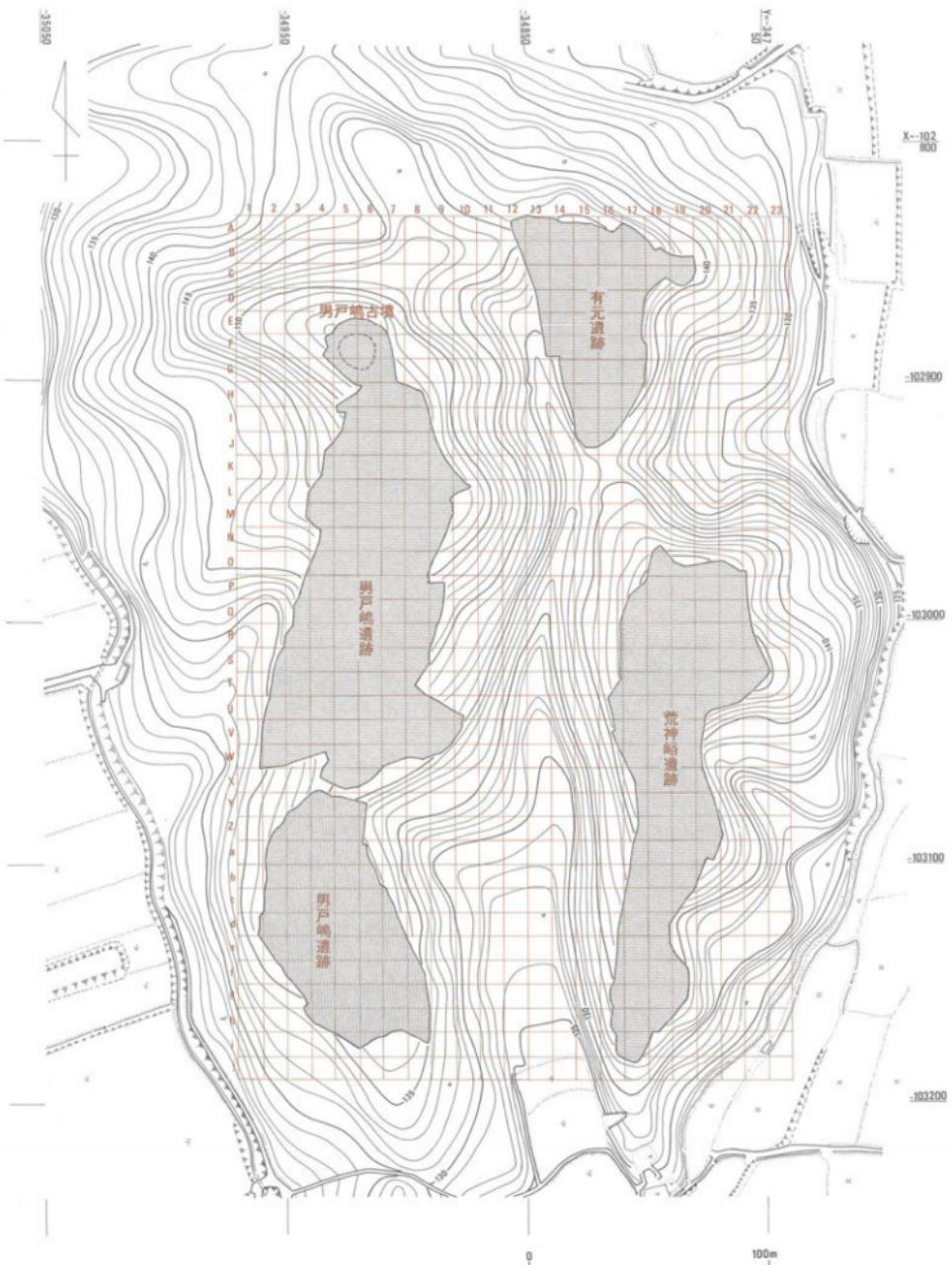
（敬称略）

（調査作業員）青木 保、内田克巳、内田久仁男、沢 保、柴田揚一、杉山由和、高山 実、田口晴道、田中琢志、中尾一雄、中村 信、西本 徳、橋本 満、平林一好、広野 守、細田憲一、三好昭二、水島友一、水杉曉四、横部 明、米井英祐、脇山 康、脇山静馬、青木敦子、青木照美、青木敏子、稻村奈美子、右近冬子、内田秀子、内山美喜子、坂手美恵子、高橋不三子、高山祥子、田淵高子、橋本琴枝

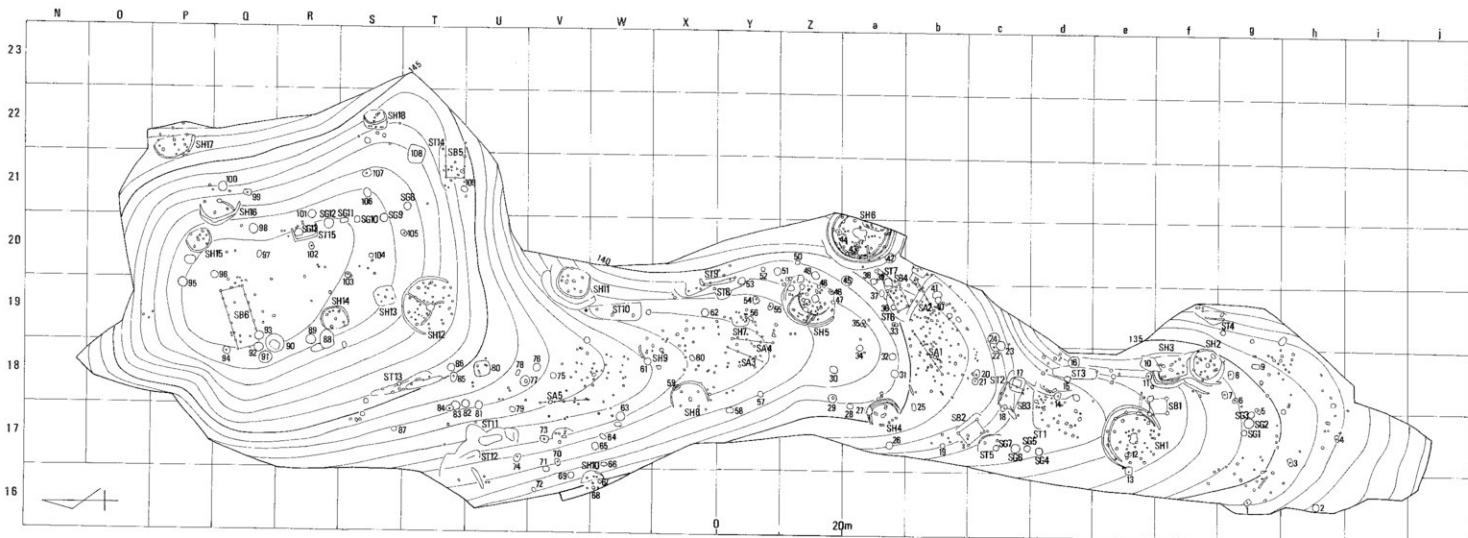
（学生アルバイト他）赤坂健太郎、為貞義弘、仁木良知、藤本 優、片岡大助、田淵芳宣、熊代昌之、細川 浩、八木利恵、春名葉子

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで、津山弥生の里文化財センター職員及び下記の方々の指導、助言、協力を得た。記して厚く御礼申し上げます。（敬称略）

綾野早苗、小野雅明、肥塚隆保、小暮律子、近藤義郎、佐藤寛介、島崎 東、白石 純、高畠知功、高橋進一、立石盛詞、土居 徹、仁木康治、平井泰男



第4図 荒神崎遺跡周辺地形図及びグリッド配置図(S=1:2,000)



(数字のみは十進の番号)

第5図 児神山遺跡遺構全体図 (S = 1 : 600)

IV 調査の記録

荒神船遺跡は、標高133～148mの丘陵上に存在する弥生時代を中心とした集落遺跡である。その他の時代としては近世の墓地などが点在する。以下各時代ごとに遺構・遺物の説明をおこなう。

1. 弥生時代

弥生時代と考えられる遺構は住居跡18、建物跡6、柵列5、段状遺構15、土壙などがあり、その他多数の柱穴を検出している。これら柱穴には埋土に土器片が含まれているものもあり、建物などになるものもあると考えられる。ただ現状では、確認できていないものがあり、遺構の実数はさらに増える可能性がある。

(1) 住居跡

住居跡1 (SH1、第6・7図)

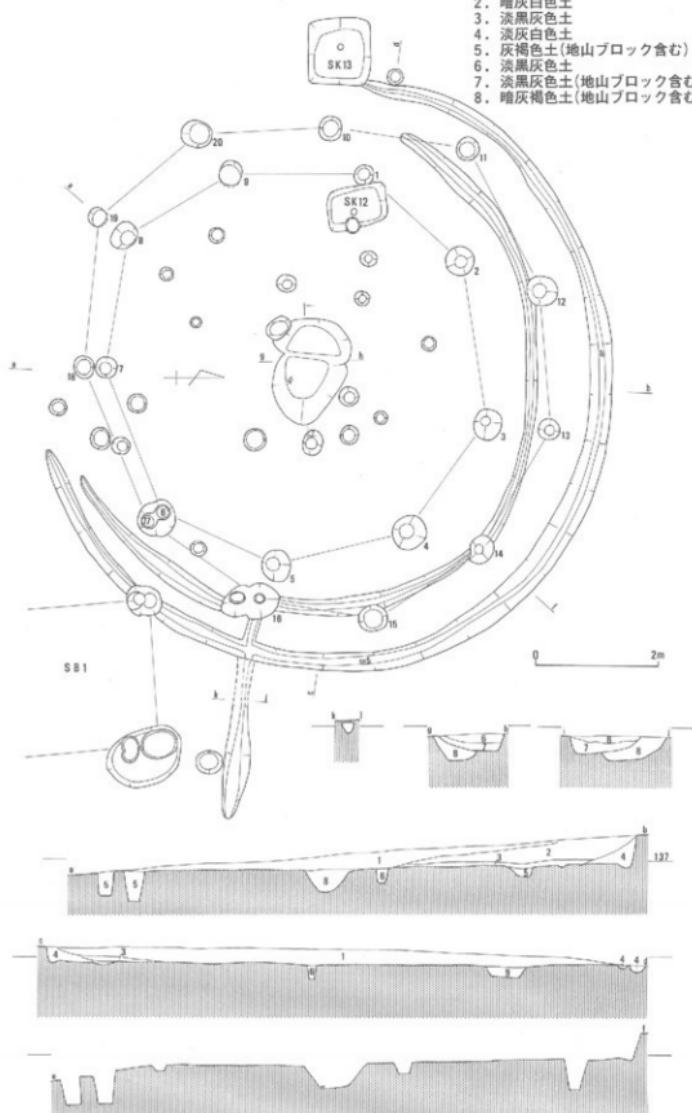
e・f-17・18区、丘陵の後線先端部分に存在する。円形の住居跡で1回の建て替えにより同心円状に拡張している。最初は直径8.25m程で壁溝は南斜面側が三分の一程度存在しない。柱穴は9本（1～9）で9のみやや内側にえぐるように掘られている。この時の中央穴は土層関係から東側のものである。この内部には小さな石が1個ある。また、東側の柱穴16の辺りで壁溝から外に溝が伸びているが、これが当時暗渠のようになっていたかは明瞭でない。1回の建て替えによりほぼ同心円状に拡張し直径は9.8mである。これの壁溝も南斜面側が三分の一程度存在しない。柱穴は11本（10～20）で16のところのみ2本あり、17は6と重複している。19は内側にえぐれる形に掘られている。壁溝は柱穴16の東側で暗渠となり、溝が外側の斜面下方に伸びている。この暗渠部分は長さ70cm程残存し、断面はV字形である。この住居の中央穴は西側の穴で埋土は2層である。壁溝内から石包丁（第7図5）が出土している。また、本住居と上塙12・13、建物跡1が重複している。土壙12は深さがあまりない事から、少なくとも住居が作られる前に存在していたものと考えられる。土壙13との関係は明瞭でない。建物跡1との関係はこの建物の柱が住居の壁や溝を切っており、建物の方が新しい。本住居の基本土層は4層で、上層から土器片や砥石、炭片などが出土している。また柱穴5から上器片、柱穴12から土器と炭片が少量出土している。出土遺物は第7図に図示している。

1は裏の口縁部で屈曲し端部を下方につまんでいる。外面には装飾は見られない。2・3は底部であるが調整は明瞭でない。4はミニチュアの壺で底部は欠損する。口縁部付近に円孔が1カ所残存する。全体の調整はナデ仕上げである。5は緑色片岩製の打製石包丁、6は頁岩製の砥石で上下2面に使用痕があり、節理面にそって真ん中辺りで二つに割れている。

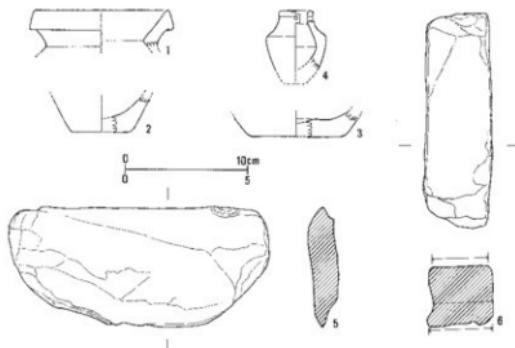
住居跡2 (SH2、第8・9図)

f・g-18区、住居跡1の東斜面、住居跡3と切り合っている。土層関係から住居跡2の方が新しい。この住居は1回の建て替えで拡張している。最初は直径5.2m程の円形で壁溝は斜面側が搅乱を受け一部存在しない。柱穴は4本（1～4）で1のみ2段に掘られている。1回の建て替えで直径5.85mとなり、最初より若干大きくしている。さらに上方外側には幅50cm程の溝が巡り、その間約1m程がテラスとなっている。壁溝は部分的しか存在せず、また東側は拡張前の壁溝を再利用している。柱穴は5本（5～9）で6は2と切り合っている。中央穴はおそらく拡張前のものをそのまま使用しているものと推測される。本住居の基本土層は2層で、上層からこの住居とは関係無い鉄滓と須恵器、鉄製品が出土している（第60図）。また埋土から土器や炭片、棒状の石、サスカイト片が、柱穴8から土器、炭片が

1. 黒灰色土
2. 暗灰白色土
3. 淡黒灰色土
4. 淡灰白色土
5. 灰褐色土(地山ブロック含む)
6. 淡黒灰色土
7. 淡黒灰色土(地山ブロック含む)
8. 暗灰褐色土(地山ブロック含む)



第6図 住居跡1平・断面図($S = 1 : 80$)



第7図 住居跡1出土遺物(1~4…S=1:4、5・6…S=1:2)

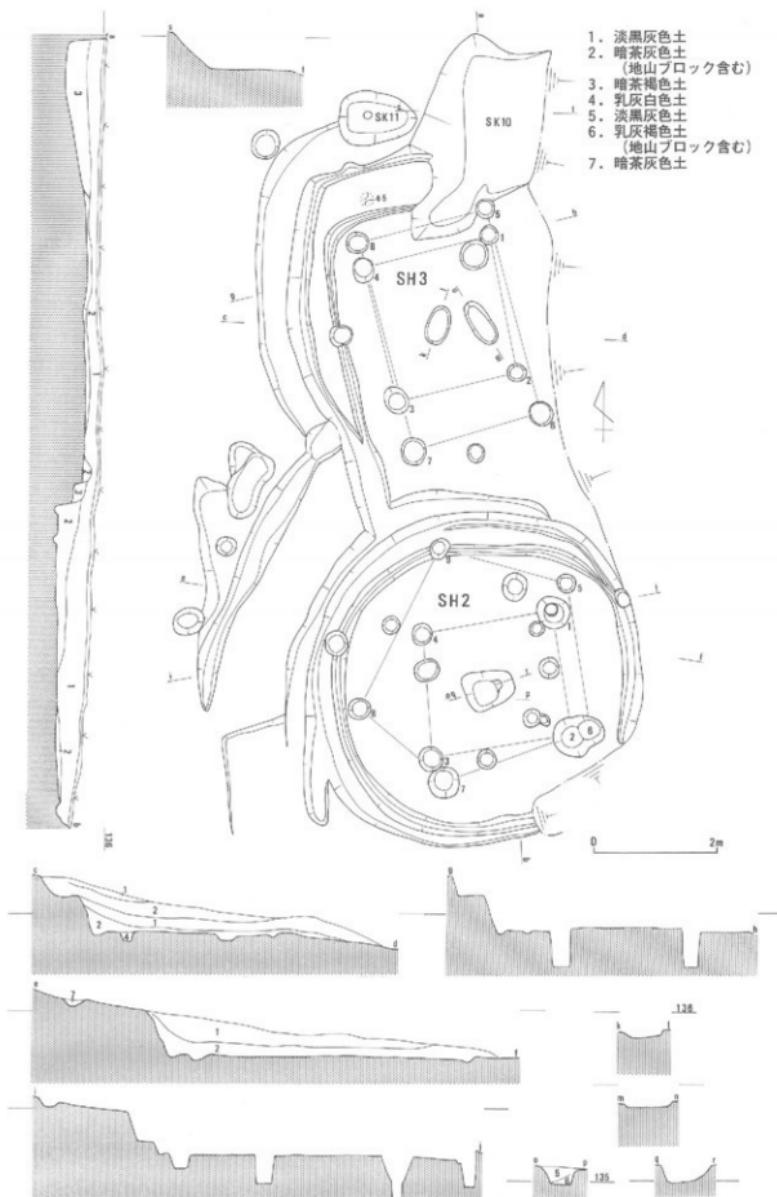
少量出土している。出土遺物は第9図に図示している。

1が出土遺物で壺か甌の底部の破片で、外面には指頭圧痕がある。

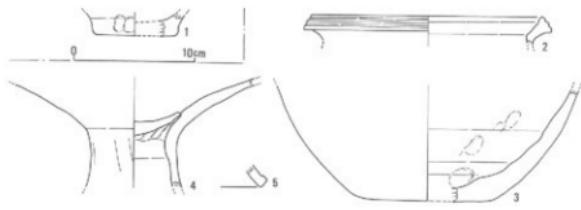
住居跡3 (S II 3、第8・9図)

e・f-18区、丘陵斜面に住居跡2と切り合って存在する。住居跡2によって切られ、斜面側も床面がかなり流失しているため、住居の平面形態は明瞭でないが、方形ないしは長方形の住居と考えられる。これも1回の建て替えで拡張している。壁溝が北西コーナー部分しか存在しないため、規模は明瞭でないが最初は一辺4×3m程と推測される。柱穴は4本(1~4)で中央穴はそれらしきものが2つありどちらかは明瞭でない。1回の建て替えで一辺6×5m程に拡張しているが、これについても壁溝は北西コーナー部分しか存在しない。この段階で上方が1段掘られ、この部分が幅0.7m程のテラスになっている。柱穴は4本(5~8)で床面から土器(第9図4・5)が出土している。この住居と土塙10・11とが重複しており10については住居跡3を切っており、11については明瞭でないが、住居跡3によって切られているものと推測される。本住居の土層は4層であるが2層を基本としこれの互層である。中央穴は前述のごとく2つあり明瞭でない。柱穴3から上器片(同2)が出土し、出土遺物は第9図に図示している。

2は甌の口縁部で屈曲し口縁外面に2条の凹線がめぐり、3は底部の破片で外面の調整は不明だが、内部には指頭圧痕が見られる。4・5は同一個体と考えられ高杯の類いであるが上部は不明である。内部は内壁充填しており、外面には縱方向の細い線刻が間隔をあけて4箇所残在する。また、図示していないが花崗岩製の丸い石が1点出土している。



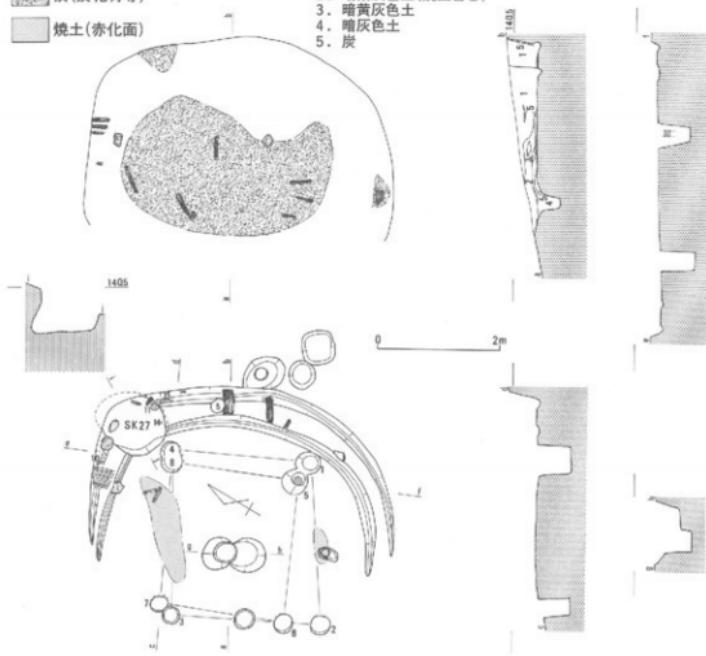
第8図 住居路2・3平・断面図 (S = 1 : 80)



第9図 住居跡2・3出土遺物(S=1:4)

■ 塚(炭化材等)
■ 燐土(赤化面)

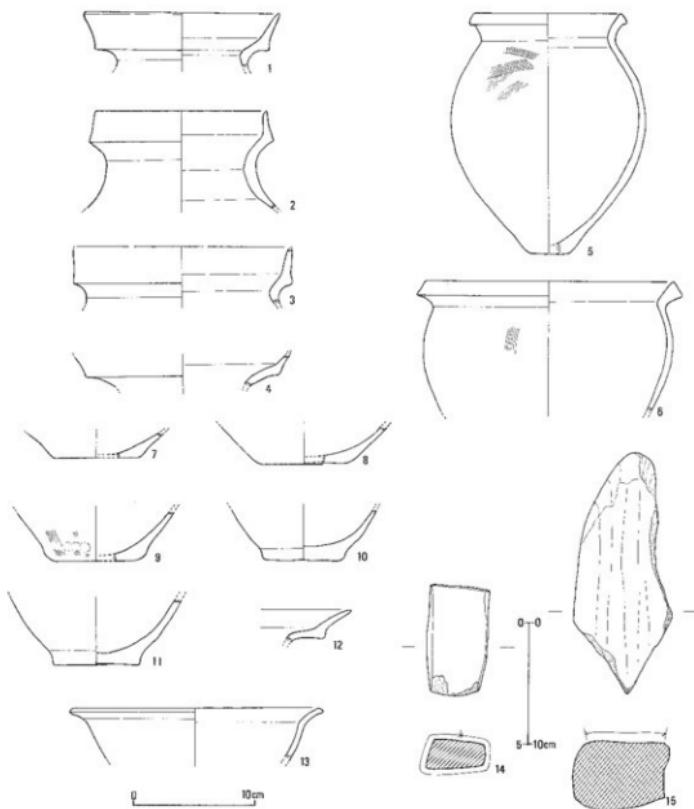
1. 暗灰白色土
2. 暗茶灰色土(焼土含む)
3. 暗黄灰色土
4. 暗灰色土
5. 塚



第10図 住居跡4 平・断面図(S=1:80)

住居跡4 (SH4、第10・11図)

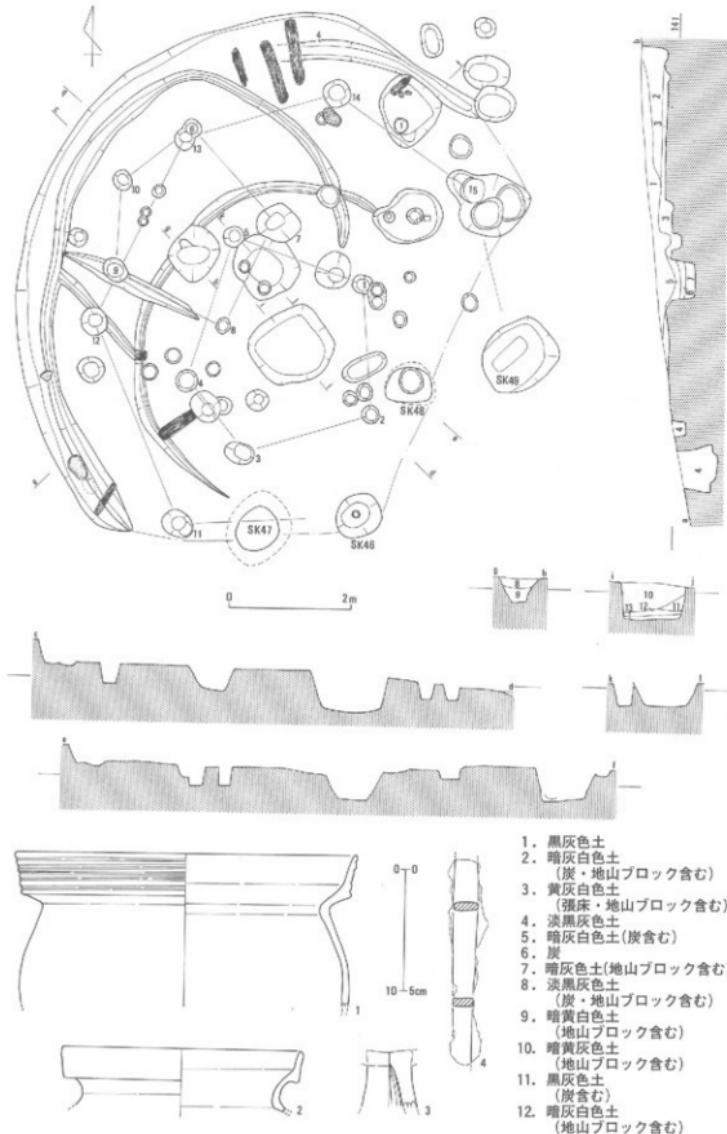
a-17・18区、稜線の西斜面に存在する。土層関係から建て替えにより縮小している。最初は直径5m程の円形住居であるが、壁溝は山側のみ存在する。この住居は焼失しており、床面に炭化した柱材、壁側に炭化した板状の材、南側壁寄りでカヤか何かを格子状に織った炭化物などが出土している。柱穴は4本(1~4)で、中央穴は2個ある内の南側である。土壙27はこの住居の段階に掘られているようである。また床面から砥石(第11図14・15)、土器片(同5・11)が出土している。この住居が焼失し



第11図 住居跡4出土遺物(1~13・15 S = 1:4、14 S = 1:2)

埋められた段階で、再度直径4.5m程の円形住居が作られている。ほとんどの住居が建て替えにより拡張しているのに対し、この住居は縮小している唯一の例である。この住居も焼失しており、特に中央部で炭化した柱材や炭が広範囲にかたまって出土している。柱穴は4本（5~8）である。5には柱の痕跡が確認できた。部分的ではあるが、柱材が炭化して残存しており柱材は直径16cm、長さ6cmを測る。中央穴は北側のもので南側のものより一段深く掘られている。また、床面には焼土面が2カ所存在する。埴土からは土器片が多数出土しているが、その内図示できたものを第11図に図示している。

1・2は壺の口縁部で1は屈曲して開きぎみに立ち上がり、2はやや内傾して立ち上がる。3~6は甕と考えられ、5は破片からはほぼ完形に復元できる。口径12cm、器高19.7cmを測り、口縁は屈曲して端部を下方につまんでいる。胴部外面にはハケがかすかに確認でき、一部に煤が付着している。内面の調整は明瞭でない。7~11は底部で10・11のように明瞭に底部を作り出しているものがあり、9にはハケの痕跡があり、下部にはその上から指でナデている。12は小片のため明瞭でないが、甕の口縁部であ



第12図 住居跡5平・断面図($S=1:80$)及び出土遺物(1~3 $S=1:4$ 、4 $S=1:2$)

ろう。13は口縁がくの字に屈曲する器形であり、鉢と考えられる。14・15は砥石で14は頁岩製で4面に使用痕がある。15は砂岩製でかなり大きめの石で途中で折れている。上面はややくほんおり使用痕が見られる。

住居跡5（SH5、第12図）

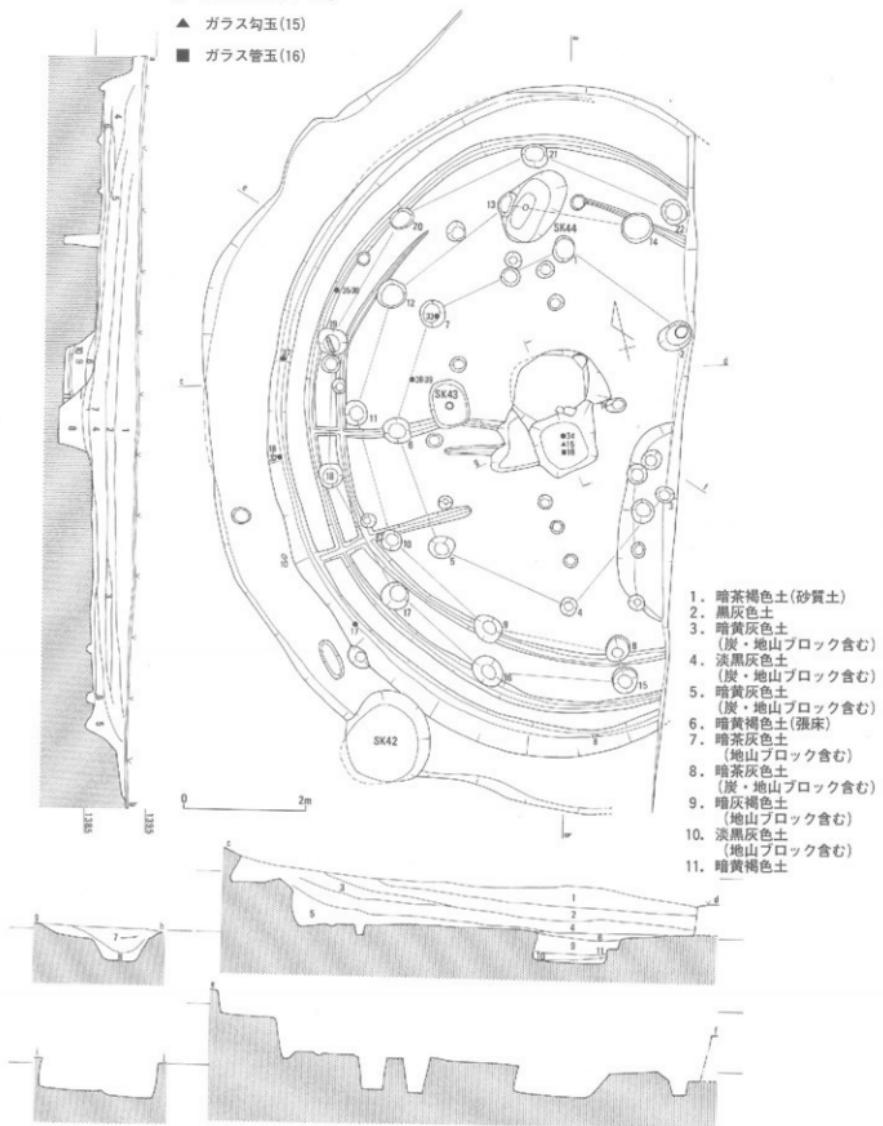
Z-19・20区、稜線の東緩斜面に存在する。基本的には2回の建て替えが行われているが、建て替えと言うよりは3軒の住居が重複しているように見える。最初は直徑5.3m程の円形住居で、壁溝は山側のみ残存し、柱穴は5本（1～5）である。中央穴は、中心に大きいのがあるが（上層ポイントi-j）、これは一番新しい段階の住居にも伴うものであるため、この部分は大きく改変された可能性も考えられる。その次に造られたのが、一辺4.6m程の隅丸方形住居で北西よりにややすらして造られている。これも柱穴は5本（6～10）で中央に中央穴（上層ポイントg-h）が存在する。その後これらを取り込む形で直径9.3m程の円形住居が造られる。柱穴は5本以上（11～15）と考えられ、おそらく7本と推測されるが、残りの2本は土壤46・49と重複しているため、存在位置を確認できていない。この住居は焼失しており、壁に沿って放射状に炭化した柱材が部分的に確認できる。この住居の中央穴は南側のもの（上層ポイントi-j）とその北側のもの（同k-l）が考えられる。また北側の壁溝から鉄器片（第12図3）が出土している。床面には柱穴以外の大きめの土壙が複数あり、その内土壤47・48はその形態から貯蔵穴と考えられ、この住居に伴う可能性が考えられる。ただ48は土層関係からは明瞭でないが、柱穴と重複している可能性もある。さらに土壤46・49はその形態から落とし穴と推測され、住居内に存在するには不自然であり、この住居とは時期が異なるものと推測される。その他の土壙も内部から土器が出土しており、本住居に伴うものもいくつかあるものと推測される。本住居の基本上層は3層で、3は前の段階の住居を埋めた際の張り床である。出土遺物は土器片の他、鉄器、石などがあり第12図に図示している。

1は柱穴14と15の間の大きめの土壤から出土した甕である。口縁は屈曲しやや開きぎみに立ち上がり外面には5条の凹縫がめぐるが、底部付近の形態は不明である。胴部の調整も摩滅のため明瞭でない。2は甕の口縁部であるがかなり摩滅しているため内外面の調整は明瞭でない。3は高杯の脚部で内面にはしばり痕がある。4は断面が長方形の長さ8.5cm程の棒状の鉄製品であるが両端が欠損する。そのため刃部などは存在しない。その他図示していないが、丸い石など自然石が多く出土している。

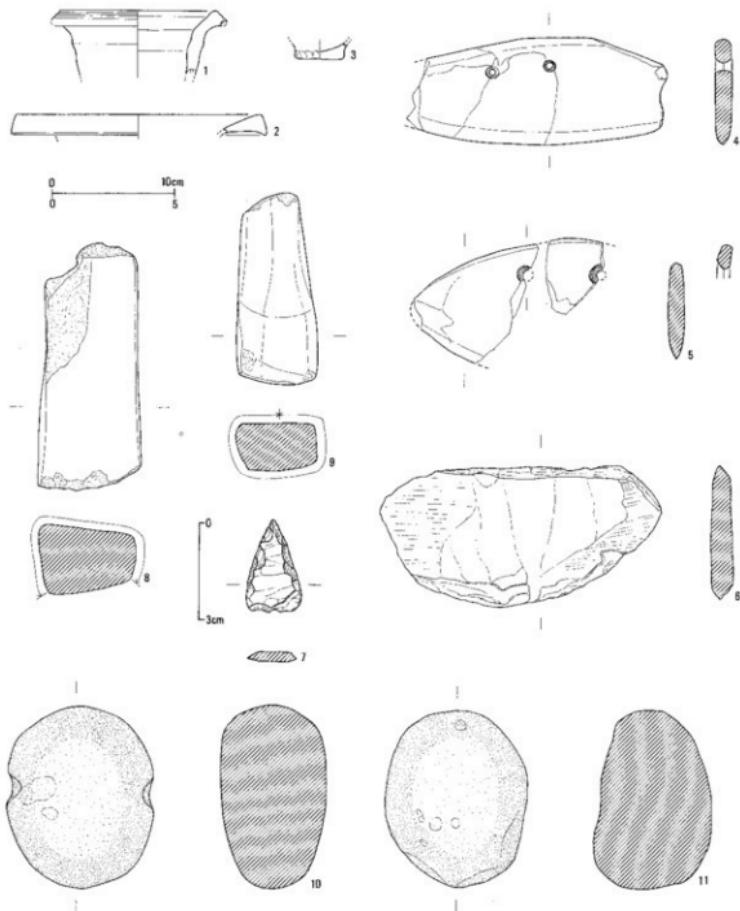
住居跡6（SH6、第13～15図、第2表）

Z-a-20・21区、住居跡5の東斜面に存在するが、調査区のため住居の三分の二程しか調査していない。この住居も2回の建て替えにより同心円状に拡張している。最初は長径7.6m、短径約6.5m程の楕円形に近い円形住居で、柱穴は7本（1～7）で、中央穴は二つある内の北側のものである。ただこの中央穴は1回の拡張時でも使用されているため、改変されている可能性がある。1回の拡張で長径約9.5m程の楕円形住居となり、柱穴は現状で7本（8～14）確認でき、おそらく10本柱と推測される。中央穴は前段階と同じ北側のものである。2回目の拡張で直径11mの楕円形住居となり、さらに外側が1段掘られ幅1m程のテラスが山側のみ存在する。このテラスを含めて計測すると長径約13mをゆうに越え、本遺跡内では最大規模である。柱穴は現状で8本（15～22）確認できおそらく12本柱と推測される。本住居の土層関係をみると1は整地上で遺物をほとんど含まずほぼ水平に堆積している砂質土である。2～5はほぼ自然堆積である。6は前段階の住居の床面の上に張られた張り床である。この住居と土壤42～44が重複しており、特に42は貯蔵穴と推測され本住居に伴う可能性が大きい。43・44については落

- ガラス小玉(17~39)
- ▲ ガラス勾玉(15)
- ガラス管玉(16)

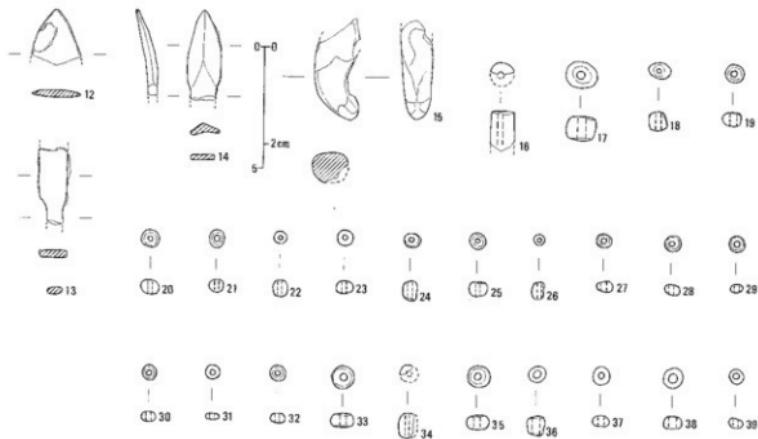


第13図 住居跡6 平・断面図(S=1:80)



第14図 住居跡6出土遺物(1)(1~3…S=1:4、4~6、8~11…S=1:2、7…S=2:3)

と穴であり、時期的には異なるものである。また、調査区の東壁中央に円形の落ち込みがかかっている。これについては上層観察からこの住居ができる前段階のものと考えられ、その意味では別遣構ではあるが、性格については明瞭でない。本住居の出土遺物は豊富で、壁溝内や周辺の床面付近からガラス製小玉が22点(●、第13図17~33、35~39)が散在的に出土し、南側の中央穴埋土からもガラス製小玉1点(●、同34)、ガラス製勾玉・管玉(▲・■、同15・16)各1点が出土している。その他、西側テラス部分から石錐(同10)、南側壁溝内から砾石(同8)、埋土から、ヤリガンナ、鉄鏃、石包丁、石鏃などが出土している。出土遺物は第14・15図に図示している。

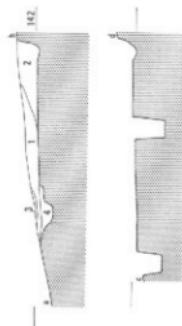
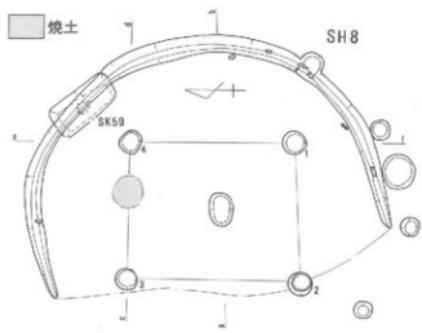
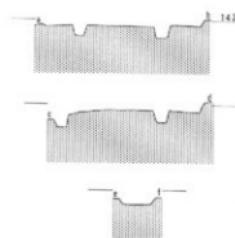
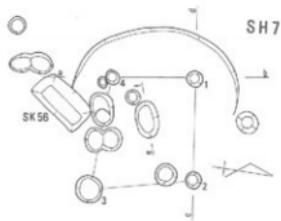


第15図 住居跡6出土遺物(2)(12~14…S=1:2、15~39…S=1:1)

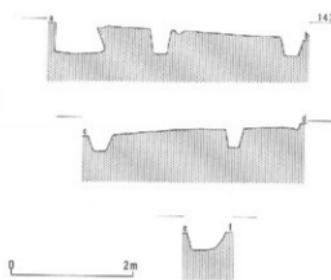
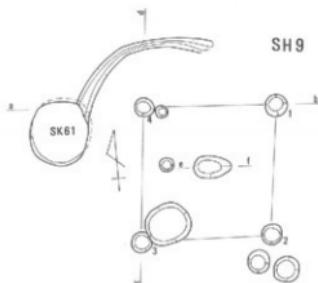
| 勾玉 | | | | | (mm) | No. | 全長 | 径 | 孔径 | 材質 | 色調 |
|-----|-------|-------|-----|-----|------|-----|-----|-----|-------|-----|-----|
| No. | 全長 | 幅 | 厚さ | 材質 | 色調 | 25 | 3 | 3.8 | 1 | ガラス | 濃青色 |
| 15 | 21 | 6.4 | 6.6 | ガラス | 乳緑青色 | 26 | 3.5 | 2.5 | 1 | タ | タ |
| | | | | | | 27 | 2.1 | 3.5 | 1.1 | タ | タ |
| | | | | | | 28 | 2.3 | 3.2 | 1 | タ | タ |
| | | | | | | 29 | 2 | 3 | 1 | タ | タ |
| | | | | | | 30 | 2 | 3 | 1 | タ | タ |
| 管玉 | | | | | | 31 | 1.4 | 3 | 1.1 | タ | タ |
| No. | 全長 | 径 | 孔径 | 材質 | 色調 | 32 | 2.1 | 3.1 | 1 | タ | タ |
| 16 | (8.2) | (4.9) | 1.2 | ガラス | 乳緑青色 | 33 | 3 | 5 | 1.5 | タ | 淡青色 |
| 小玉 | | | | | | 34 | 5 | (3) | (0.8) | タ | タ |
| No. | 全長 | 径 | 孔径 | 材質 | 色調 | 35 | 3 | 4.5 | 1.3 | タ | タ |
| 17 | 5 | 6.3 | 1.9 | ガラス | 淡青色 | 36 | 4.2 | 3.8 | 1.8 | タ | タ |
| 18 | 4 | 4.3 | 1.1 | タ | 淡青色 | 37 | 2.2 | 3.5 | 1.2 | タ | タ |
| 19 | 3 | 4.1 | 1.7 | タ | タ | 38 | 2.8 | 4 | 1.9 | タ | タ |
| 20 | 3 | 3.9 | 1.1 | タ | | 39 | 2 | 3 | 1.1 | タ | タ |
| 21 | 2.9 | 3 | 1 | タ | | | | | | | |
| 22 | 3.8 | 3 | 1 | タ | | | | | | | |
| 23 | 2.9 | 3.4 | 1 | タ | | | | | | | |
| 24 | 4.2 | 3 | 1 | タ | | | | | | | |

第2表 住居跡6出土玉類一覧表

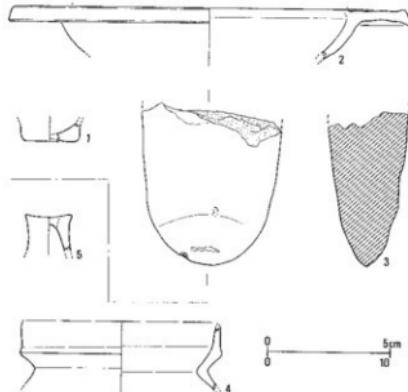
1は壺の口縁部と考えられ、逆ハの字に伸びた長めの頭部で口縁端部は下方につまみ、外面には2条の凹線がめぐる。これは南側の中央穴から出土している。2も壺などの口縁部の破片である。3は底部で外面には指頭圧痕がみられる。4・5は磨製の石包丁である。4は粘板岩製、5はかなり破片となっているが緑色片岩製。6は緑色片岩製の打製石包丁でかなり使用痕がある。7はサスカイト製の石錐、8・9は頁岩製の砥石で8は3面、9は4面に使用痕がある。10は石錐で両側にえぐりがあり花崗岩製、11も花崗岩製であるが10のようなえぐりがないため石錐以外のもの可能性がある。12~14は鉄製品で



1. 淡黒灰色土
2. 暗灰白色土(地山ブロック含む)
3. 黒灰色土
4. 黒灰色土(地山ブロック含む)



第16図 住居跡7～9平・断面図 (S = 1 : 80)



第17図 住居跡7・8出土遺物(1・2・4・5…S=1:4、3…S=1:2)

12は鉄鎌の刃部、13は茎の部分、14はヤリガンナの刃部で比較的残りがよい。15~39はガラス製の玉製品である。15は勾玉であるが穿孔部分は存在せず風化のため依存状態はよくない。16は管玉で穿孔部から半分のみの破片である。17~39は小玉で大きさにはかなりのばらつきがある。色も濃い青と淡い青の2種類がある。成分は分析の結果、勾玉と管玉が鉛バリウムシリカガラスで小玉はカリシリカガラスである(分析は奈良国立文化財研究所による)。玉類の詳細は一覧表(第2表)を参照していただきたい。

住居跡7 (SH7、第16・17図)

Y-19区、稜線上に存在する。かなり削平されており検出時に半円形の落ち込みをわずかに検出した。直径2.7m程の円形住居で明瞭な壁溝は存在せず、掘り込みも最大で深さ11cm程しか残っていない。また建て替えもない。柱穴は4本(1~4)で3のみや大きめの柱穴である。中央穴は梢円形であり深いものである。重複する土壤56は落とし穴と考えられ、時期的には異なるものである。出土遺物は第17図に図示している。

1は底部の細片、2は高杯の杯部で輪状の杯部で口縁部の外側には水平のひさし状の縁がつく。また内側の端部は欠損するが、さらに上部に伸びていたものと推測され、外面ともナテ調整である。3は砂岩製の石斧の刃部片である。

住居跡8 (SH8、第16・17図)

X-17・18区、稜線の西斜面に立地する。直径6m程の円形住居で建て替えはない。壁溝は山側のみ存在し、斜面側の床面は一部がすでに流失している。柱穴は4本(1~4)で2のみや2段振りの形状である。また梢円形の中央穴が1個存在するが、深さは浅いものであり埋土も1層である。壁溝に沿って小さい白石が8個散在的に出土しているが、用途については明瞭でない。床面北よりに焼土面が1カ所存在する。北壁側に重複する土壤59は落とし穴であり、時期的にはこの住居よりは古いものと考えられる。本住居の土層は3層で、出土遺物は第17図に図示している。

4は壺の口縁部で、屈曲し口縁はほぼ垂直に立ち上がり、端部は欠損する。外面に装飾は無い。5は高杯の脚部と考えられる。

住居跡9 (S H 9、第16図)

W・X-18・19区、稜線上に立地する。かなり削平されておりそのため塹溝の一部のみを検出している。そのため住居の全体像は明瞭でないが、おおよそ直径4.4m程の円形ないしは隅丸方形の住居と推測される。柱穴は4本（1～4）で中央に稍円形の中央穴が1個存在する。住居と重複する土壙61は貯蔵穴であるが、両者の前後関係は明瞭でない。出土遺物は土器片が出されているが小片のため図示できない。

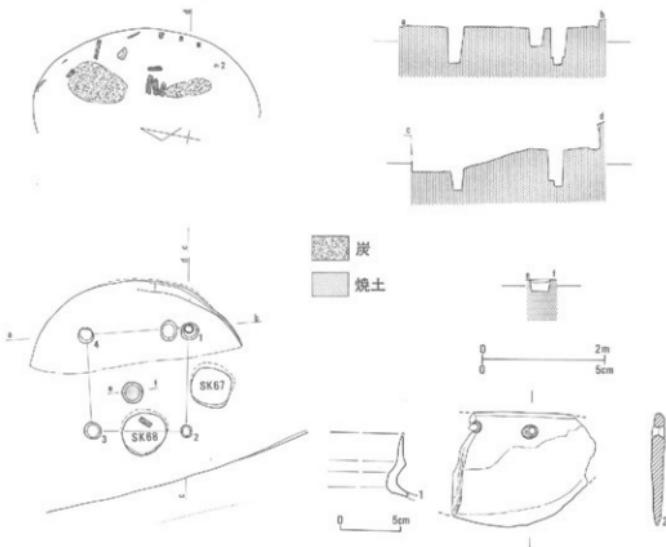
住居跡10 (S H 10、第18図)

V・W-16区、稜線西側の斜面に立地する。この住居は焼失しており、検出時に炭化した柱材や炭の散布を確認した。山側に円形の落ち込みがあり、これにより直径3.5m程の円形住居と考えられる。床面は斜面側半分以上がすでに流失している。塹溝も部分的にしか存在しない。柱穴は4本（1～4）で1のみ2段掘りの形状である。中央に円形の中央穴が存在し、表面は焼土で覆われている。床面に土壙67・68が重複しており、いずれも貯蔵穴と考えられ、位置的に本住居に伴う可能性が考えられる。床面付近から、石包丁（第18図1）が出土している。出土遺物は石や土器片が少量あり一部を図示している。

1は甕の破片で、口縁は屈曲しては垂直に立ち上がる。2は緑色片岩製の磨製の石包丁であるが、円孔の両端が欠損する。

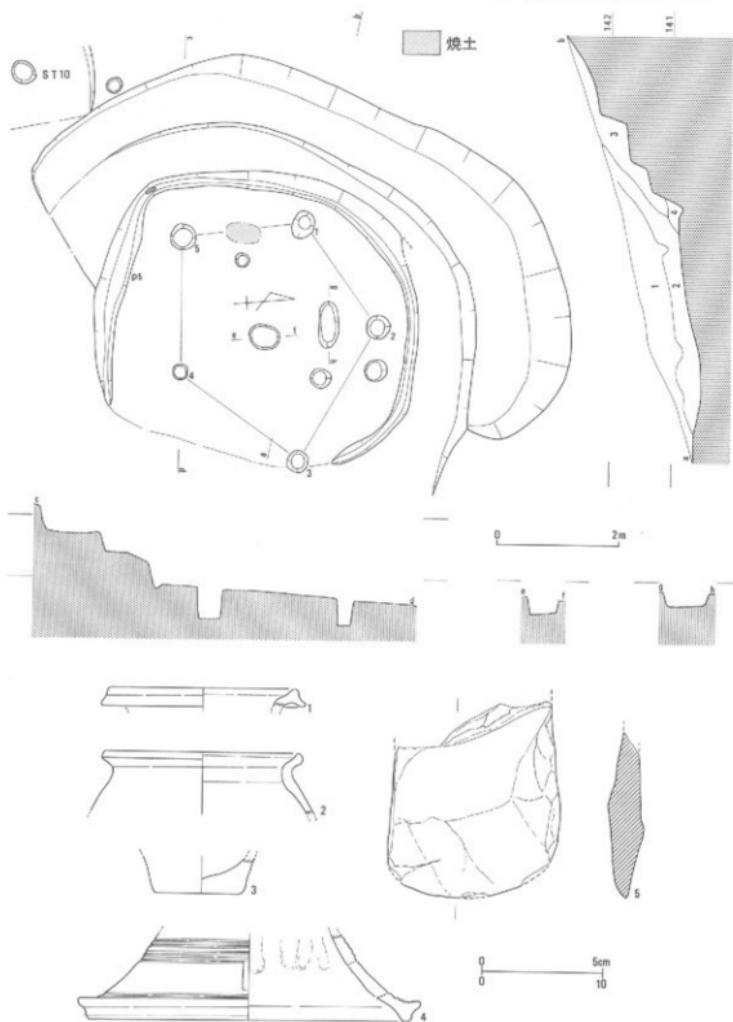
住居跡11 (S H 11、第19図)

V・W-19・20区、稜線東側の斜面に立地する。比較的残りが良く山側に2段の掘り込みが存在し、いずれもテラス状を呈している。このテラスをさらに掘りさげ、一辻5.4m程の隅丸方形に近い住居である。建て替えはない。柱穴は5本（1～5）と考えられるが、柱穴2～3間がやや広い。中央付近には



第18図 住居跡10平・断面図(S=1:80)及び出土遺物(1…S=1:4、2…S=1:2)

1. 黒灰色土(炭含む)
 2. 暗黄灰色土(炭含む)
 3. 淡黄灰色土(地山ブロック含む)
 4. 灰褐色土(地山ブロック含む)



第19図 住居跡11平・断面図($S = 1 : 80$)及び出土遺物(1~4 $S = 1 : 4$ 、5 $S = 1 : 2$)

中央穴らしきものが2つある。南側の中央穴から土器片と炭が出土している。床面の南壁寄りで石斧（第19図5）が1点出土し、西壁寄りに焼土面が1カ所ある。テラス上面から床面までの深さは最大で1.6mあり、本住居の埋土は4層である。南側は段状造構10（S T10）と重複しているが前後関係は明瞭でない。出土遺物は土器片、石などがあり第19図に図示している。

1・2は甕の口縁部で1は口縁端部を下方につまみ、2はくの字に屈曲し端部をやや上方につまむ。2の胴部は摩滅のため調整は不明である。3は底部、4は器台の脚部で外面には長方形と思われる透かしの痕跡があり、その上下に凹線がほぼ5～6条ある。透かしの数、配置については明瞭でない。内面には指でナデた痕跡が見られる。5は扁平片刃石斧と考えられるが、刃部が一部欠損しさうに途中で折れている。岩石名は明瞭でない。その他図示していないが、棒状の石が1点出土している。

住居跡12（SH12、第20図）

T-19区、丘陵頂部の南緩斜面に立地する。直径9.5m程の円形住居で建て替えはない。柱穴は10本（1～10）と中央付近に4本（11～14）が配されている。その他多数の柱穴が存在するが本住居に伴うものがあったかどうかは明瞭でない。中央には隅丸方形の中央穴があり、そこから3方に浅い溝が伸びている。特に北側の溝は埠境と接続し、西側の溝は現状では接続していない。南側の溝が斜面側に出ていたかどうかは床面が流失しているため明瞭でない。中央穴の内部には2個の石があり、埋土は3層で最下層は炭層である。また、床面には炭の散布が1カ所確認できる。北側の埠溝内から砾石（第20図4）が1点、柱穴9の埋土から青銅製の鉗（同3）の破片が出土している。埋土を積金したがこれ以外の破片はみつからなかった。本住居の埋土は2層で、出土遺物は第20図に図示している。

1は甕の口縁部でくの字に屈曲し端部を上方につまみ端部は欠損する。2は底部で表面は摩滅している。いずれも中央穴から出土している。3は青銅製の鉗の破片と考えられ、2つの細片となっており接合する。長さ3cm程の破片で表面はかなり剥落しているところがあり、その部分は緑青がふいている。円面右側の残りの良い部分を観察すると、上部は平らで側面は稜線をもつ。上部の断面は台形に近くさらに内側には鋲型をくっつけた際の接点がぱり状となっている。4は頁岩製の砥石で上面は研磨面が半分ほど剥落している。使用痕は三面に見られる。

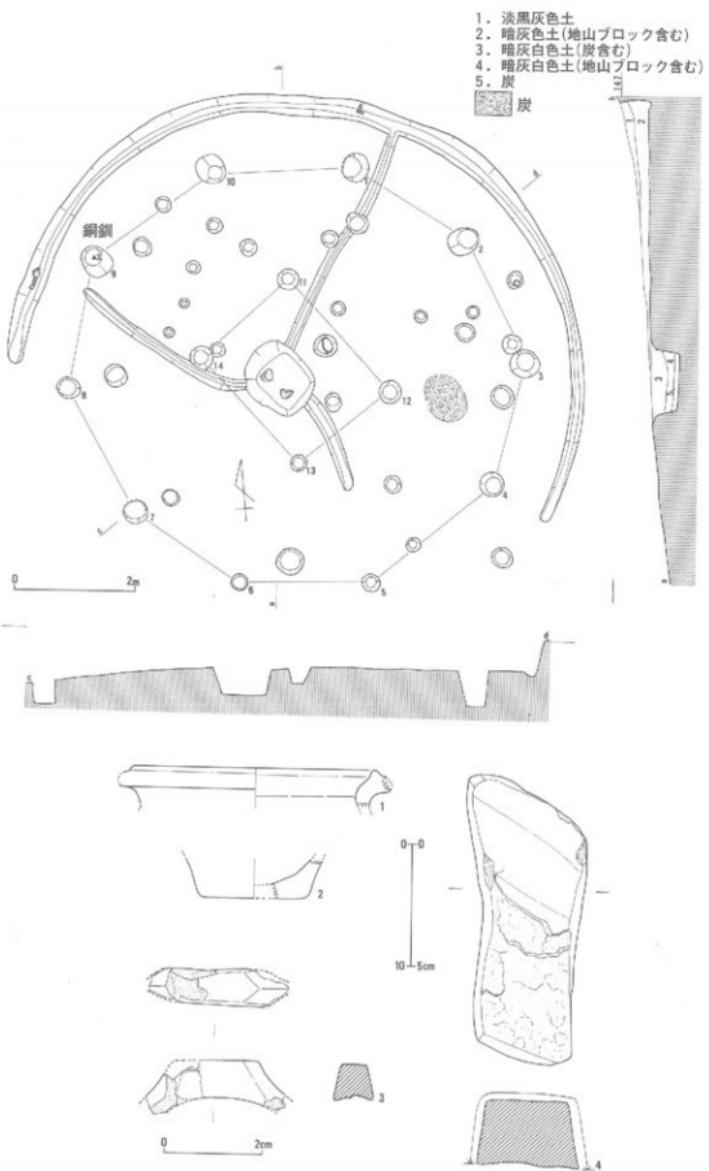
住居跡13（SH13、第21・22図）

S-19区、丘陵頂部平坦面に立地する。焼失住居で検出時にかなりの炭や焼土の堆積があり、内部には炭化した柱材も見られた。この中から火を受けた石包丁1点（第22図1）が出土している。埠溝は全周しないが一辺3.2m程の方形住居と考えられ、建て替えはおこなわれていない。柱穴は4本（1～4）で1と4は掘り込みは比較的浅い。中央には輪円形の中央穴1個があるが、これも比較的浅いものである。本住居の埋土は3層で出土遺物は第22図に図示しているが、土器は小片のため図示していない。

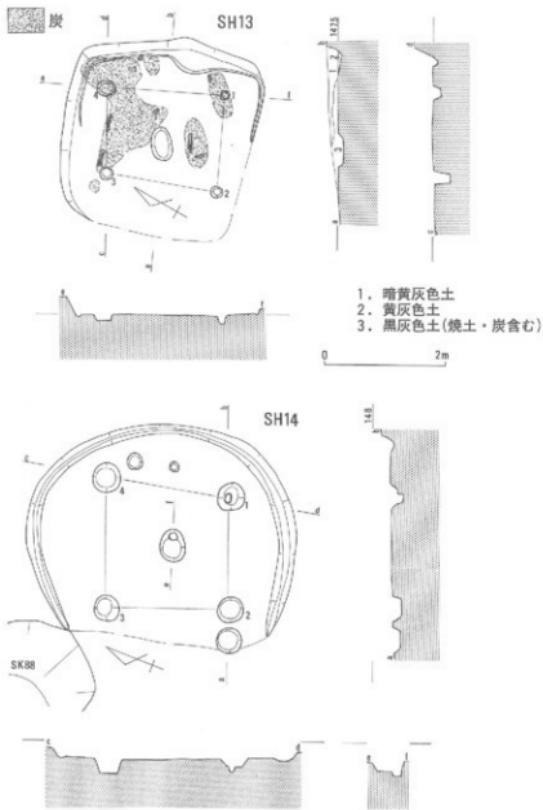
1は磨製の石包丁であるが火を受け表面が赤化している。両端部分が一部欠損する。石材は火を受けているため明瞭でないが、緑色片岩であろう。

住居跡14（SH14、第21図）

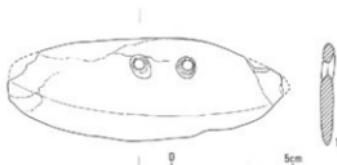
R・S-19区、丘陵頂部平坦面に立地する。直径4.45m程の円形住居で建て替えはない。埠溝は全周せず斜面側の床面はすでに流失している。柱穴は4本（1～4）で1のみ2段掘りである。中央には輪円形の中央穴があり、床面東側に小さな穴が付随する。本住居の埋土はほぼ1層で出土遺物は土器片や石が少量あるが、図示できるものはない。



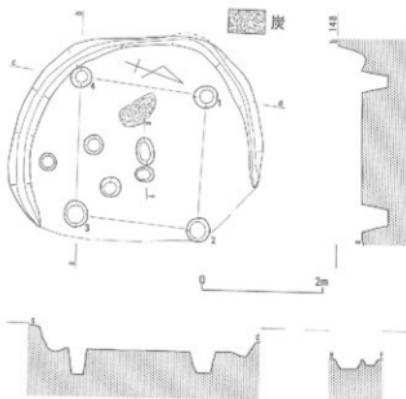
第20図 住居跡12平・断面図($S = 1 : 80$)及び出土遺物(1・2 $\cdots S = 1 : 4$, 3 $\cdots S = 1 : 1$, 4 $\cdots S = 1 : 2$)



第21図 住居跡13・14平・断面図 (S = 1 : 80)



第22図 住居跡13出土遺物 (S = 1 : 2)



第23図 住居跡15平・断面図(S = 1 : 80)

住居跡15 (S H15、第23図)

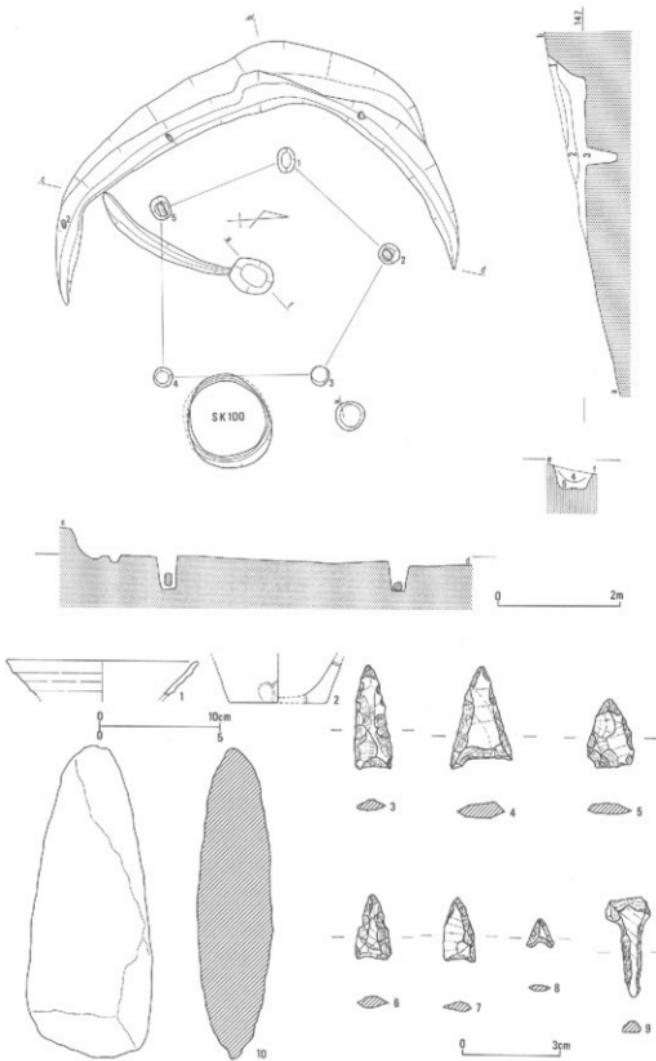
P-20区、丘陵頂部平坦面に立地する。直径4.2m程の円形住居で建て替えはおこなわれていない。壁溝は全周せず斜面側の床面はすでに流失している。柱穴は4本(1~4)で中央には2個の穴があり形態から西側が中央穴と考えられるが比較的浅いものである。床面には炭の散布が1カ所見られる。その他の柱穴は本住居に伴うものではないものと考えられる。本住居の埋土はほぼ1層で出土遺物は皆無である。

住居跡16 (S H16、第24図)

P・Q-21・22区、丘陵頂部の東斜面に立地する。壁溝は山側のみで斜面側の床面はかなりが流失している。直径6.6m程の円形住居で建て替えはおこなわれていない。柱穴は5本(1~5)で、2と5の内部にはかなり大きい石が入っている。柱構築時の根石などに使用されたものであろうか。中央には椭円形の中央穴があり、そこから南の壁に向かって浅い溝が1条伸びている。南側の壁溝上から石斧(第24図2)が1点やや浮いて出土している。柱穴2から石鐵7点(同3~9)が出土している。床面で重複する土壤100(S K100)はその形態から貯藏穴であるが、本住居に伴うものは明瞭でない。本住居の埋土は3層で出土遺物は第24図に図示している。図示した以外にサスカイトの破片が多く(約140g)、石器(石鐵など)の製作を行っていた可能性が考えられる。

1は摩滅しているが口縁部の破片と考えられ、3条の細い凸凹らしきものがめぐり、器壁が比較的薄い。2は底部である。3~8はサスカイト製の石鐵、9は石錐である。石錐には8のような全長0.9cmから3のような全長3.2cmと長さ、形態にかなりのバリエーションがある。10は石斧であるが、表面はかなり風化している。そのため使用痕は明瞭でなく、石材も明瞭でない。その他、図示していないが板状の丸い石などが出土している。

1. 喀灰褐色土
2. 黑灰色土
3. 暗灰白色土(炭含む)
4. 淡黑灰色土(炭含む)
5. 黑灰色土(炭含む)

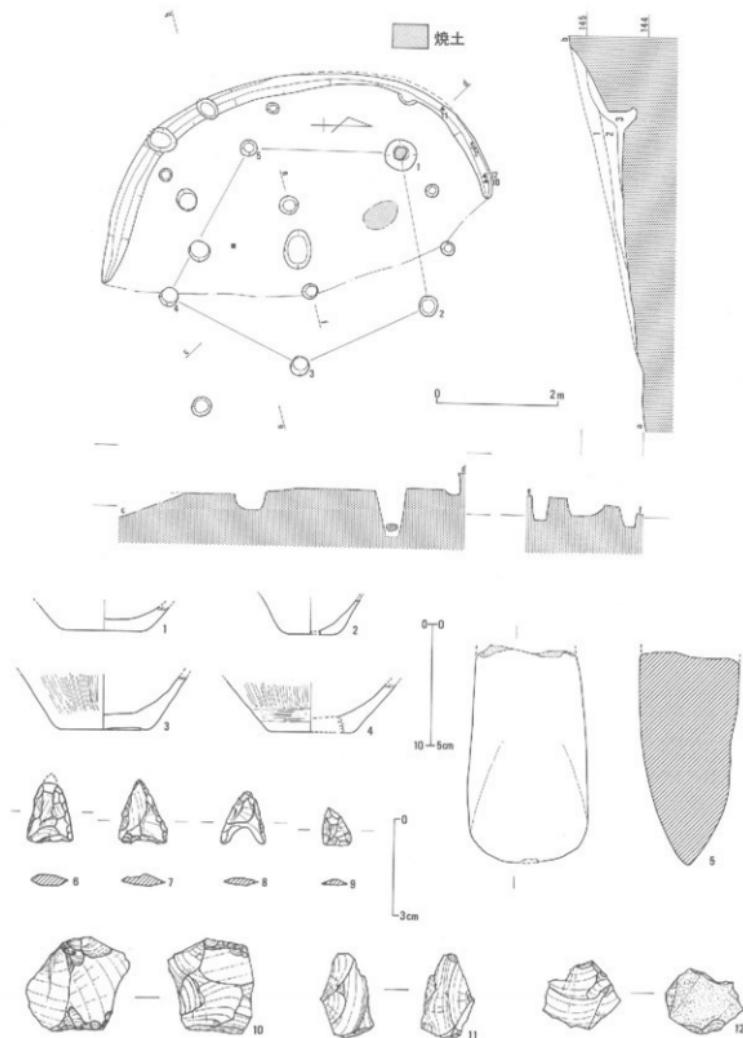


第24図 住居跡16平・断面図 ($S = 1 : 80$) 及び出土遺物 (1・2・S = 1 : 4, 3~9・S = 2 : 3, 10・S = 1 : 2)

▲ 黑曜石

■ 水晶

1. 黑灰色土
2. 暗灰白色土
3. 暗黄灰色土



第25図 住居跡17平・断面図($S = 1 : 80$)及び出土遺物(1~4 $\cdots S = 1 : 4$, 5 $\cdots S = 1 : 2$, 6~12 $\cdots S = 2 : 3$)

住居跡17 (S H17、第25図)

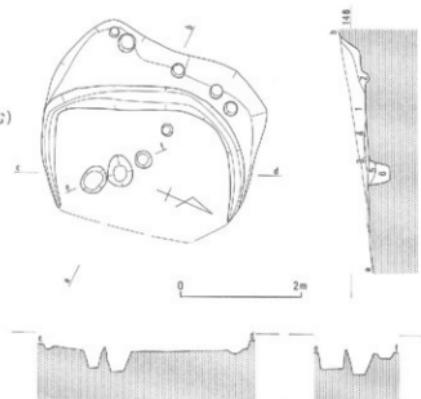
P-21・22区、住居跡16の東斜面に立地する。壁溝は山側のみで斜面側の床面はすでに流失している。壁溝は一部でえぐれる形となっている。直径6.6m程の円形住居で建て替えはおこなわれていない。柱穴は5本(1~5)で1の内部には平らな石が入っている。柱の根石に使用されたものであろうか。中央には梢円形の中央穴とその両端に小さな穴が一直線に並んでいる。床面には焼土面が1カ所あり、北側壁溝内から石斧と黒曜石の剥片が3点(▲第25図10~12)出土し、南側で水晶の剥片1点(■第25図39)が出土している。また、柱穴4や中央穴などからサヌカイトの破片が少量ずつ出土している。さらに埋土からもサヌカイトの破片が多数(約90g)出土しているため、この住居も石器の製作を行っていたものと推測される。本住居の埋土は3層で、出土遺物は第25図に図示している。

1~4は底部であり、図示できたものはこの底部のみである。3・4の外面にはヘラミガキを施し、4は底部付近を横方向のハケで撫でている。5は磨製石斧で途中で折れている。かなり精工に刃部をつくっている。岩石名は明瞭でない。6~9はサヌカイト製の石鏃で8は凹基式である。10~12は黒曜石の剥片である。いずれも接合はしない。10はやや大きめで二次加工されており、楔形石器の可能性があり、12には自然縁面が見られる。

住居跡18 (S H18、第26図)

S-22区、丘陵頂部の東斜面に立地する。壁溝がコの字状に巡り、さらに外側にはやや不整形なテラスのようなものが付随する。一辺3.5m程の方形住居と推測されるが、斜面側の床面はすでに流失している。明瞭な柱穴は存在しないが、テラス部分に斜めに掘り込まれた柱穴が5本あり、床面にも柱穴らしきものがありこれらで屋根を構築していたものと推測される。また、床面南寄りにある3個の柱穴の中央の穴は埋土に炭を含む事から中央穴として機能していたものと推測される。本住居の埋土は4層で、出土遺物は土器片があるがいずれも少量のため図示できない。

1. 暗灰白色土
2. 暗灰褐色土
3. 炭
4. 乳灰褐色土
5. 暗灰色土
6. 暗灰白色土(炭含む)



第26図 住居跡18平・断面図(S=1:80)

(2) 建物跡

建物跡1 (S B 1、第27図)

e・f-17・18区、稜線上に住居跡1と重複して存在する1×1間の建物跡である。柱穴は4本(1～4)であるが5・6は1・4と同一の掘り方内にあり深さもさほど無い事から、補強のための支柱と推測される。柱材の痕跡は確認できていないが、2の掘り方から使用された柱材の太さをある程度推測する事もできる。柱間は東西2.4m、南北2.9mを測り、床面積は約7m²程度である。棟方向はN-35°-Wでは南北棟である。柱穴からの出土遺物は皆無である。住居跡1との関係では、住居を切っている。また、他の建物とは平面形が方形に近く、丘陵の先端部分にある事からすると、見張り台のような施設であった可能性が考えられる。

建物跡2 (S B 2、第27図)

b・c-17区、稜線西側の緩斜面に存在する1×1間の建物跡である。山側にはL字形の掘り込みが存在し、その平坦面に建物は作られている。柱穴は4本(1～4)で床面はややいびつな長方形である。柱間は南北3.6m、東西2.5m、床面積は約9m²程度である。また、棟方向はN-40°-Wである。出土遺物は柱穴1から土器片と炭片が少量出土しているが、小片のため図示できない。

建物跡3 (S B 3、第28図)

c-18区、稜線上に段状造構2と重複して存在するが、段状造構2の方が長さが大きく、さらに柱穴4とは上部で重複しているため、この建物とは関係ないものと考えられる。ただ両者の前後関係は明瞭でない。1×1間の建物で柱穴は4本(1～4)である。柱間は南北2.7m、東西3.75m、床面積は約10m²程度、棟方向はN-65°-Wである。土壇17・18と重複しているが、17との前後関係は明瞭でなく、18は落としへあり古いものと推測される。出土遺物は柱穴4から土器片が少量出土しているが、小片のため図示できない。

建物跡4 (S B 4、第28図)

a・b-19・20区、稜線東側の緩斜面、段状造構6・7と重複して存在する。これら段状造構は建物に伴う可能性も考えられるが、段状造構に伴う別の柱穴が考えられるため、両者は別物と推測される。ただ両者の前後関係は明瞭でない。1×1間の建物で柱穴は4本(1～4)、2の内部には2側の石がありそのうちの一つは平らな石である。柱間は南北2.1m、東西3.8m、床面積は約8m²程度である。棟方向はN-65°-Eである。出土遺物は土器片が出土しているが、少量のため図示できない。

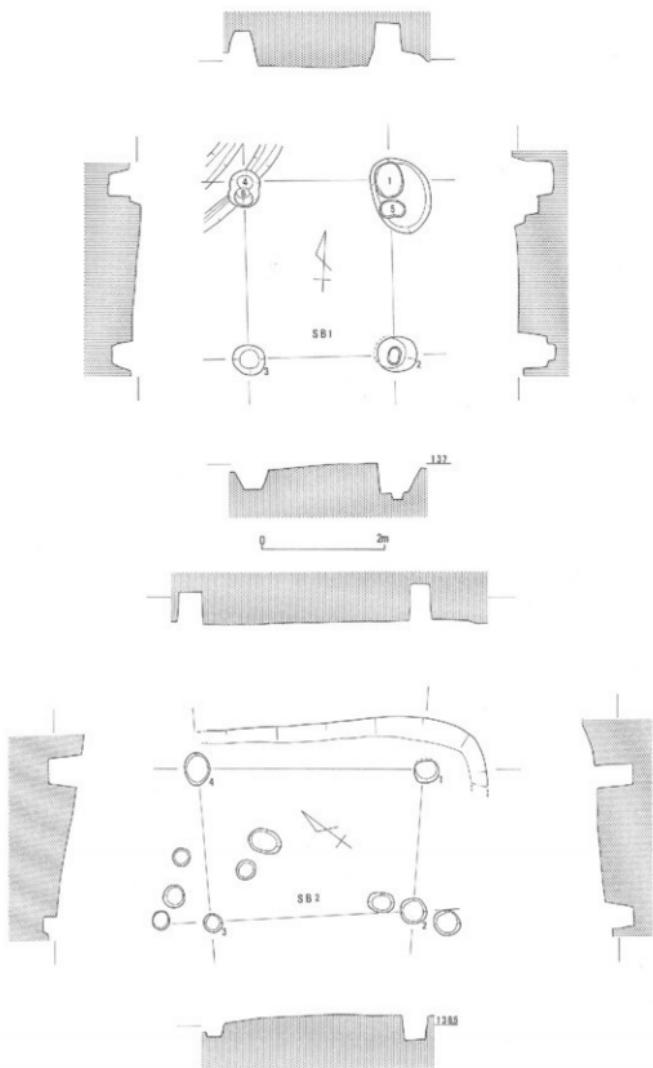
建物跡5 (S B 5、第29・30図)

T-21・22区、丘陵頂部南東側の斜面、段状造構14と重複して存在する。この段状造構に伴う柱穴が存在するため、両者は関係ないものと考えられ、前後関係も明瞭でない。本建物はすべての柱穴を検出していないが、現状で2×3間程度の建物と推測され、柱穴は8本(1～8)検出している。現状で規模は桁行全長5.6m、梁間全長3mを測る。棟方向はN-80°-Wではほぼ東西方向を向いている建物である。柱穴からの出土遺物は、6から土器片少量、8から石包丁が1点(第30図2)出土している。

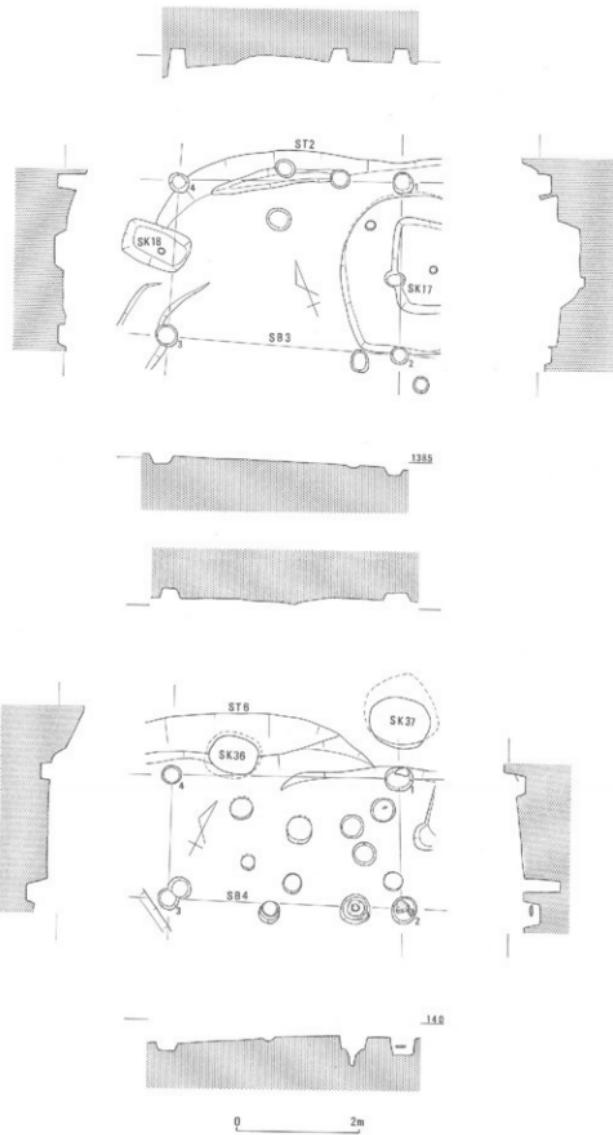
2は粘板岩製の磨製石包丁である。表面には使用痕が観察される。

建物跡6 (S B 6、第30・31図)

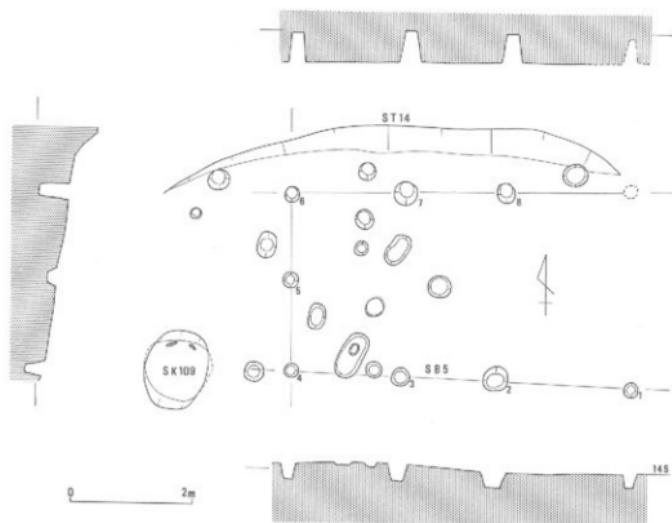
Q-19・20区、丘陵頂部平坦面に存在する、2×7間の建物跡で床面はややいびつで平行四辺形に近い長方形である。柱穴7・8は上層92・93と重複しているため検出できていないが、その他18本(1～6、9～18)を検出した。規模は桁行全長9.7m、梁間全長3.6mを測り、床面積は約35m²程度でかなり大



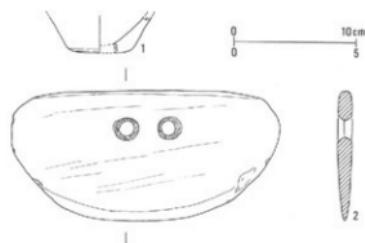
第27図 建物跡1・2 平・断面図 (S = 1 : 80)



第28図 建物跡3 · 4 平・断面図 ($S = 1 : 80$)



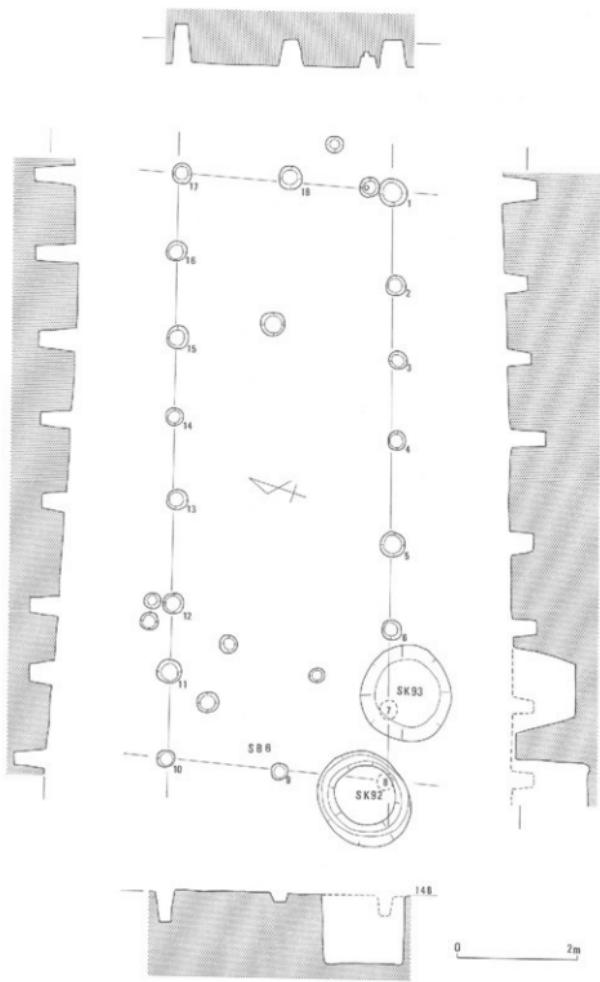
第29図 建物跡5平・断面図(S=1:80)



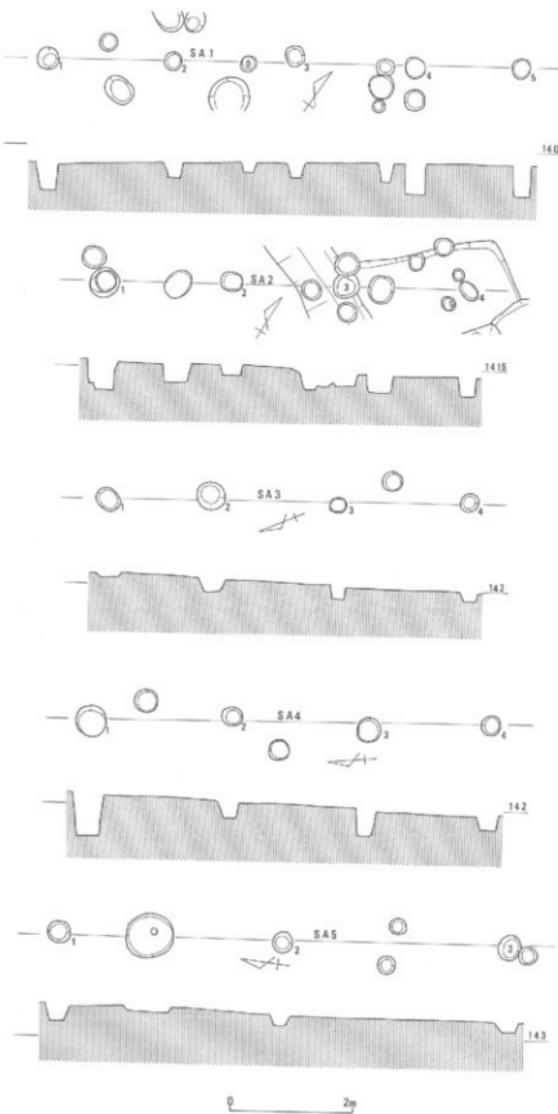
第30図 建物跡出土遺物(1…S=1:4、2…S=1:2)

形の建物である。棟方向はN-72°-Eである。切り合っている土塙92・93との前後関係は明瞭でない。柱穴からの出土遺物は柱穴11から土器片少量、12から土器片（第30図1）、13から土器片少量、16から土器片少量が出土している。

1は底部の細片である。外面にはスヌが付着している。



第31図 建物跡6 平・断面図($S = 1 : 80$)



第32図 横列1～5平・断面図(S=1:80)

(3) 横列

構列1 (S A 1、第32図)

b-18・19区、稜線上に存在する。柱穴5本(1~5)がほぼ等間隔に並んでいる。柱間は1.8~2mで、2と3は他に比べるとやや深さが浅い。主軸方向はN-55°-Eである。柱穴からの出土遺物は皆無である。

構列2 (S A 2、第32図)

b-19・20区、稜線の東斜面に存在する。柱穴4本(1~4)がほぼ等間隔に並んでいる。柱間は1.9~2.1m、1はやや2段掘りの形状で2のみやや深さが浅い。主軸方向はN-60°-Eで、構列1と方向は良く似ている。柱穴からの出土遺物は皆無である。

構列3 (S A 3、第32図)

Y-18区、稜線上に存在する。柱穴4本(1~4)がほぼ等間隔に並んでいる。柱間は1.7~2.1m、1はやや深さが浅く、主軸方向はN-24°-Eである。柱穴からの出土遺物は皆無である。

構列4 (S A 4、第32図)

Y-18区、稜線上、構列3の東側に存在する。柱穴4本(1~4)がほぼ等間隔に並んでいる。柱間は2~2.4m、2と4はやや深さが浅い。主軸方向はN-5°-Eでほぼ南北方向である。構列3とは近接して存在するが、主軸方向はやや異なっている。柱穴からの出土遺物は皆無である。

構列5 (S A 5、第32図)

V-17区、稜線上に存在する。柱穴3本(1~3)が他の構列よりはやや広い間隔で並んでいる。柱間は3.7~3.8m、主軸方向はN-6.5°-Wでほぼ南北方向である。柱穴からの出土遺物は皆無である。

(4) 段状造構

段状造構1 (S T 1、第33・38図)

b-17・18区、稜線をL字形にカットして平坦面を形成している。東側は溝(道)によって切られている。全長7.5m、幅約2.5m程を測り、内部には複数の柱穴が存在するが、その中で4本の柱穴(1~4)が等間隔に並んでおり、この段状造構に伴うものと考えられる。柱間は1.5~1.7mを測る。柱穴2から土器片が少量出土し、出土遺物の内図示できたのは土器片(第38図1)があるのみである。

1は甕の口縁部の小片でくの字に屈曲し口縁端部外面には装飾はない。

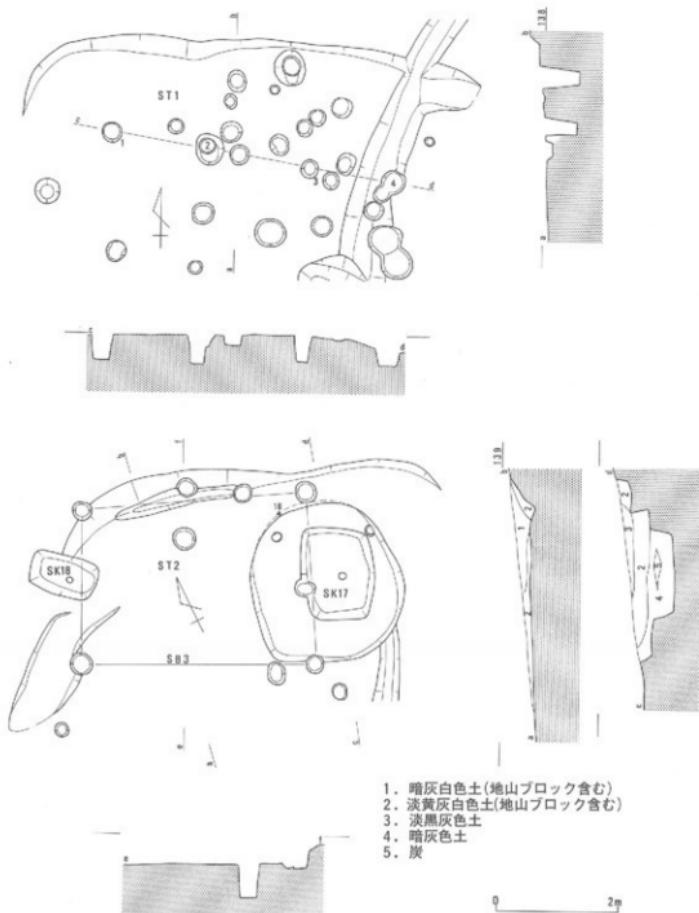
段状造構2 (S T 2、第33・38図)

c-17・18区、稜線をカットして平坦面を形成している。全長7m、幅約4mを測り、建物跡3や土壙17・18と重複している。本段状造構に伴う柱穴列は存在しないが、単独で数本の柱穴がある。また、部分的に懸溝が長さ2m程存在する。出土遺物は床面の土壙17の肩付近から鉄器(第38図18)が、その他土器片など(同2、3、19)がある。

2は底部の破片である。3は甕の口縁部でくの字に屈曲し端部外面には明瞭な沈線は見られない。胴部内面にはヘラ削りを施している。18は棒状の鉄製品であるが両端とも欠損している。断面は長方形である。19は断面は長方形にちかい鉄製品でこれも破片のためどのような製品であったかは明瞭でないが刀などの柄の部分であろうか。

段状造構3 (S T 3、第34図)

d・e-18区、斜面をコの字形カットして平坦面を形成している。全長は6.9m、幅2.2mを測る。土

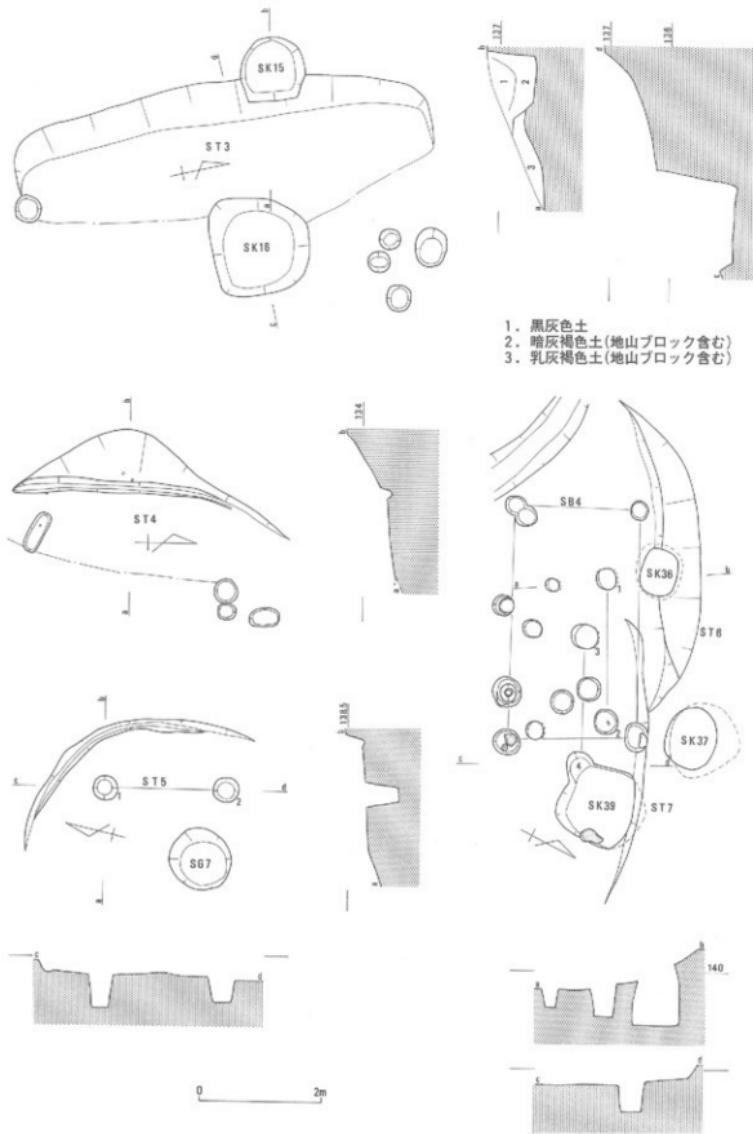


第33図 段状遺構1・2平・断面図($S = 1:80$)

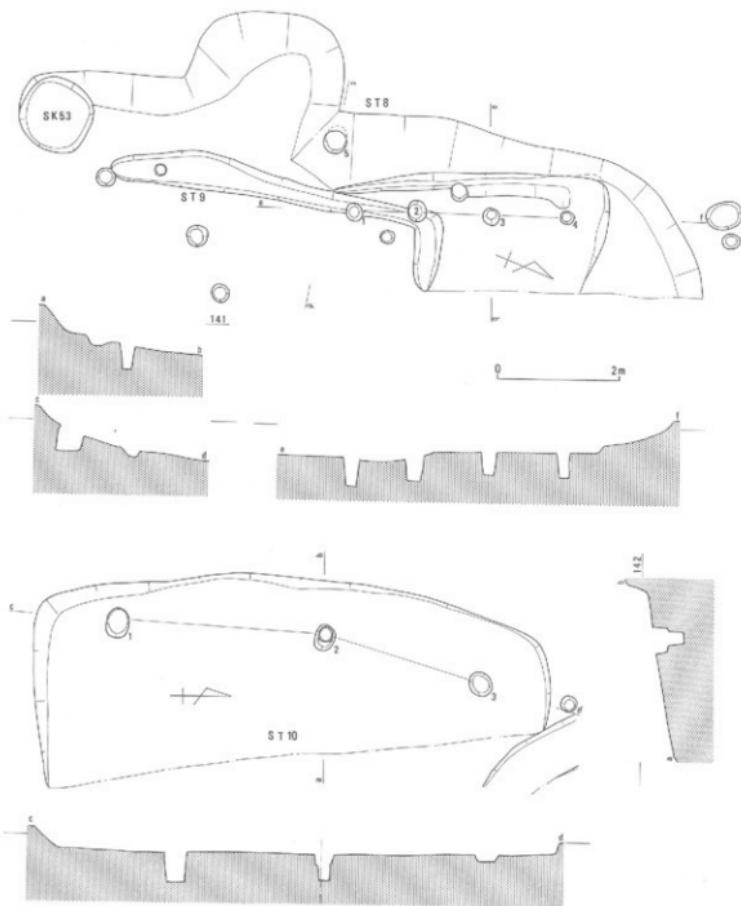
壙15・16と重複しているが土層関係から少なくとも土壙15の方が新しい。土壙16との関係は明瞭でない。内部には明瞭な柱穴は存在せず、南端付近に柱穴が1個存在する。出土遺物は皆無である。

段状遺構4 (ST4、第34・38図)

f・g-19区、斜面をL字状にカットして平坦面を形成している。壁溝は部分的に存在し全長は4.6m、幅2.4mを測る。内部には明瞭な柱穴は存在しないが、平坦面の外に数本柱穴がある。出土遺物として若干の土器片(第38図4)が出土している。4は底部の破片である。底は平らでなくやや凹凸がある。



第34図 段状遺構3～7平・断面図(S=1:80)



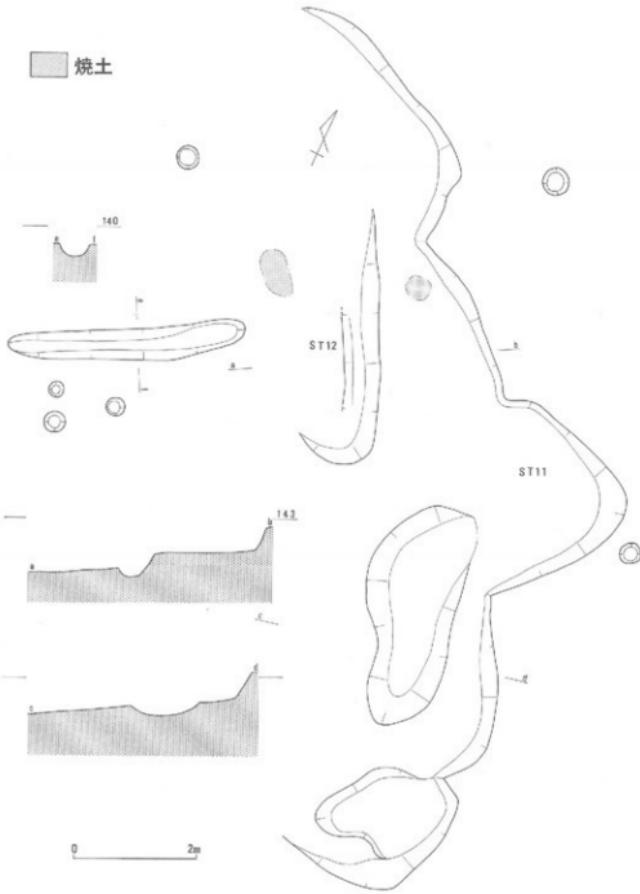
第35図 段状造構 8~10平・断面図 (S = 1 : 80)

段状造構 5 (ST 5、第34図)

c - 17区、斜面を4m程を弧状にカットして平坦面を形成している。壁溝は部分的に存在し内部には柱穴が2本(1・2)ある。そのため住居の可能性もあるが、明瞭な中央穴や対になる柱穴が無いため住居とは区別している。重複している土壙墓7は近世墓であり時代的には新しいものである。出土遺物は皆無である。

段状造構 6・7 (ST 6・7、第34・38図)

a・b - 19・20区、稜線を弧状にカットして平坦面を形成している。6と7は切り合っているものと考えられるが両者の前後関係は明瞭でない。6は全長5.1m、7は全長4.7m、6に伴う柱穴は2本(1・



第36図 段状造構11・12平・断面図(S=1:80)

2)、7に伴う柱穴も2本(3・4)と推測される。また、建物跡4や土壙36・39と重複しているが建物跡4との前後関係は明瞭でないが、土壙36・39については付随していた可能性も考えられる。出土遺物は土器片(第38図5~8、20)がある。

5は亮の口縁部の細片、6~8は底部で大きさには2種類ある。20は石包丁の破片で両円孔部分のみ存在する。石材は緑色片岩である。

段状造構8・9(ST8・9、第35・38図)

X・Y-19・20区、斜面をカットして平坦面を形成している。8を切る形で9が作られている。8はややいびつな形だがL字状にカットし全長11.5m、幅2.8mを測り、内部には壁溝が長さ4.5m程存在す

る。これに伴う柱穴は4本（1～4）でほぼ等間隔に並んでいるが北側に偏っている。柱間は1～1.2mを測る。また、中央の壁にも斜めに掘られた柱穴（5）がある。これも上屋構造に使用されていたものと推測される。土塹53との前後関係は明瞭でない。出土遺物は土器片、炭が少量出土している。段状遺構9は現状でL字形にカットしている。残存するのは堀溝で全長5.5m、幅約1.5mを測る。内部には柱穴は5本あるが、どれが主柱となるかは不明である。出土遺物は土器片（第38図9～12）がある。9は壺、10・11は甕の口縁部である。11はくの字に屈曲し端部は上方と下方につまみ外面には装飾は無く、胴部外面の調整は明瞭でないが、内面にはヘラ削りを施している。胴部は肩のあたりがかなり張った器形である。12は蓋と考えられる。

段状遺構10（S T10、第35・38図）

W-19区、斜面をコの字にカットして平坦面を形成している。北側は住居跡11と接続しているが前後関係は明瞭でない。全長8.5m、幅3mを測り、内部には柱穴3本（1～3）が存在するが、一直線には並ばない。柱間は2.7と3.4mを測る。2は2段掘りで3は他より深さが浅い。出土遺物は土器片（第38図13）がある。

13は甕の口縁部でくの字に屈曲し胴部の調整は明瞭でない。

段状遺構11・12（S T11・12、第36図）

T・U-16・17区、11は斜面を弧状に複数カットして連続した一連のものとなっている。全長はおよそ14.5mを測るが遺構の性格については明瞭でない。内部の北側には焼上面が1カ所、南側には全長3.7mを測る上塙状の掘り込みが存在する。出土遺物については土器片が少量あるが図示できない。

段状遺構12はL字の堀溝のみを検出した。長さ4.2m、幅2m、内部には焼上面が1カ所存在する。また、どちらに属するか不明だが西側斜面に溝状の遺構が存在する。出土遺物は土器片などが少量存在するが図示できない。

段状遺構13（S T13、第37・38図）

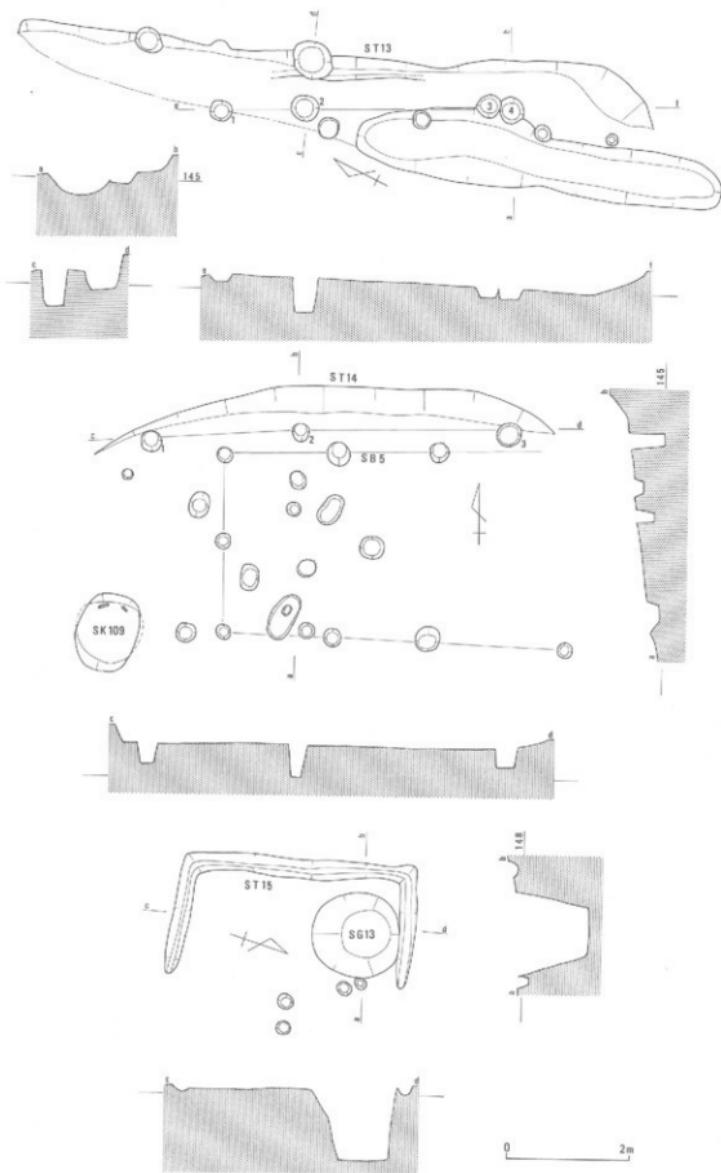
S・T-18区、斜面をL字状にカットし平坦面を形成している。全長10.5m、幅約2m、中央部で堀溝が長さ2.5m程見られ、また付随するかどうかははっきりしない長さ6m程の溝が南側に存在する。内部には複数の柱穴が存在するが、伴う柱は2～3本（1～4）と考えられる。柱間は1.4、3mを測る。ただ2以外は深さが浅い。出土遺物は土器片、石包丁（第38図14・15・21）がある。

14は甕の口縁部でほぼ垂直に立ち上がり、罐部は欠損する。外面には装飾はなく、胴部内面にはヘラケズリを施している。15は器台の口縁部で水平方向に外方に開いた後大きく垂れ下がり、外面には3条の凹線が巡りその上に斜方向の連続刻印文を施し、さらに円形浮文で加飾している。この円形浮文はやや上よりにつけられている。水平部分の外面には剥落している部分が多いが、斜格子文をほぼ全面に施している。21は緑色片岩製の打製石包丁と考えられる。片側の罐が一部欠損する。

段状遺構14（S T14、第37・38図）

T-21・22区、斜面を弧状にカットして平坦面を形成している。全長は7.6m、幅2m以上を測る。内部には建物跡5があり、これに付随する平坦面とも理解できるが、本段状遺構に伴うと考えられる柱穴があり、両者は別々の遺構と解釈される。ただ、両者の前後関係は明瞭でないため、この段状遺構の平坦面を利用して建物跡5が作られた可能性も考えられる。伴う柱穴は3本（1～3）でいずれも壁間に沿っている。柱間は2.5、3.5mを測り間隔は異なっている。出土遺物は土器片（第38図16）がある。

16は甕の口縁部で外面には3条の沈線が巡る。

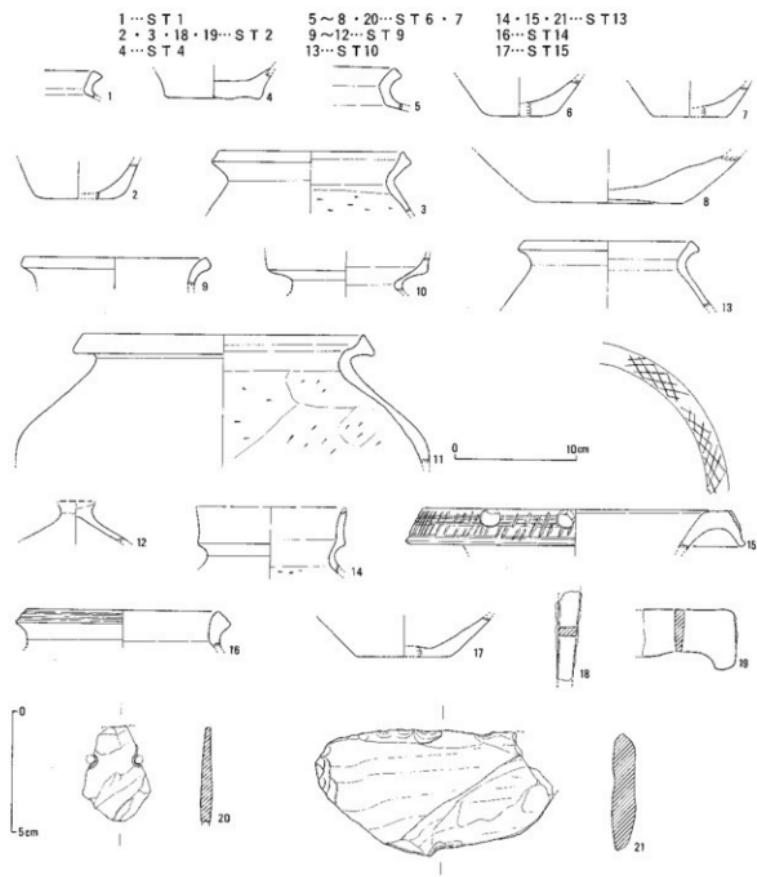


第37图 段状造13~15平·断面图 (S = 1 : 80)

段状遺構15 (S T15、第37・38図)

R-20区、斜面をコの字にカットして平坦面を形成している。全長4m、幅約2.2mを測り、壁溝のみ検出した。壁溝は幅30cm、深さ6cmを測る。内部には柱穴も数本見られるが、伴うと考えられる明瞭な柱穴は存在しない。重複する土壤幕13は近世幕と考えられ、時期的には新しいものである。出土遺物は土器片（第38図17）がある。

17は底部の破片で調整は明瞭でない。



第38図 段状遺構出土遺物 (1~17 S = 1 : 4, 18~21 S = 1 : 2)

(5) 土壙

土壙2 (S K 2、第39・42図)

h-16区、稜線の西斜面に存在する。直径1.21m、深さ0.71m、円形土壙で東側のみ袋状に掘り込まれている。床面はほぼ平らで埋土は3層である。内部からの出土遺物は土器片（第42図1）がある。貯蔵穴と考えられる。

1は底部で外側には斜め方向のハケが施されている。

土壙9 (S K 9、第39図)

g-18区、稜線の東斜面に存在する。長さ1.2m、幅0.71m、深さ0.6mの長方形の土壙である。床面はほぼ平らで、内部からの出土遺物は皆無である。土壙墓の可能性がある。

土壙10 (S K 10、第8図)

e・f-18区、稜線の東斜面、住居跡3と重複して存在する。住居跡3との関係は土層関係からこの住居を切ってつくられている。土壙の形態は不整形で、最大長さ3.5m、幅0.76m、深さ1.01mを測る。床面はほぼ平らであるが、内部からの出土遺物は皆無である。本土壙の用途は明瞭でない。

土壙15 (S K 15、第39図)

d-18区、稜線の東斜面に段状造構3と切り合って存在する。土層関係から段状造構3を切って作られている。半円状で東側の掘り方は直線的である。直径1.06m、深さ0.8mを測る。床面はほぼ平らで、埋土は2層である。内部からの出土遺物は炭片が少量出土している。貯蔵穴と考えられる。

土壙16 (S K 16、第39図)

d-18区、段状造構3の東斜面に存在する。直径1.64m、深さ0.9m程の楕円形土壙で、平面図には図示していないが、床面には壁に沿って浅い溝らしきものが巡る。埋土は2層である。出土遺物は土器片と炭片少量があるが図示できない。貯蔵穴と考えられる。

土壙17 (S K 17、第39・42図)

c-18区、段状造構2と重複して存在する大形の土壙である。上層関係から両者の前後関係は、土層1・2の堆積状況から段状造構2の方が新しいともとれるが、位置的には両者が共存していた可能性も考えられる。本土壙は2段掘りで上段は直径2.59m、深さ0.3mの円形で、下段は長辺1.5m、短辺1.18m、深さ0.36m程の長方形である。下段の掘り込みは中央よりややずれている。上段の床面北側には柱穴が一对あり、下段の床面中央には浅い小さな柱穴が1本ある。その他の柱穴はこの土壙とは直接関係ないものと考えられる。また、上段の北側の肩部から鉄器が出上しているが、段状造構に伴うものと推測されるため、詳細は段状造構の所で述べる。その他出土遺物は土器片（第42図3）がある。

3は堀などの口縁部の細片で縁部を上下に拡張し外側には沈線など装飾は見られない。

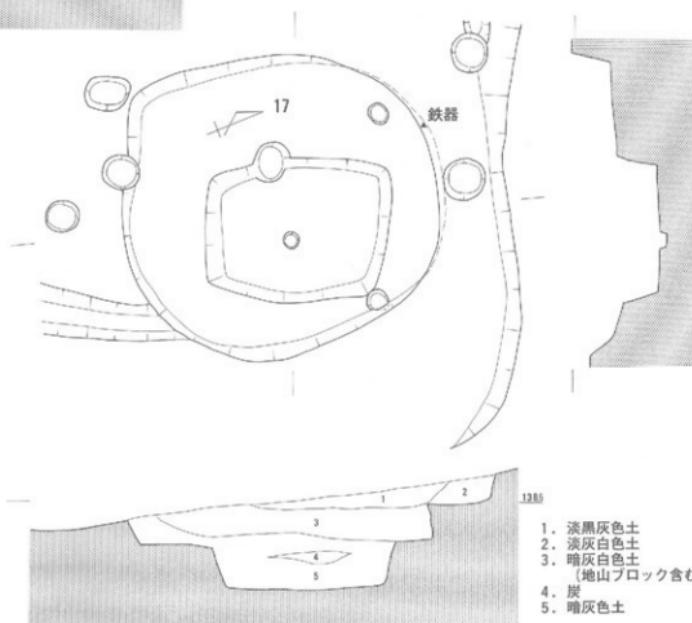
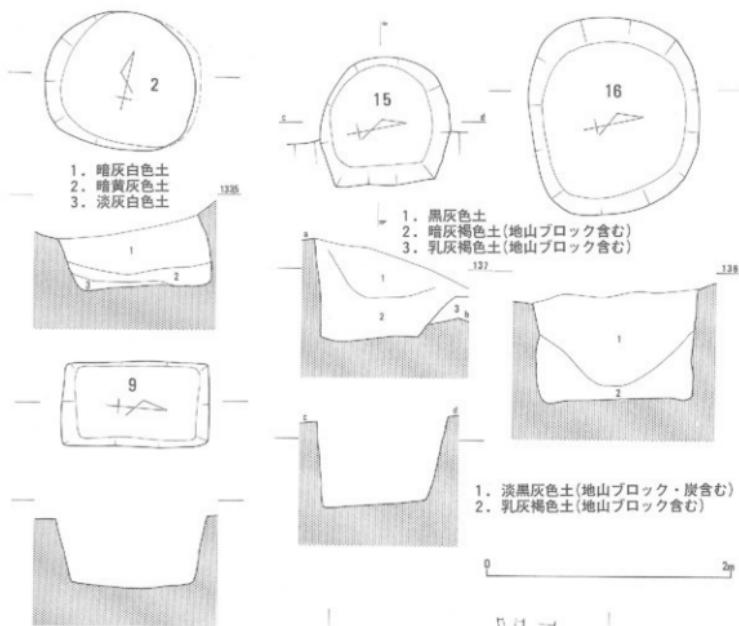
土壙19 (S K 19、第40・42図)

b-17区、稜線西側の斜面に単独で存在する。直径0.74m、深さ0.75m程の円形土壙で内部はほぼ全体が袋状を呈している。床面は平らで内部からかなり大きめの土器片が出土している。この土器は肩部のみであるため図示できない。その他出土した石包丁（第42図4）を図示している。貯蔵穴と考えられる。

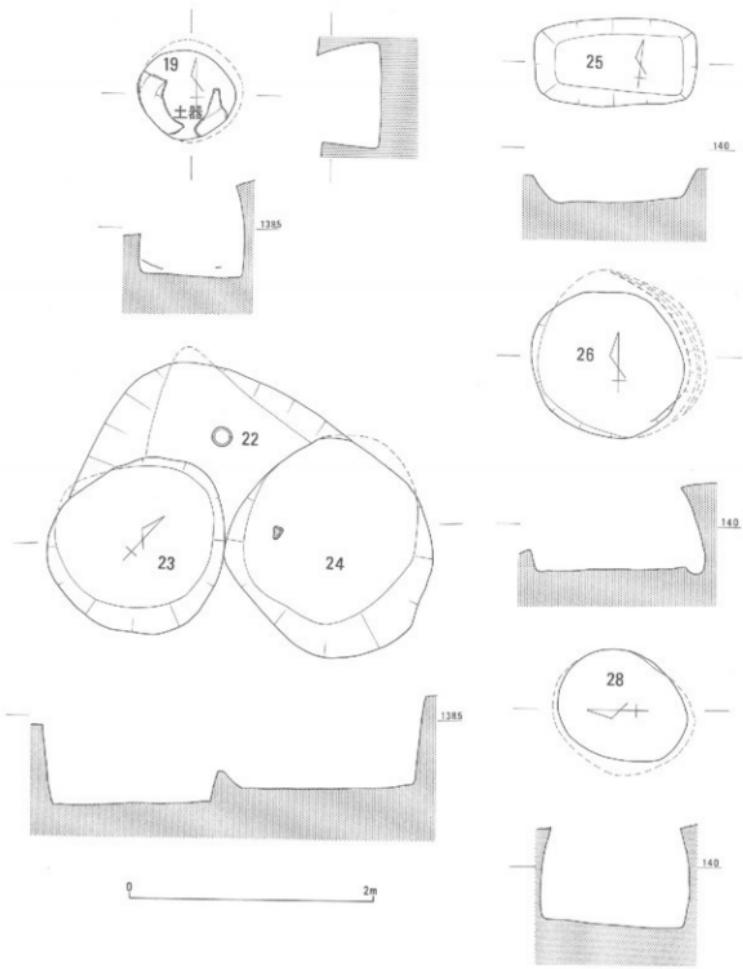
4は白雲母石英片岩製の磨製石包丁の破片である。右側の内孔側と左端の一部が欠損する。

土壙23 (S K 23、第40図)

c-19区、稜線の東斜面に土壙22・24と重複して存在する。少なくとも22の方が古く、24との関係は



第39図 土壌 2・9・15~17平・断面図(S=1:40)

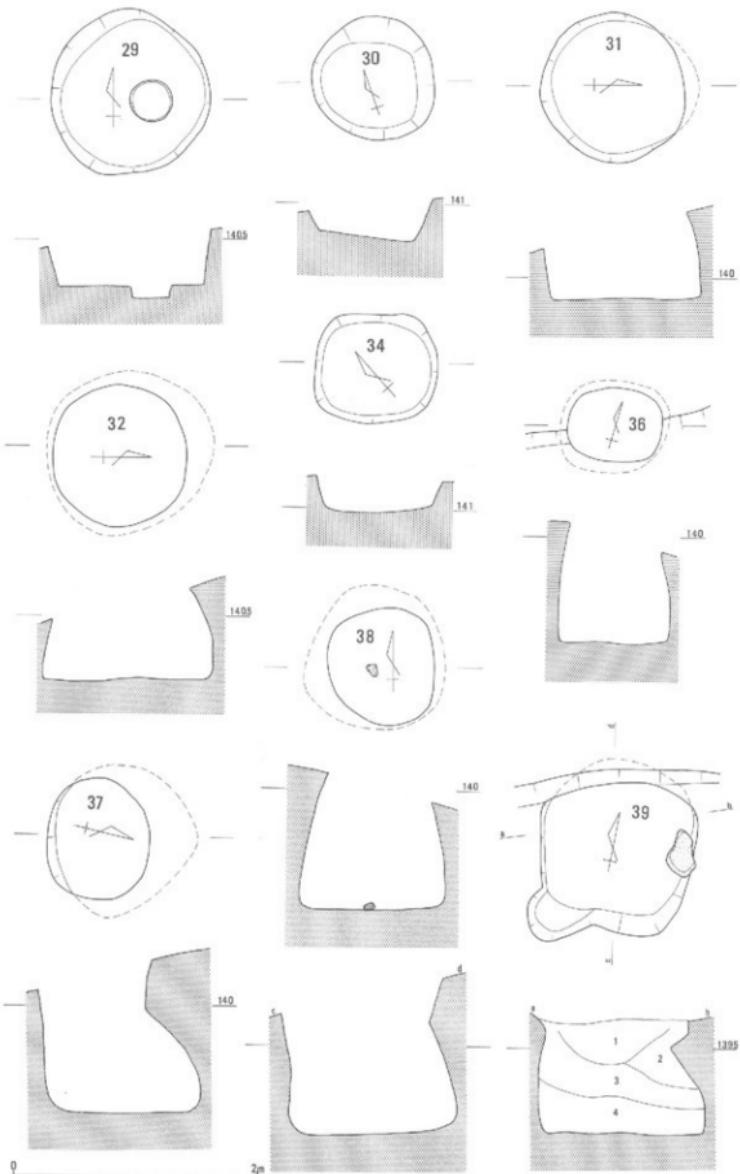


第40図 土壙19・22~26・28平・断面図 ($S = 1 : 40$)

明瞭でない。直径1.53m、深さ0.7mの円形土壙で内部は一部袋状を呈している。床面は平らで出土遺物は土器片が少量あるが図示できない。

土壙24 (S K24、第40、42図)

c-19区、後線の東斜面に土壙22・23と重複して存在する。前述したように22よりは新しいが23との関係は明瞭でない。直径1.76m、深さ1mの円形土壙で内部は一部袋状を呈している。内部から三角形の平らな石が1個出土し、その他の出土遺物は土器片（第42図6）がある。



第41図 土壌29~32・34・36~39平・断面図 ($S = 1 : 40$)

1. 暗灰白色土(炭含む)
2. 乳灰褐色土
3. 暗灰色土(炭含む)
4. 乳灰褐色土(地山ブロック含む)

6は臺の口縁部でくの字に外反し端部を上方につまんでいる。

土壙25（S K25、第40図）

b-18区、稜線上に存在する。長さ1.33m、幅0.74m、深さ0.31m程の長方形土壙である。床面は平らで出土遺物は三角形をした石がある。形態から七壙幕の可能性がある。

土壙26（S K26、第40図）

a-17区、稜線西側の斜面に存在する。直径1.26m、深さ0.68mの円形土壙で、東側内部は袋状を呈している。この東側の床面のみ壁に沿って幅13cm、深さ6cm程の溝が巡っている。出土遺物は上器片（第42図7）がある。貯蔵穴と考えられる。

7は底部で内外面ともナデ調整である。

土壙27（S K27、第10図）

a-17区、稜線の西斜面に住居跡4と重複して存在する。直径0.97m、深さ0.4mの円形土壙で北側の内部は袋状を呈している。内部から土器片や石が出土している。石は薄い剥片で貯蔵穴と考えられる。その位置から住居跡4に付随するものと推測される。

土壙28（S K28、第40図）

a-18区、稜線西側の斜面に存在する。直径1.08~0.88m、深さ0.89m程の楕円形土壙で内部は袋状を呈している。床面はほぼ平らでやや南に傾斜する。周囲には溝は無い。出土遺物は皆無である。貯蔵穴と考えられる。

土壙29（S K29、第41図）

Z-18区、稜線西側の斜面に存在する。直径1.34m、深さ0.62mの円形土壙の中央に直径34cm、深さ10cm程の柱穴が見られ、上層関係は明瞭でないが両者は別々の遺構の可能性も考えられる。出土遺物は炭片が少量出土している。本土壙の用途については明瞭でない。

土壙30（S K30、第41図）

Z-18区、稜線上に存在する。直径1.03m、深さ0.15~0.3mの円形土壙であるが床面は平らでなく東側に傾斜している。出土遺物は皆無である。本土壙の用途については明瞭でない。

土壙31（S K31、第41・42図）

a-18区、稜線上に存在する。直径1.19m、深さ0.7mの円形土壙で、北側内部は袋状を呈している。床面はほぼ平らである。出土遺物は上器片（第42図8）と石がある。貯蔵穴と考えられる。

8は底部の細片で内外面ともナデ調整である。石は拳大で2個ありいずれも使用痕は見られない。

土壙32（S K32、第41図）

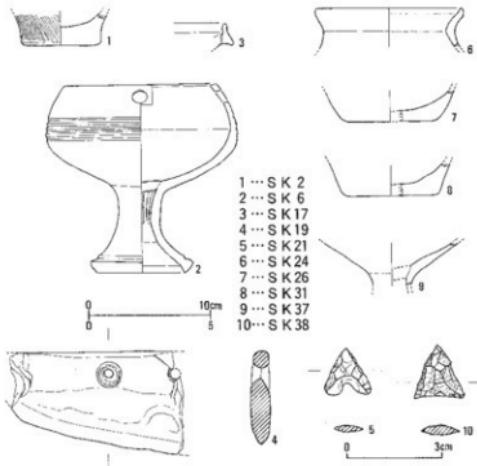
a-18区、稜線上に存在する。直径1.16m、深さ0.75mの円形土壙で、内部は全体が袋状を呈している。出土遺物は皆無である。貯蔵穴と考えられる。

土壙34（S K34、第41図）

a-19区、稜線上に存在する。長さ1.01m、幅0.88m、深さ0.29mの隅丸方形の土壙である。床面はほぼ平らで、出土遺物は皆無である。本土壙の用途は明瞭でない。

土壙36（S K36、第41図）

a-19区、稜線の東斜面に段状造構6と重複して存在する。この両者の前後関係は明瞭でない。直径0.77~0.61m、深さ1.01m程の楕円形土壙で内部全体が袋状を呈している。出土遺物は土器片少量と棒状の石が1点ある。貯蔵穴と考えられる。



第42図 土坑出土遺物(1)(1~3・6~9…S=1:4、4…S=1:2、5・10…S=2:3)

土壙37 (SK37、第41・42図)

a - 19区、稜線東側の斜面に存在する。直径1~0.83m、深さ1.24m程の椭円形土壙で内部の北側のみが袋状を呈しきくえぐれる形となっている。床面は平らで出土遺物は土器片（第42図9）がある。貯藏穴と考えられる。

9は高杯の杯部と考えられ表面は摩滅しており、口縁及び脚部の形態は不明である。内部は円整充填である。

土壙38 (SK38、第41・42図)

a - 20区、稜線の東斜面に存在する。直径0.97~0.86m、深さ1.06m程の円形土壙で内部全体が袋状を呈している。床面は平らで中央には石が1個ある。出土遺物は土器片が少量あり、棒状の石の他石礫（第42図10）がある。貯藏穴と考えられる。

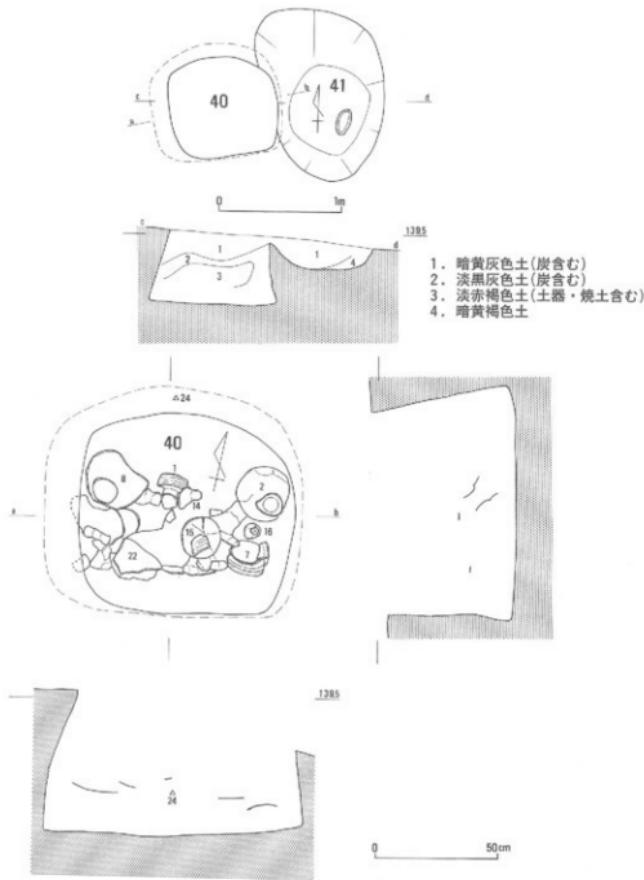
10はサスカイト製の石礫である。

土壙39 (SK39、第41図)

a - 20区、稜線の東斜面に段状造構7と重複して存在するが、両者の前後関係は明瞭でない。両者が共存していた可能性も考えられる。直径1.29m、深さ0.9m程の円形土壙で内部は北側が袋状を呈している。床面はほぼ平らで埋土は4層である。土層1以外は自然堆積の状況である。東側肩部より大きめの自然石が1個出土している。出土遺物は土器片と炭が少量出土しているが図示できない。

土壙40 (SK40、第43・44図)

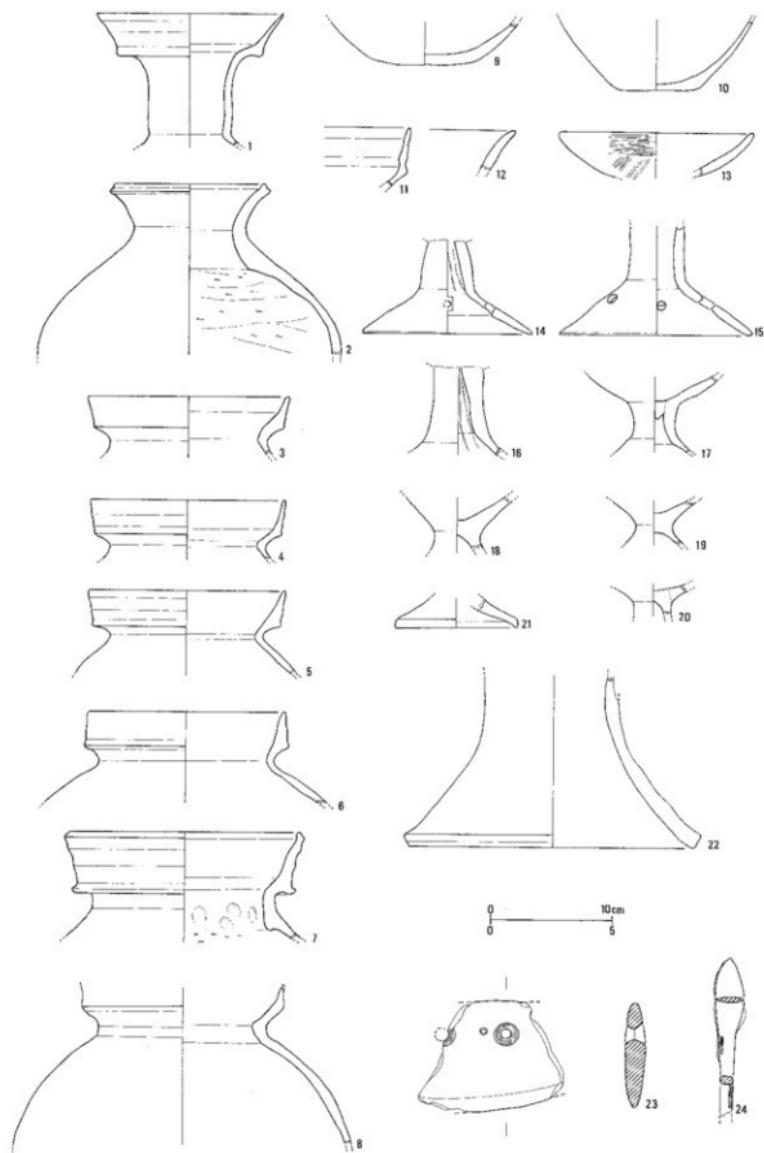
b - 19区、稜線の東斜面に土壙41と重複して存在するが、土層関係から両者の前後関係は明瞭でない。直径0.89~0.82m、深さ0.59m程の隅丸方形の土壙で、内部は全体に袋状を呈している。内部からおよそ18個体分の土器片や石包丁、鉄錐が出土した。土層は3層で3が土器の出土した層位である。ただ焼土塊や炭などと一緒に出土しているため層位は明瞭でない部分が多い。また、出土した土器も破片が



第43図 土壙40・41平・断面図($S = 1:40$)及び土壙40遺物出土状況($S = 1:20$)

多く、完形に復元できるものは無い。その状況から廃棄穴と考えられる。出土遺物は第44図に図示している。

1・2は壺で1は頭部が比較的長いタイプで口縁は外反しながら立ち上がる。頭部はナデ調整で胴部下半については破片がなく全体の形態は不明である。2は口縁がくの字に外反し端部を上方につまむ。そのため壺部外面が凹線のようにへこんでいる。破片から壺部上半まで復元できる。胴部外面の調整はナデ、内面はヘラ削りを施している。3～8・11は甕で、いずれも屈曲してやや開きぎみに立ち上がる口縁のタイプである。7は特に屈曲部端が外方に、口縁端部を上方につまんでいる。7以外は表面の残り具合が比較的よくないため調整は明瞭でないが、7の胴部内面にはヘラ削りを施している。9・10は



第44图 土壤40出土遗物(1~22···S=1:4、23·24···S=1:2)

底部であるが表面が摩滅していて調査は明瞭でない。12は細片のため明瞭でないが、高杯の口縁部の可能性が考えられる。13~20は高杯である。脚部は14~16のような長いタイプと17~19のような短いタイプがある。13と17は同一個体と考えられ、脚部の短いタイプは杯部が輪形である。14・15はくの字に屈曲する脚部で、15は5箇所に凹孔がある。21は台付きの製品と考えられる。22は器台であるが破片のため装飾などは明瞭でない。23は白雲母石英片岩製の石包丁の破片で円孔の両端が欠損する。表面は火を受けており、右側の円孔の左には小さな穴があり、凹孔を開ける際の失敗した穴と推測される。24は鉄鏃で茎部分が欠損する。現長6.5cm、木質が部分的に観察される。

土壙41（S K41、第43図）

b -19区、上壙40との前後関係は明瞭でないが土層1の関係から同時に埋まっている可能性も考えられる。長径1.49m、短径1.05m、深さ0.47m程の楕円形の土壙で壙上は2層である。床面は緩やかなU字形でやや東よりに柱穴らしきものがあるが、この上壙に伴うものかは明瞭でない。出土遺物は皆無である。

土壙42（S K42、第45図）

a -20区、稜線の東斜面に住居跡6と重複存在する。両者の前後関係は明瞭でないが、共存していた可能性が考えられる。直径1.5m、深さ0.64mの円形土壙で山側のみ内部が袋状を呈している。埋土は1層で出土遺物は土器片少量と石がある。石は楕円形をしたもののが2個あり、貯蔵穴と推測される。

土壙45（S K45、第45・51図）

a -20区、稜線の東斜面に存在する。直径1.63m、深さ0.53m程の円形土壙で内部は東側以外が袋状を呈している。出土遺物は土器片（第51図2）がある。貯蔵穴と考えられる。

2は高杯の脚部の細片である。

土壙47（S K47、第45・51図）

Z -19区、稜線の東斜面、住居跡5の内部に存在する。直径0.73m、深さ1.24m程の円形土壙で内部は全体が袋状を呈している。出土遺物は、土器片（第51図3）の他、石や炭がある。石には緑色片岩の剥片がある。貯蔵穴と考えられる。

3は甌の口縁部の細片である。口縁は屈曲してほぼ垂直に立ち上がるタイプであるが端部は欠損する。外面には1条の沈線がめぐる。

土壙48（S K48、第45図）

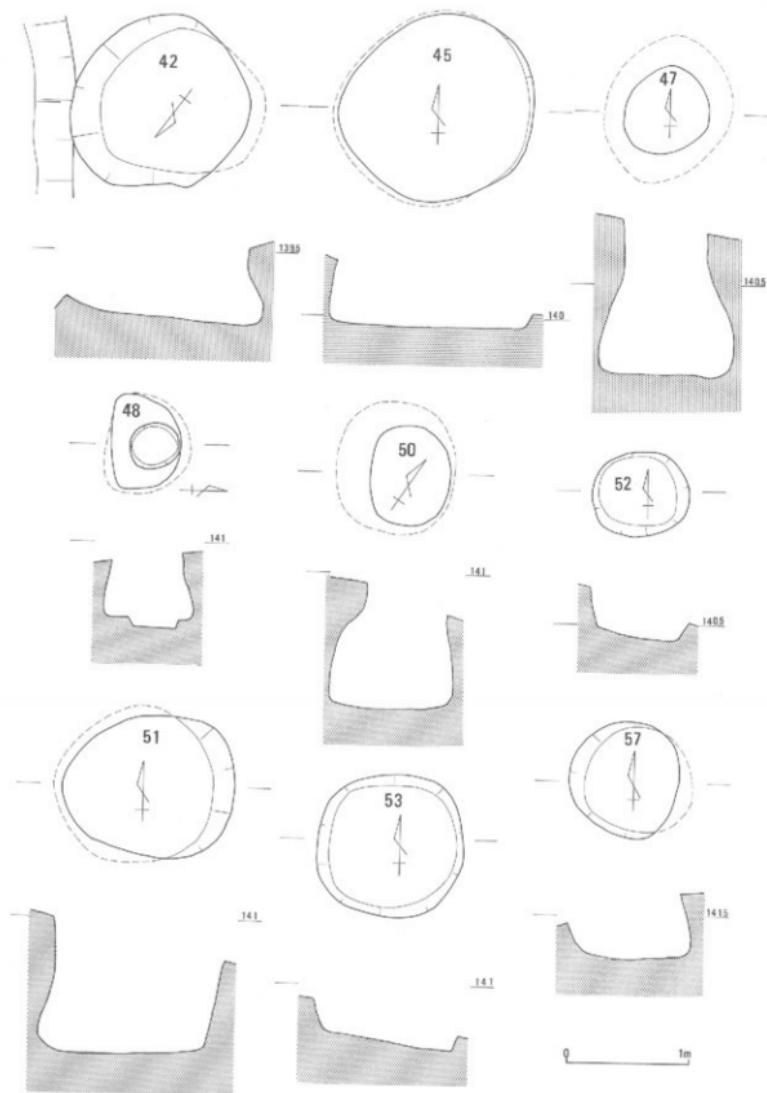
Z -19区、住居跡5の内部に存在する。長辺0.78m、短辺0.55m、深さ0.65m程の半円形の土壙で内部は全体が袋状を呈している。また、床面には、1段掘られた直径36cm、深さ8cmの柱穴らしき痕跡がある。これについては土層関係が明瞭でないため推測の域を脱しないが、両者は別々の遺構であった可能性も考えられる。出土遺物は皆無である。貯蔵穴と考えられるが、これに柱穴が重複している可能性も考えられる。

土壙50（S K50、第45図）

Z -20区、稜線東側の斜面に存在する。長辺0.82m、短辺0.65m、深さ1.05mの楕円形の土壙で内部は全体が袋状を呈している。床面はほぼ平らで出土遺物は皆無である。貯蔵穴と考えられる。

土壙51（S K51、第45図）

Y -20区、稜線東側の斜面に存在する。長辺1.42m、短辺1.15m、深さ1.1m程の楕円形の土壙で内部は西側のみ袋状を呈している。床面はほぼ平らで出土遺物は土器片、炭、石が少量出土している。石は



第45図 土器42・45・47・48・50~53・57平・断面図($S = 1 : 40$)

緑色片岩の剥片で、貯蔵穴と考えられる。

土壙52（S K52、第45図）

Y-20区、稜線の東斜面に存在する。直径0.8m、深さ0.45m程の円形土壙で床面は平らでない。出土遺物は皆無である。上壙の用途は明瞭でない。

土壙53（S K53、第45図）

Y-19区、稜線の東斜面、段状造構8と重複して存在する。直径1.17m、深さ0.34m程の円形土壙であるが、床面は平らでなく大きく傾斜している。出土遺物は土器片と砂岩の丸い石がある。

土壙57（S K57、第45図）

Y-18区、稜線の西斜面に存在する。直径0.95m、深さ0.55m程の円形土壙で内部は東側のみ袋状を呈している。床面はほぼ平らで出土遺物は土器片、棒状の石がある。貯蔵穴と考えられる。

土壙58（S K58、第46図）

Y-17区、稜線の西斜面に存在する。直径1.18m、深さ0.69m程の円形土壙で内部は全体が袋状を呈している。床面はほぼ平らで出土遺物は皆無である。貯蔵穴と考えられる。

土壙61（S K61、第46・51図）

W-18区、稜線上住居跡9と重複しているが、両者の前後関係は明瞭でない。直径1.04m、深さ0.5m程の円形土壙で内部は北側のみ袋状を呈している。床面はほぼ平らで出土遺物は土器片（第51図4）がある。貯蔵穴と考えられる。

4は底部の破片で内外面ともナデ調整である。

土壙62（S K62、第46図）

X-19区、稜線の東緩斜面に存在する。直径1.14m、深さ0.94m程の円形土壙で内部は全体が袋状を呈している。床面には幅10cm、深さ5cm程の溝がほぼ全周する。出土遺物皆無である。貯蔵穴と考えられる。

土壙63（S K63、第46図）

W-17区、稜線の西斜面に存在する。直径1.4m、深さ0.92m程の円形土壙で内部は袋状ではない。床面には壁に沿って幅10~15cm、深さ3cm程の溝が全周する。出土遺物皆無である。形態から貯蔵穴と推測される。

土壙64（S K64、第46・51図）

W-17区、稜線の西斜面に存在する。長径1.15m、短径0.85m、深さ0.8m程の楕円形の土壙で、内部は西側以外は袋状を呈している。床面はほぼ平らで出土遺物は土器片と鉄鏃1点（第51図5・6・35）がある。

5は壺の口縁部でやや開きぎみに立ち上がり端部は欠損する。6は高杯で口縁端部と脚部端が欠損する。内外面ともナデ調整である。35は鉄鏃で全長4.1cmを測る。貯蔵穴と考えられる。

土壙65（S K65、第46・51図）

W-17区、稜線の西斜面に存在する。長辺1.19m、短辺0.94m、深さ0.97m程の隅丸長方形の土壙で内部は北から東側にかけて袋状を呈している。床面は平らで内部から石が1個出土している。出土遺物は土器片（第51図7~11）がある。貯蔵穴と考えられる。

7は壺、8は壺の口縁部で7のL字縁は屈曲してやや外反ぎみに立ち上がり内外面ともナデ調整で、脚部内面にはヘラ削りを施す。8の口縁も同様に立ち上がり端部は平らに仕上げている。9~11は底部で

9の外面にはタテハケ、10の外面にはヘラミガキを施している。

土壙66（SK66、第46図）

W-17区、稜線の西斜面に存在する。長径1.14m、短径0.84m、深さ0.71m程の楕円形の土壙である。内部は東側のみ袋状を呈している。床面はほぼ平らで出土遺物は皆無である。貯蔵穴と考えられる。

土壙67（SK67、第46図）

W-16区、稜線の西斜面、住居跡10の内部に存在する。一边0.66m、深さ0.35m程の方形土壙で、内部は東側のみ袋状を呈している。床面は平らで出土遺物は皆無である。貯蔵穴と考えられる。

土壙68（SK68、第46図）

W-16区、住居跡10の内部に存在する。直径0.75m、深さ0.61mの円形土壙である。内部は東側のみ袋状を呈している。床面は平らで内部から炭化した木材片が出土している。出土遺物は炭があるのである。貯蔵穴と考えられる。

土壙69（SK69、第47・51図）

V-16区、稜線の西斜面に存在する。直径1.07~0.93m、深さ0.72m程の円形土壙である。内部は全体が袋状を呈し、床面壁面には幅18cm、深さ6cm程の浅い溝が全周する。出土遺物は上器片（第51図12~15）がある。貯蔵穴と考えられる。

12は蓋、13・14は蓋の口縁～胴部である。12は口縁が屈曲してやや外反しながら立ち上がり端部は内側につまんでいる。外面ともナデ調整である。13・14の口縁も同様に立ち上がる。14の胴部は外面はナデ調整、内面は明瞭でない。15は器台の脚部の破片で、外面には輻方向の7条のハケがあり、その間に小さめの竹管文を縦に配している。また、脚部端の内面は内側につまんでいる。

土壙71（SK71、第47図）

V-16・17区、稜線の西斜面に存在する。長辺0.97m、短辺0.88m、深さ0.5m程の方形状の土壙で内部は東側のみ袋状を呈している。床面は緩やかにくぼんでおり出土遺物は皆無である。貯蔵穴と考えられる。

土壙72（SK72、第47図）

V-16区、稜線の西斜面に存在する。長径0.94m、短径0.73mの掘り方で、内部は北東側に大きくなぐれる形で掘り込まれている。さらに奥の整個床面には浅い溝が部分的に巡っている。深さは最大で0.76mを測る。出土遺物は皆無であるが貯蔵穴と考えられる。

土壙75（SK75、第47図）

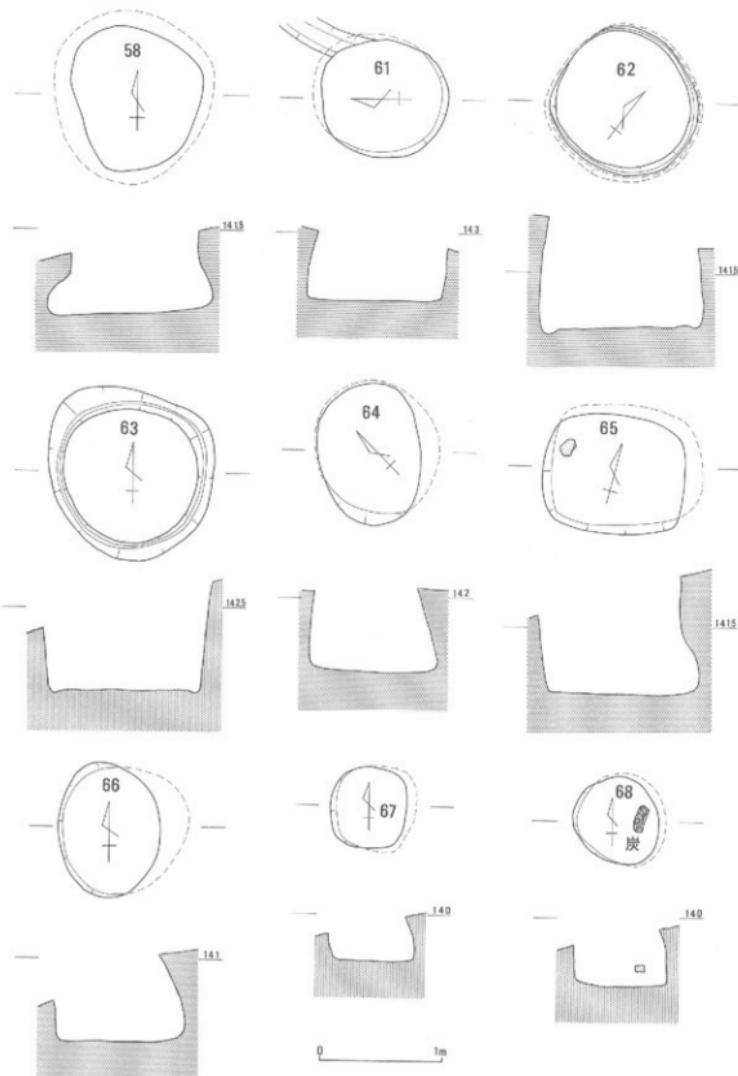
V-18区、稜線上に存在する。直径0.87m、深さ0.5m程の円形土壙である。床面はややくぼみ出土遺物は皆無である。本土壙の用途は明瞭でない。

土壙76（SK76、第47図）

V-18区、後線上に存在する。直径1.27m、深さ0.76m程の円形土壙である。床面はやや傾斜するがほぼ平らで出土遺物は皆無である。本土壙の用途は明瞭でない。

土壙77（SK77、第47図）

U・V-18区、稜線上に存在する。直径1.55m、深さ0.32m程の円形土壙である。床面中央には柱穴らしき直径40cm程の浅い掘り込みがある。また北側から東側にかけての壁に沿って半円状に浅い溝が巡っている。出土遺物土器片と小石が少量出土している。同様な土壙は土壙29がある。本土壙の用途は明瞭でない。



第46図 土壌58・61~68平・断面図($S = 1 : 40$)

土壤78 (S K78、第47図)

U-18区、稜線上に存在する。長さ1m、幅0.49m、深さ0.25m程の長方形土壤である。床面の北西側に小口溝らしき掘り込みが存在する以外はほぼ平らである。出土遺物は皆無である。片側にしか小口溝がないが、小規模な木棺墓の可能性が考えられる。

土壤79 (S K79、第47・51図)

U-17区、稜線の西斜面に存在する。直径0.84m、深さ0.59m程の円形土壤で、内部はほぼ全体が袋状を呈している。床面は平らで出土遺物土器片（第51図16・17）がある。貯蔵穴と考えられる。

16は甕の口縁部で、崩曲し端部を上下につまみ、内外面ともナデ調整である。17は底部の破片でナデ調整である。

土壤80 (S K80、第47図)

U-18区、稜線上に存在する。一見住居跡の様にも見えるが、明瞭な壁溝や中央穴が無く、柱穴も3本しか無いため住居跡としては取り扱っていない。南北2.5m、東西2.2m程の隅丸方形の掘り方で、深さ0.24mを測り、床面はほぼ平らに作られ、3カ所に計5本の柱穴が存在する。ほとんどの柱穴は深く掘り込まれているため柱材が立っていた可能性が大きいが、3本柱という構造は本遺跡内には類例が無い。もしかすると住居の製作途中かもしれないし、小規模な小屋のようなものであった可能性もある。出土遺物は皆無である。

土壤81 (S K81、第48図)

U-17・18区、稜線の西斜面に存在する。直径1.38~1.13m、深さ0.71m程の梢円形土壤である。床面には既に沿って幅20cm、深さ6cm程の溝が全周する。出土遺物は土器片少量と棒状の石がある。貯蔵穴と考えられる。

土壤82 (S K82、第48図)

T・U-17・18区、稜線の西斜面に存在する。直径1.41m、深さ0.44mの円形土壤で床面は平らでなくやや傾斜している。出土遺物は皆無である。本土壤の用途は明瞭でない。

土壤83 (S K83、第48・51図)

T-17・18区、稜線の西斜面、土壤84と重複して存在する。両者の前後関係は明瞭でないが、84はその形態から狩猟用の落とし穴と考えられるため後述する。83は直径1.44m、深さ0.62m程の円形土壤で内部は一部で袋状を呈しており、床面にも部分的に溝が巡っている。出土遺物は土器片少量と石包丁（第51図18・36）がある。

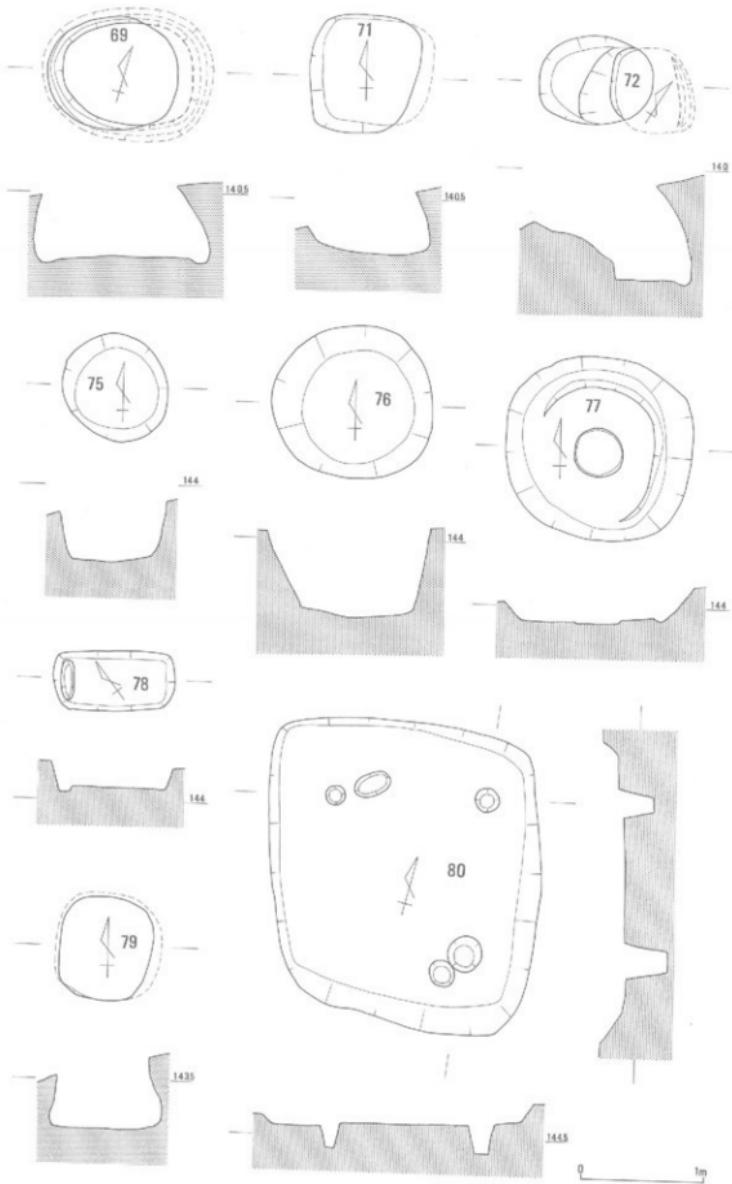
18は高杯の杯部と考えられるが全体像は明瞭でない。表面は摩滅しており内部は円盤充填である。36は緑色片岩製の石包丁の破片でかなり細かな破片となっている。片方の円孔部分がわずかに観察できる。貯蔵穴と考えられる。

土壤86 (S K86、第48図)

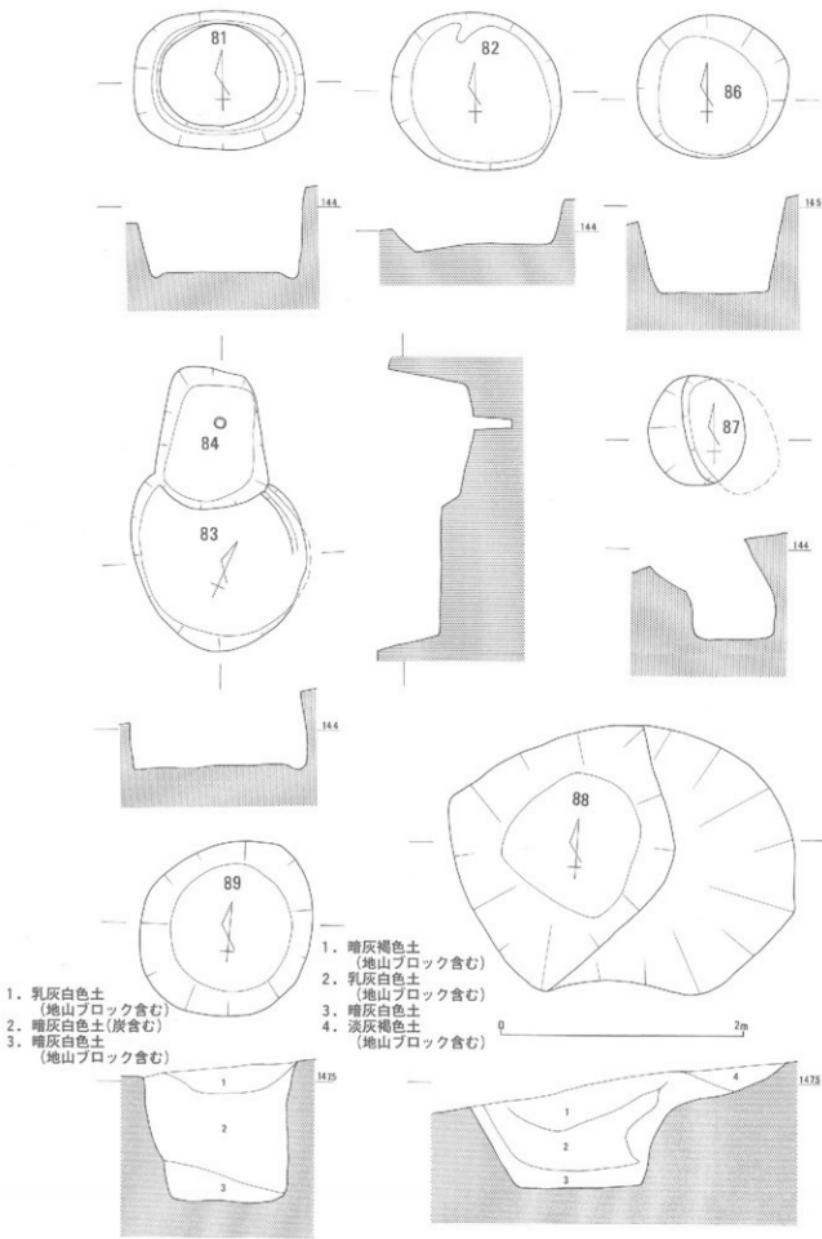
T-18区、稜線上に存在する。直径1.18m、深さ0.81m程の円形の土壤である。床面はほぼ平らであるが、袋状には掘られていない。内部から少量の土器片と石が出土している。土器は破片のため図示できないが、石は緑色片岩の破片と丸い卵人の石である。本土壤の用途は明瞭でない。

土壤87 (S K87、第48図)

S-17区、稜線の西斜面に存在する。直径0.9~0.8mの掘り方で内部は片側に大きくえぐれる形で掘り込まれている。つまり山側のみ大きく袋状を呈している。深さは最大で80cmを測る。土壤72と良く似



第47図 土壙69・71・72・75~80平・断面図(S=1:40)



第48図 土塁81~84・86・88・89平・断面図 ($S = 1 : 40$)

た形であるが、床面には溝が無い。出土遺物は皆無であり貯蔵穴と考えられる。

土壤88 (S K88、第48図)

R-18・19区、丘陵頂部の平坦面に存在する。形状は方形に近く東側は1段半円形状に浅く掘り、そこから一辺2.7~2.05m、深さ1.04m程に掘り込まれている。内部は袋状を呈していないが、土層を見ると、一端埋まつた段階で再度袋状に掘り込まれている状況が伺え、つまり再利用されているようである。出土遺物は皆無である。最初の土壌の用途は明瞭でないが2度目は貯蔵穴の可能性が推測される。

土壤89 (S K89、第48・51図)

R-18・19区、丘陵頂部の平坦面に存在する。直径1.45m、深さ1.13m程の円形土壌である。土層は3層ではば自然堆積しているようである。出土遺物は土器片（第51図19・20）と板状の石がある。

19は甕の口縁部で屈曲して外反しながら立ち上がり、内外面ともナデ調整、20は底部で外面にはススが付着し、内面にはヘラ削りを施している。本土壌の用途は明瞭でない。

土壤90 (S K90、第49図)

Q・R-18・19区、丘陵頂部の平坦面に存在する。2段掘りの形状で、まず直径3.05m、深さ0.27mの円形に掘り、さらに中央西よりを長辺1.62m、短辺約1.18m、深さ0.5m程に掘り込んでいる。土層断面から2段目内部の一部が袋状を呈している事、また土層堆積から両者が一連のものであった事が伺える。1段目の床面に平らな薄い石が1個出土している。出土遺物はこの石以外に土器片（第51図21）がある。同様なのは土壤17があるが用途については明瞭でない。

21は台付きの甕である。表面はかなり摩滅している。そのため内外面とも調整は明瞭でない。

土壤91 (S K91、第49図)

Q-18区、丘陵頂部の平坦面に存在する。直径2.05m、深さ0.87m程の円形土壌である。土層は4層が基本で、一部で乳灰白色上のブロックが含まれている。土層を見る限りでは、内部がやや袋状を呈していた事が伺える。床面はほぼ平らで出土遺物は土器片が少量ある。形態から貯蔵穴の可能性が考えられる。

土壤92 (S K92、第49・51図)

Q-18区、丘陵頂部の平坦面に建物跡6と重複して存在する。直径1.63m、深さ1.15m程の円形土壌で床面には壁に沿って溝が全周する。埋土は3層で、土層を見る限りでは内部が袋状を呈する箇所がある。出土遺物は土器片（第51図22・23）がある。貯蔵穴と考えられる。

22・23とも甕の口縁部の破片で、22はくの字に屈曲して口縁端部を上方につまんでいる。22はやや緩やかに外反し端部は外方につまんでいるようであるが、この部分は欠損する。

土壤93 (S K93、第49図)

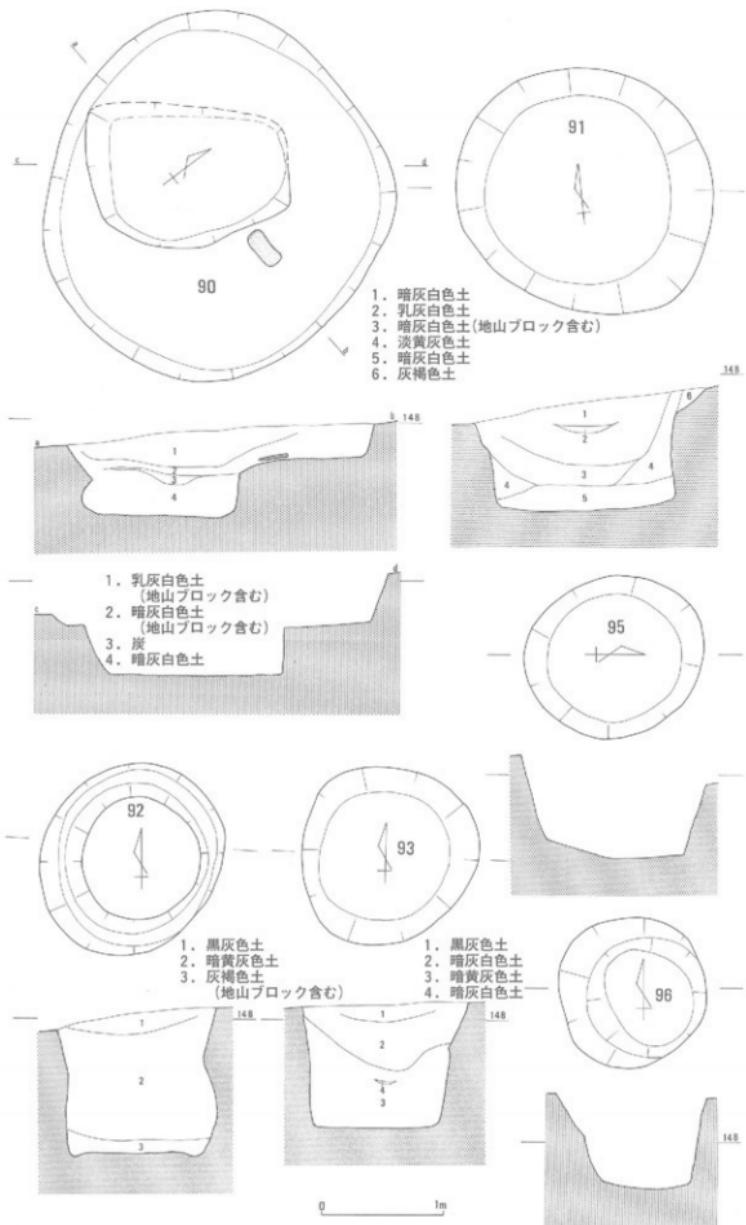
Q-19区、丘陵頂部の平坦面に建物跡6と重複して存在する。直径1.56m、深さ1.03mの円形土壌である。埋土は3層でほぼ自然堆積であろう。出土遺物は皆無である。本土壌の用途は不明である。

土壤95 (S K95、第49図)

P-19区、丘陵頂部の平坦面に存在する。直径1.49m、深さ0.85m程の円形土壌で床面は平らではなく南側に向かって高くなる。出土遺物は皆無であり、本土壌の用途は明瞭でない。

土壤96 (S K96、第49図)

Q-20区、丘陵頂部の平坦面に存在する。直径1.25m、深さ0.78mの円形土壌で西側のみ2段に掘り込まれている。床面はややくぼみ、出土遺物は土器片が少量ある。形態から貯蔵穴と考えられる。



第49図 土壌90~93・95・96平・断面図 (S = 1 : 40)

土壤98（S K98、第50図）

Q-20区、丘陵頂部の平坦面に存在する。直径1.63～1.41m、深さ0.73m程の円形土壙である。埋土は3層で、土層を見る限りでは、内部が袋状を呈していた事が伺える。また、床面は平らであるがやや北側に傾斜しており、内部から自然石1個が出土している。出土遺物はこの石以外に土器片が少量あるが閲示できない。貯蔵穴と考えられる。

土壤100（S K100、第50図）

Q-21区、丘陵頂部の東斜面に存在する。直径1.53m、深さ1.04m程の円形土壙である。内部は一部で袋状を呈し、床面には壁に沿って浅い溝が巡っている。埋土は下半がブロック状の細かい堆積である。出土遺物は皆無である。貯蔵穴と考えられる。

土壤101（S K101、第50・51図）

R-20区、丘陵頂部の平坦面に存在する。直径1.35m、深さ0.66mの円形土壙で内部は西側のみ袋状を呈している。床面はほぼ平らで出土遺物は土器片（第51図24）がある。

24は高杯の脚部で端部を上方と下方につまんでいる。外面には5条の沈線が2段巡りその間に円形の文様が施されているが、破片のため全体像は明瞭でない。その下には透かしを縱の線刻で表現している。内面の調整は明瞭でない。貯蔵穴と考えられる。

土壤104（S K104、第50図）

S-20区、丘陵頂部の平坦面に存在する。直径0.87m、深さ0.47m程の円形土壙で内部は北側のみ袋状を呈している。床面はほぼ平らで出土遺物は皆無である。貯蔵穴と考えられる。

土壤106（S K106、第50図）

S-21区、丘陵頂部の平坦面に存在する。長径1.5m、短径1.05m、深さ0.76m程の橢円形土壙である。床面はほぼ平らで出土遺物は皆無である。本土壙の用途は明瞭でない。

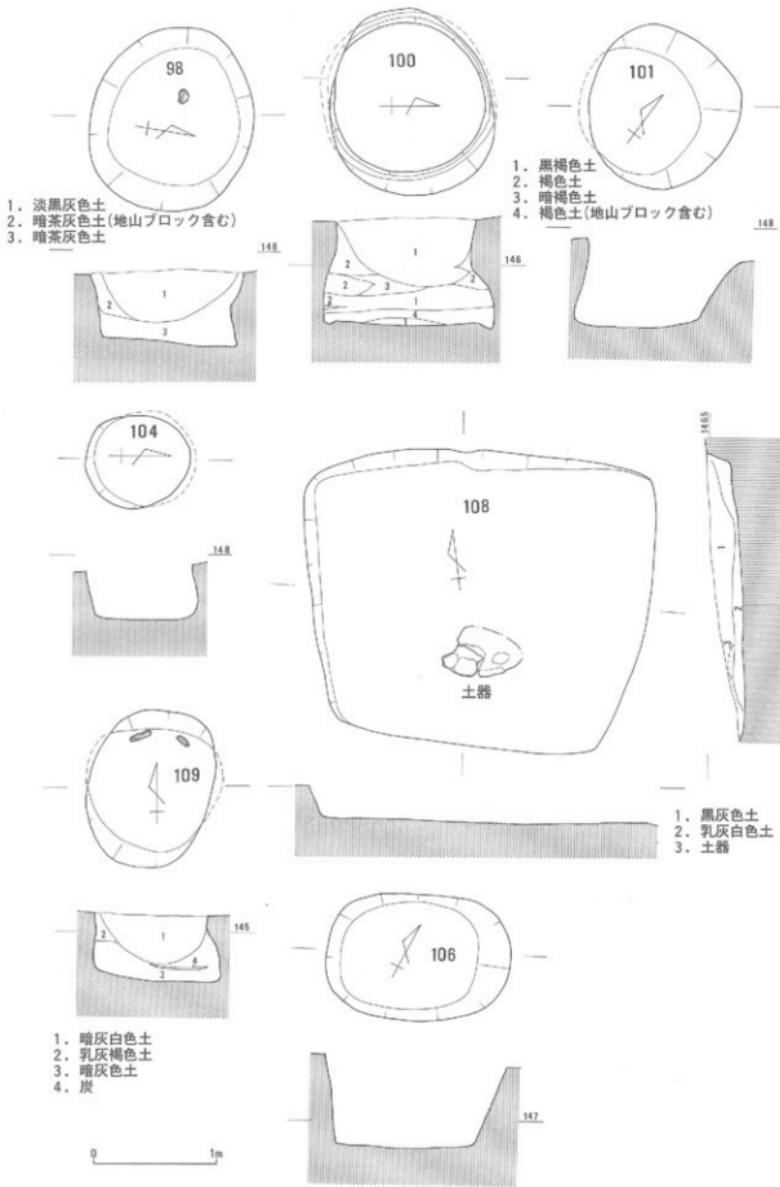
土壤108（S K108、第50-51図）

T-21・22区、丘陵頂部の南東斜面に存在する。当初は住居跡として認識していたが、床面に壁溝や主要な柱穴が存在しないため、住居とは分けて考えている。長辺2.78m、短辺2.42m、深さ0.4m程の方形土壙である。中央南よりから土器がかたまって出土した。本土壙の埋土は2層で出土した層位は土層1である事から、この土壙が若干埋まつた段階でこれら土器が廃棄されたと考えられる。出土した土器（第51図25～33）は甕と台付きの製品でいずれも破片となっている。

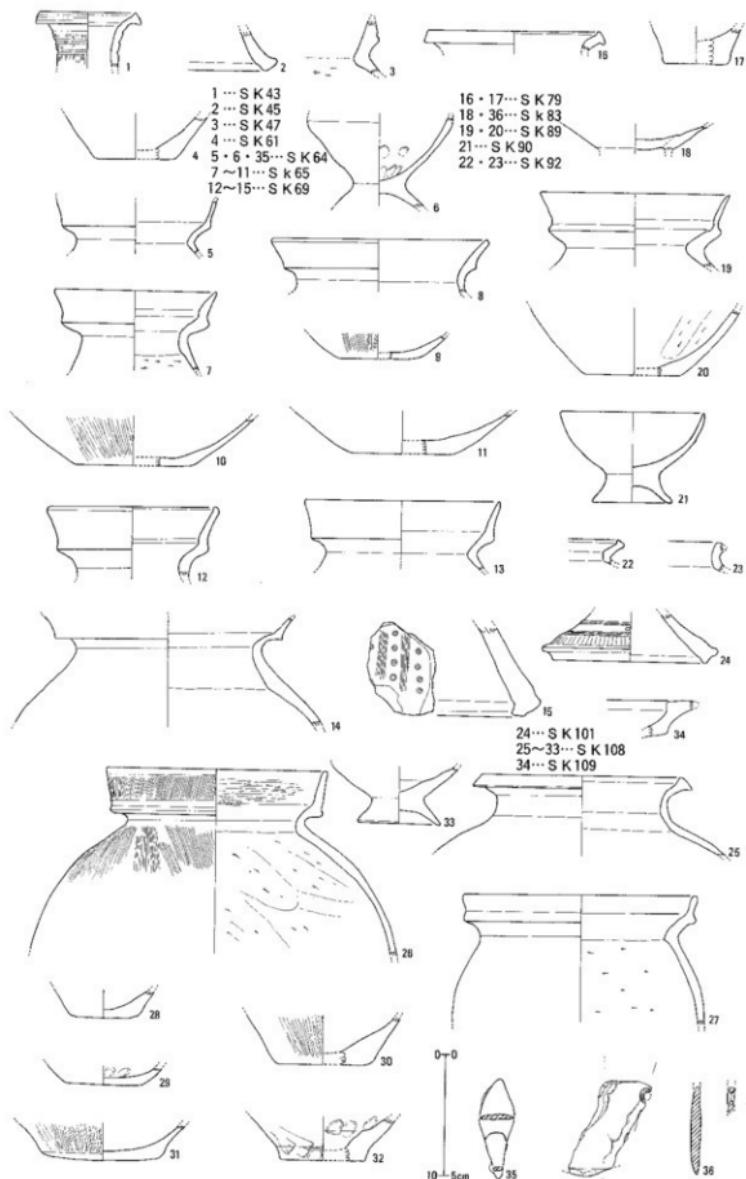
25～27は甕で26の口縁は屈曲してやや開きぎみに立ち上がり、外側には縦方向のハケ、内面には横方向のヘラミガキを施し、胴部の外側にはハケ、内面にはヘラケズリを施している。25の口縁は屈曲して両端部を上下につまんでいるだけで外側はナデ調整である。27はやや胴長タイプの甕で口縁は屈曲して開きぎみに立ち上がるが26ほどではない。外側はナデ調整で胴部の外側の調修は明瞭でないが、内面にはヘラケズリを施している。28～32は底部で30・31の外側にはヘラミガキ、32の外側にはハケ状の工具で撫でている痕跡が見られ、内面には指頭圧痕が見られるものもある。33は台付きの製品でおそらく21のような甕であろう。本土壙の用途としては明瞭でない。

土壤109（S K109、第50・51図）

U-21区、丘陵頂部の南東斜面に存在する。長辺1.31m、短辺1m、深さ0.61mの橢円形土壙である。内部は部分的に袋状を呈している。埋土状況から一度埋まつた段階で再度掘り込まれているようである。下層には炭層が見られる。床面はほぼ平らで内部から棒状の石2本と土器片（第51図34）が出土してい



第50図 土壇98・100・101・104・106・108・109平・断面図 (S = 1 : 40)



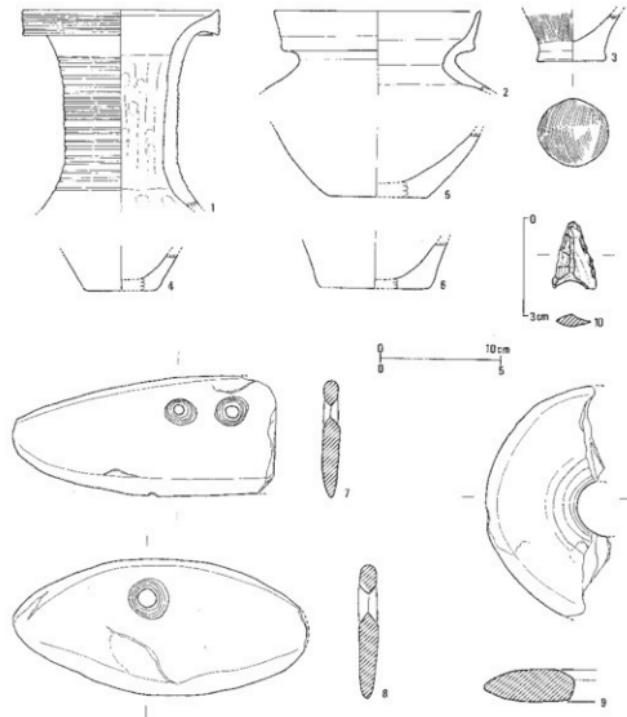
第51図 土塗出土遺物(2)(1~34...S = 1 : 4, 35~36...S = 1 : 2)

る。

34は高杯の口縁部片で、屈曲して外方につまれ上端は面をもつ。細片のため全体像は不明である。

(6) その他の造構及び造構に伴わない遺物

その他の造構及び造構に伴わない遺物は第52図1～9に図示している。1・2・5は柱穴からの出土であるが、これら柱穴は造構としては確認できていないものである。9は近世墓I3の埋土から出土している。おそらく段状造構15と重複しているためこれの埋土に含まれていたものと推測される。よって9はこの段状造構15にともなうもの可能性が大きい。1は長頸瓶で口縁は開きぎみに外反し、端面には凹線を施し、頸部にも約21条の凹線を施している。2は甕の口縁部で屈曲してやや開きぎみに立ち上がる口縁で外面には装飾は見られない。3～6は底部で3の外面にはタテハケが施され、底の部分にも弧状のハケがほぼ全面に見られる。7・8は磨製の石包丁で7は緑色片岩製で端が欠損し、8は白雲母石英片岩製で凹孔は1個しかない。9は環状石斧の約半分の破片で、石材は明瞭でない。10はサスカイト製の石錐である。



第52図 その他の造構、造構に伴わない出土遺物(1～6…S=1:4、7～9…S=1:2、10…S=2:3)

2 近世

(1) 墓

近世墓は13基あり調査区の3カ所にかたまって分布する。近世墓1～3、4～7、8～13でいずれもほぼ直線的に配置されているようである。

近世墓1 (SG 1、第53・55図)

g-17区、後線上に近世墓1～3が近接してほぼ一直線に並んで存在する。この辺りに墓地と言った地目は無く、墓石なども存在しない。直径0.98～0.89m、深さ0.89m程の円形土壙である。棺の痕跡は検出していない。内部から鐵貨6枚（第55図11～13）が出土しており、いずれも「寛永通寶」で内訳は古寛永1枚、新寛永2枚、鉄銭1枚、不明2枚である。寛永通寶の一部には布が付着している。その他棺材と考えられる木片が出土している。

近世墓2 (SG 2、第53・55図)

g-17区、近世墓3とはほぼ接して存在する。直径1.3～1.22m、深さ0.76mの円形土壙である。近世墓1～3の中では一番大きい掘り方である。棺の痕跡は検出していないが、内部から錢貨5枚（第55図14～18）が出土している。いずれも「寛永通寶」（新寛永）である。この中には布が付着しているものがある。

近世墓3 (SG 3、第53・55図)

g-17区、直徑1.02～0.94m、深さ0.52mの円形土壙である。底は円形でなく方形に近い。棺痕跡は検出していないが、方形の棺桶であった可能性も考えられる。出土遺物は釘が3点以上（第55図2～7）あり、「寛永通寶」（新寛永）が1枚（同19）出土している。釘には木質が付着しているものがあり、おそらく棺の蓋をとめる際に使用されたものであろう。その他炭片が少量出土している。

近世墓4 (SG 4、第53図)

d-17区、縦線の西斜面に近世墓4～7がほぼ直線的に存在する。直径1.18～1.11m、深さ0.82mの円形土壙である。棺痕跡は明瞭でなく、出土遺物も皆無である。

近世墓5 (SG 5、第53・55図)

c-17区、直徑1.15～1.03m、深さ0.71mの円形土壙である。棺痕跡は明瞭でなく、出土遺物は鐵貨7枚（第55図20～25）と棺材と考えられる木片がある。鐵貨はいずれも「寛永通寶」で内訳は新寛永6枚、不明が1枚である。

近世墓6 (SG 6、第53図)

c-17区、直徑1.35～1.32m、深さ0.76mの円形土壙で、掘り方の南側に大きな平らな石など2個の石がほぼ元の位置に存在する。これらの石は墓石の一部と考えられる。近世墓4～7の中では一番大きい掘り方である。棺痕跡も明瞭でなく、出土遺物は皆無である。

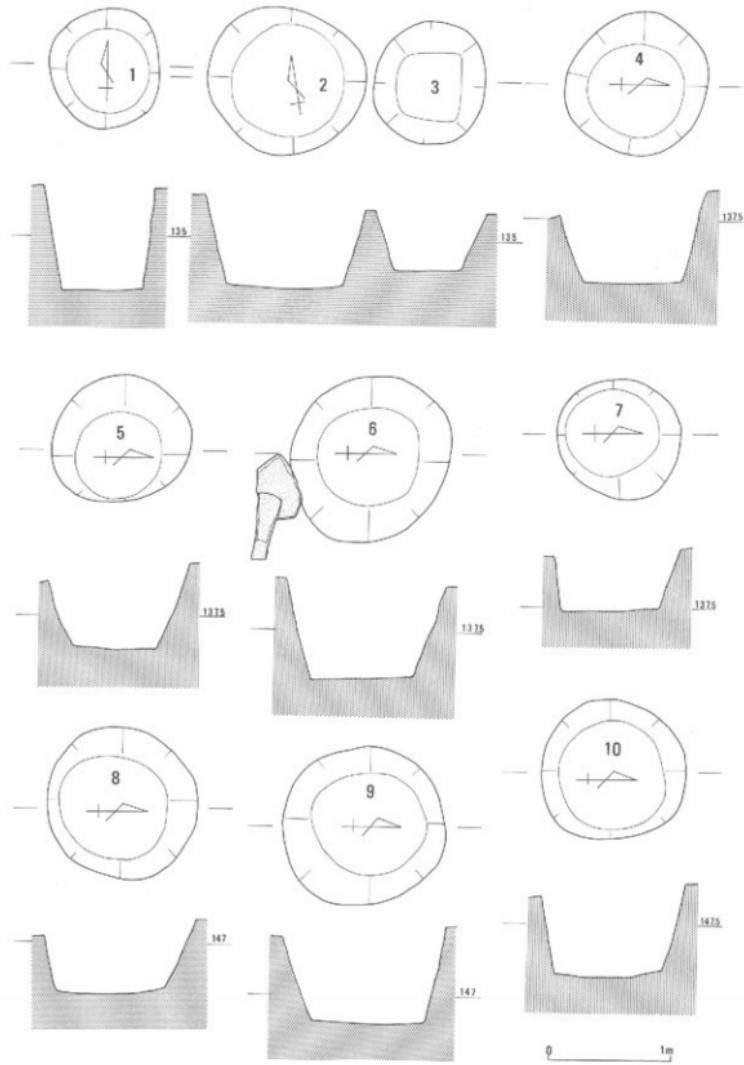
近世墓7 (SG 7、第53図)

c-17区、直徑1.02～0.98m、深さ0.52mの円形土壙である。棺痕跡は明瞭でなく、出土遺物は皆無である。

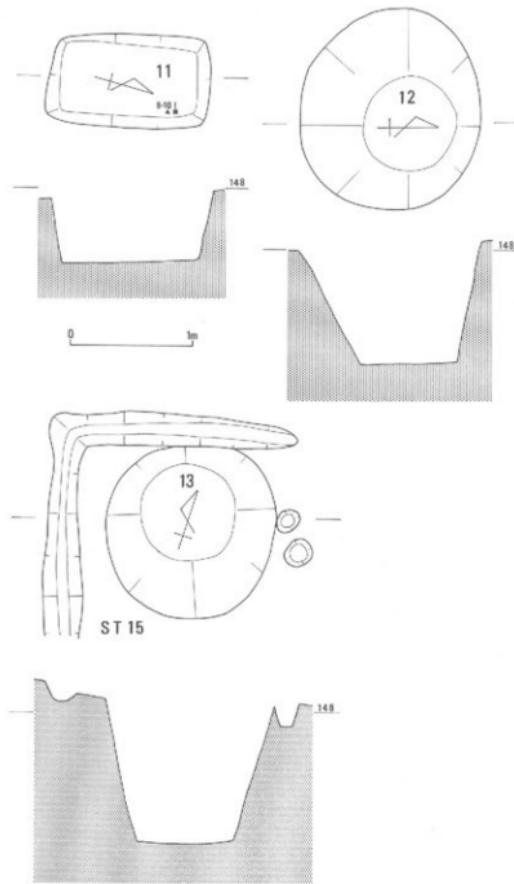
近世墓8 (SG 8、第53図)

T-21区、丘陵頂部平川面に、近世墓8～13がほぼ直線的に並んでいる。直径1.25～1.22m、深さ0.62mの円形土壙である。棺痕跡は明瞭でなく、出土遺物は皆無である。

近世墓9 (SG 9、第53図)



第53図 近世墓 1~10平・断面図 ($S = 1 : 40$)



第54図 近世墓11~13平・断面図 (S = 1 : 40)

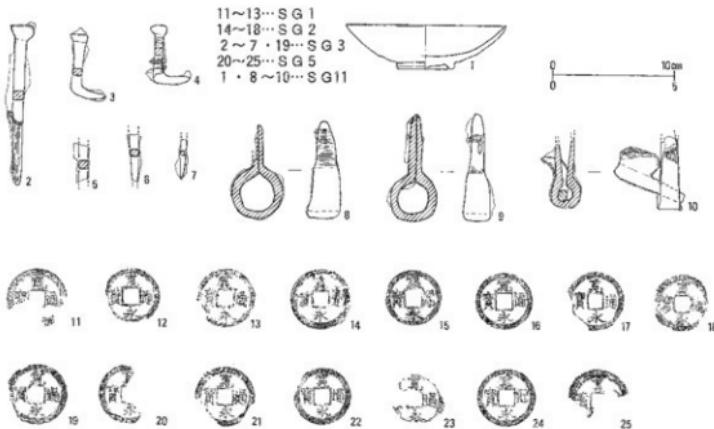
S-20区、直径1.33~1.3m、深さ0.81mの円形土壙である。棺痕跡も明瞭でなく、出土遺物は皆無である。

近世墓10 (S G10、第53図)

S-20区、直径1.19~1.14m、深さ0.78mの円形土壙である。棺痕跡も明瞭でなく、出土遺物は皆無である。

近世墓11 (S G11、第54・55図)

S-20区、長さ1.33m、幅0.76m、深さ0.59mの長方形土壙である。棺痕跡は明瞭でないが、内部の東側壁よりから陶器椀1点(第55図1)と鉄製の棺金具3点(同8~10)が出土している。1は完形品で



第55図 近世墓出土物(1~S=1:4、2~25~S=1:2)

| 形状 | 規模(m) | | | 兩弗品など | | | 寛永通寶 | | | 備考 | | |
|--------|-------|------|------|-------|----|---|------|---|---|----|-------------|--|
| | 縦 | 横 | 深さ | 釘 | 陶器 | 他 | 古 | 新 | 鉄 | 不明 | 本片、寛永通寶に布付着 | |
| 1 円形 | 0.98 | 0.89 | 0.89 | | | | 1 | 2 | 1 | 2 | 寛永通寶付着 | |
| 2 円形 | 1.3 | 1.22 | 0.76 | | | | | 5 | | | 炭片 | |
| 3 方形 | 1.02 | 0.94 | 0.52 | 3+ | | | | 1 | | | | |
| 4 円形 | 1.18 | 1.11 | 0.82 | | | | | | | | | |
| 5 円形 | 1.15 | 1.03 | 0.71 | | | | | 6 | | 1 | 木片 | |
| 6 円形 | 1.35 | 1.32 | 0.76 | | | | | | | | | |
| 7 円形 | 1.02 | 0.98 | 0.52 | | | | | | | | | |
| 8 円形 | 1.25 | 1.22 | 0.62 | | | | | | | | | |
| 9 円形 | 1.33 | 1.3 | 0.81 | | | | | | | | | |
| 10 円形 | 1.19 | 1.14 | 0.78 | | | | | | | | | |
| 11 長方形 | 1.33 | 0.76 | 0.59 | | 1 | 3 | | | | | 棺金具3 | |
| 12 円形 | 1.66 | 1.5 | 1.01 | | | | | | | | | |
| 13 円形 | 1.43 | 1.4 | 1.19 | | | | | | | | | |

第3表 近世墓一覧表(古…古寛永通寶、新…新寛永通寶、鉄…鉄銭を表す)

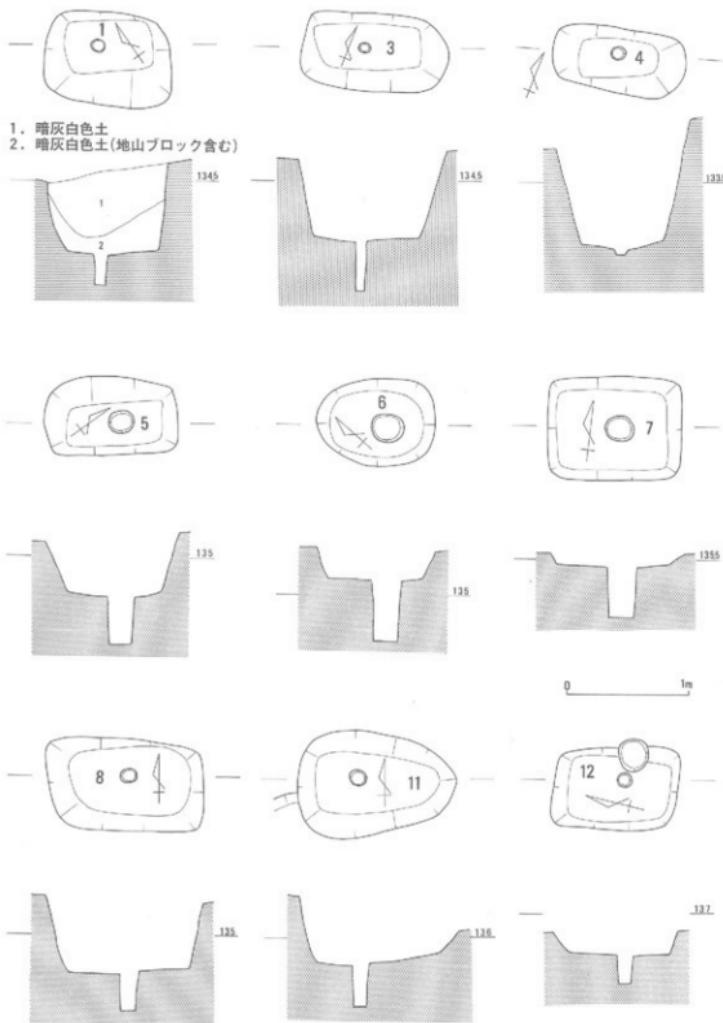
口径13.1cm、器高3.7cmを測り、底部には高台がつく。内面には青色の釉をかけている。焼き物名は不明である。8~10は細い板状の鉄片を円形に曲げ両先で挟むような棺金具であり、いずれも木質が観察できる。10には別の金具がくっついている。

近世墓12 (SG12、第54図)

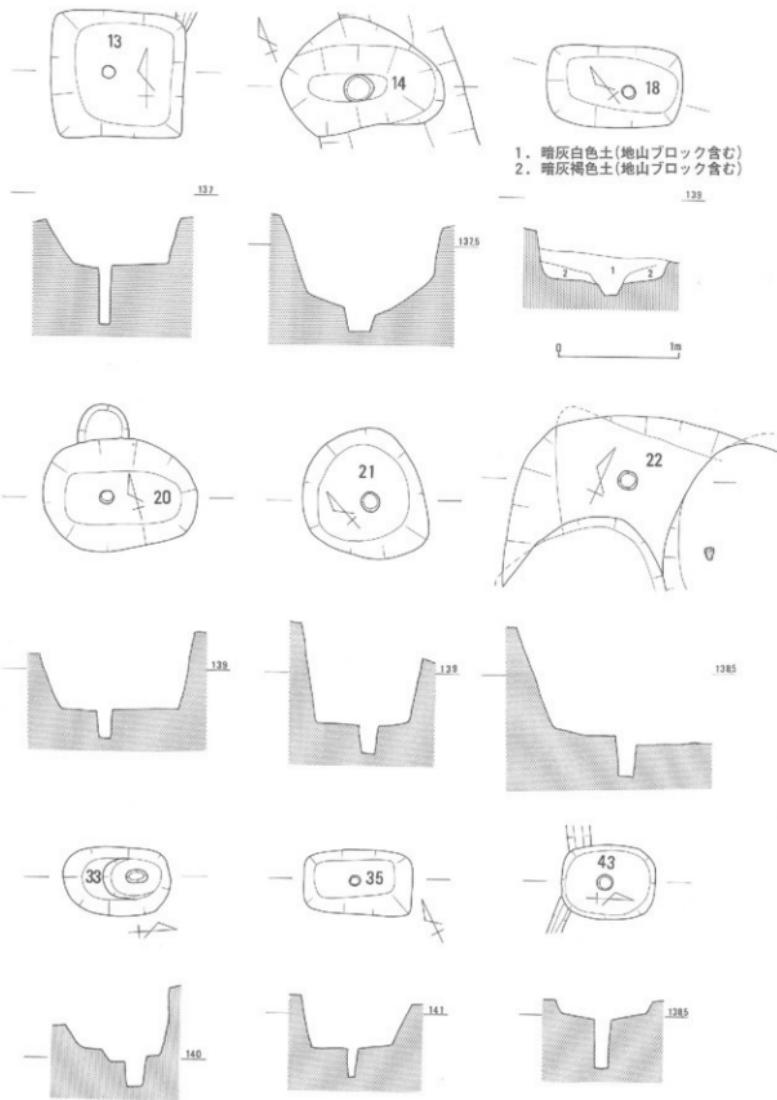
R-20区、直径1.66~1.5m、深さ1.01mの円形土壙である。棺痕跡は明瞭でなく、出土遺物は皆無である。

近世墓13 (SG13、第54図)

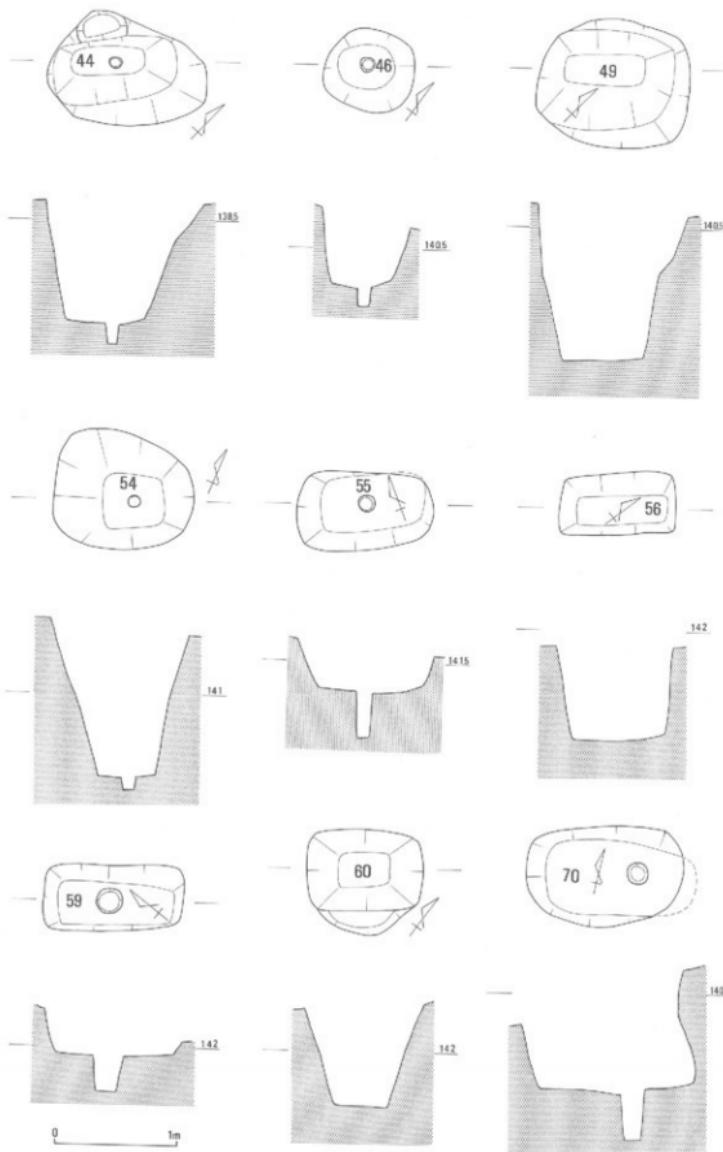
R-20区、段状造構と重複して存在する。そのため壇上には弥生土器片と環状石斧が少量出土している。直径1.43~1.4m、深さ1.19mの円形土壙である。棺痕跡は明瞭でなく、出土遺物も皆無である。



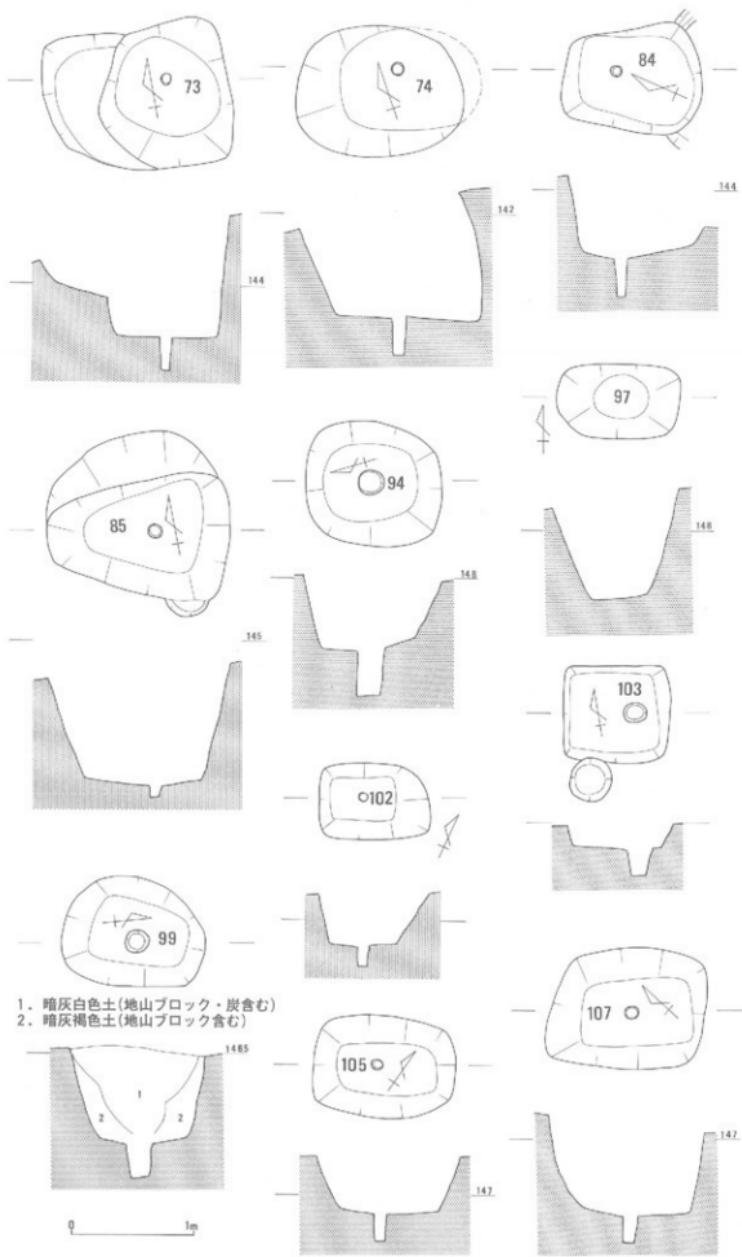
第56図 土壌1・3・4・8・11・12平・断面図(S=1:40)



第57図 土壌13・14・18・20・22・33・35・43平・断面図($S = 1 : 40$)



第58图 土壌44・46・49・54～56・59・60・70平・断面図($S = 1 : 40$)



第59図 土壌73・74・84・85・94・97・99・102・103・105・107平・断面図(S=1:40)

| No | 縦横長さ×高さ | 出土遺物 | 種別 | % | 類別・根拠 | 出土高さ | 種別 | No | 縦横長さ×高さ | 出土遺物 | 種別 |
|----|------------------|--------|----|----|------------------|-----------------|-------|-----|------------------|------|-----|
| 1 | 長方1.02×0.77×0.96 | | 高 | 48 | 不規0.78×0.55×0.65 | | 貯 | 95 | 円 1.49×0.85 | | ? |
| 2 | 円 1.21×0.71 | 上器 | 貯? | 49 | 長方1.24×1.08×1.32 | | 落 | 96 | 円 1.25×0.78 | | ? |
| 3 | 長方1.21×0.65×1.15 | | 落 | 50 | 椭円0.82×0.65×1.05 | | 貯 | 97 | 長方1.03×0.62×0.91 | | 落 |
| 4 | 長方1.1×0.52×1.11 | | 落 | 51 | 椭円1.42×1.15×1.1 | 土器・石 | 貯 | 98 | 椭円1.63×1.41×0.73 | 石 | 貯? |
| 5 | 長方1.1×0.65×0.95 | | 落 | 52 | 円 0.8×0.45 | | ? | 99 | 長方1.32×0.89×1.25 | | 落 |
| 6 | 円円0.98×0.72×0.78 | 土器 | 落 | 53 | 円 1.17×0.31 | 上器・石 | ? | 100 | 円 1.35×1.04 | | 貯 |
| 7 | 長方1.1×0.85×0.61 | | 落 | 54 | 長方1.14×0.97×1.29 | 右 | 落 | 101 | 円 1.35×0.66 | | 土器? |
| 8 | 長方1.28×0.76×1.01 | | 落 | 55 | 長方1.13×0.64×0.83 | | 落 | 102 | 長方0.9×0.64×0.62 | | 落 |
| 9 | 長方1.2×0.71×0.6 | | ? | 56 | 長方0.96×0.51×0.79 | | 落 | 103 | 方 0.9×0.45 | | 土器 |
| 10 | 不規3.5×1.95×0.62 | | ? | 57 | 円 0.95×0.55 | 土器・石 | 貯 | 104 | 円 0.87×0.47 | | 貯 |
| 11 | 長方1.21×0.89×0.9 | | 落 | 58 | 円 1.18×0.69 | | 貯 | 105 | 長方1.17×0.85×0.76 | | 落 |
| 12 | 長方1.1×0.67×0.44 | | 落 | 59 | 長方1.14×0.53×0.75 | | 落 | 106 | 椭円1.5×1.05×0.76 | | ? |
| 13 | 方 1.09×0.9 | | 落 | 60 | 長方0.96×0.66×0.85 | | 落 | 107 | 長方1.26×0.99×0.9 | | 落 |
| 14 | 椭円1.22×0.92×0.95 | | 落 | 61 | 円 1.01×0.5 | 土器 | 貯 | 108 | 方 2.78×2.42×0.6 | | 土器? |
| 15 | 円 1.96×0.8 | | ? | 62 | 円 1.14×0.94 | | 貯 | 109 | 椭円1.31×1×0.61 | 土器・石 | 貯 |
| 16 | 円 1.61×0.9 | 土器 | 貯? | 63 | 円 1.4×0.92 | | ? | | | | |
| 17 | 円 2.59×0.76 | | 土器 | ? | 64 | 椭円1.15×0.83×0.8 | 上器・執旗 | ? | | | |
| 18 | 長方1.12×0.67×0.54 | | 落 | 65 | 長方1.16×0.94×0.97 | 土器・石 | 貯 | | | | |
| 19 | 円 0.74×0.75 | 石臼丁・土器 | 貯 | 66 | 椭円1.14×0.84×0.71 | | ? | | | | |
| 20 | 長方1.26×0.91×0.86 | | 落 | 67 | 方 0.66×0.35 | | ? | | | | |
| 21 | 円 1.01×1.06 | 石瓶 | 落 | 68 | 円 0.73×0.61 | 炭 | ? | | | | |
| 22 | 長方1.23×0.89×1.31 | | 落 | 69 | 椭円1.07×0.93×0.72 | 土器 | ? | | | | |
| 23 | 円 1.53×0.7 | 上器 | ? | 70 | 長方1.3×0.83×1.31 | | ? | | | | |
| 24 | 円 1.75×1 | 上器・石 | ? | 71 | 方 0.97×0.5 | | ? | | | | |
| 25 | 長方1.23×0.74×0.31 | 石 | ? | 72 | 椭円1.04×0.73×0.77 | | ? | | | | |
| 26 | 円 1.26×0.68 | 土器 | 貯 | 73 | 不規1.18×1.09×1.29 | | ? | | | | |
| 27 | 円 0.97×0.4 | 土器・石 | 貯 | 74 | 椭円1.38×1.07×1.35 | | ? | | | | |
| 28 | 椭円1.08×0.88×0.89 | | ? | 75 | 円 0.87×0.5 | | ? | | | | |
| 29 | 円 1.34×0.62 | 炭 | ? | 76 | 円 1.27×0.76 | | ? | | | | |
| 30 | 円 1.03×0.3 | | ? | 77 | 円 1.55×0.32 | 上器・石 | ? | | | | |
| 31 | 円 1.19×0.7 | 土器・石 | ? | 78 | 長方1.04×0.49×0.25 | | ? | | | | |
| 32 | 円 1.16×0.75 | | ? | 79 | 方 0.84×0.59 | 土器 | ? | | | | |
| 33 | 椭円1.08×0.56×0.81 | | 落 | 80 | 方 2.5×0.24 | | 住居? | | | | |
| 34 | 長方1.01×0.88×0.29 | | ? | 81 | 椭円1.38×1.13×0.71 | 上器・石 | ? | | | | |
| 35 | 長方0.89×0.53×0.64 | | 落 | 82 | 円 1.41×0.44 | | ? | | | | |
| 36 | 椭円0.77×0.61×1.0 | 土器・石 | ? | 83 | 円 1.44×0.62 | 土器・石 | ? | | | | |
| 37 | 椭円1.0×0.83×1.24 | 土器 | ? | 84 | 長方1.17×0.81×1.12 | | ? | | | | |
| 38 | 椭円0.97×0.86×1.06 | 石臼丁・土器 | ? | 85 | △角1.03×1.11 | 上器 | ? | | | | |
| 39 | 方 1.29×0.9 | 土器・石 | ? | 86 | 円 1.18×0.81 | 土器・石 | ? | | | | |
| 40 | 方 0.89×0.82×0.59 | 跳梁上器? | ? | 87 | 椭円0.9×0.8×0.82 | | ? | | | | |
| 41 | 椭円1.49×1.05×0.47 | | ? | 88 | 不規2.7×2.05×1.04 | | ? | | | | |
| 42 | 円 1.15×0.61 | 土器・石 | ? | 89 | 円 1.45×1.13 | 上器・石 | ? | | | | |
| 43 | 長方1.77×0.62×0.53 | | 落 | 90 | 円 3.05×0.84 | 土器 | ? | | | | |
| 44 | 長方1.3×0.74×1.18 | 石 | 落 | 91 | 円 2.05×0.87 | 土器 | ? | | | | |
| 45 | 円 1.63×0.53 | 上器 | ? | 92 | 円 1.63×1.15 | 土器 | ? | | | | |
| 46 | 円 0.75×0.82 | | ? | 93 | 円 1.56×1.03 | | ? | | | | |
| 47 | 円 0.73×1.24 | 土器・供石 | ? | 94 | 長方1.12×1.03×1.04 | | ? | | | | |

第4表 土器一覧表

凡例

形態は上端の形態

円…円形

椭円…椭円形

長方…長方形

方…方形

三角…三角形

不整…不整形

規格は上端の数値

円形…直径×深さ

椭円形…長径×短径×深さ

方形…直径×深さ

長方形…長さ×幅×深さ

三角形…長辺×短辺×深さ

単位はmm

種別 貯…貯蔵穴

落…落とし穴

?…用途不明

3. その他の時代

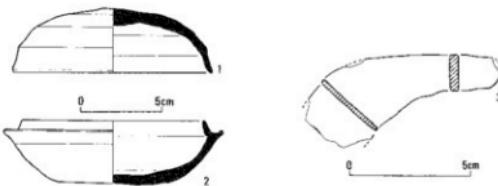
(1) 土壙 (第56~59図、第4表)

長方形ないしは円形の土壙で床面中央に円形の小さな穴が1個あいているものとそうでないもの二者がある。平面プランが長方(方)形が31基、円形(橢円形)5基、その他2基、計38基ある。底の中央に穴のあるもの34基、無いもの4基に分類される。1・18・99の土層関係から、この床面の穴に杭のようなものが刺さっていた痕跡は明瞭でなく定かではないが、いずれも狩猟用の落とし穴と推測されるものである。内部から石が出土したものがあり、特に44は大きめの石が複数出土している。その他狩猟用を裏付ける石鎚が出土した土壙が1基(21)ある。この石鎚(第42図5)はサスカイト製で形態や風化が著しい事から縄文時代と考えられる。また土器の出土が3基(6・85・103)である。これら土器の出土は少なく時期の決定は困難を要するものが多い。例えば住居跡など弥生時代の遺構と重複しているものが何基かあり、斜面や獸道らしき所に設置していると推測されるため、両者が同時期とは考えにくいものもある。一般的には縄文時代の所産と考えられているものが多いが、今回埋土に完形に復元できる弥生土器を含むもの(上塙6、第42図2)ものがあり、弥生時代まで下がるものがある可能性もある。これら土壙の詳細については一覧表(第4表)を参照されたい。

(2) 遺構に伴わない遺物 (第60図)

住居跡2の廻上層から須恵器、鉄製品、鉄滓が出土している。これらが伴う遺構の検出はしていないが、周辺に関連遺構が存在するものと推測される。出土遺物は第60図に図示している。1・2は須恵器でいずれも破片から復元している。1は杯蓋で口径12cm、器高4cm、天井部分はヘラ切り後未調整である。2は口径11cm、器高3.9cmを測り、口縁の立ち上がりは9mm程度で縁部は丸くおさめる。底部はヘラ切り後未調整である。3は鉄製品であるが、鍾の柄の部分とも推測されるが、欠損している部分があり明瞭でない。鉄滓は7点あり(図版40)、重さは5~140gで表面観察から製錬滓と考えられる。これら須恵器はその特徴から大阪陶邑編年のTK209型式(註1)併行ないしはやや古い段階の所産と考えられ、およそ7世紀初頭頃と推測される。

(註1) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店1981



第60図 遺構に伴わない出土遺物(1・2…S=1:3、3…S=1:2)

V 自然科学的分析

荒神峯遺跡出土黒曜石、サヌカイト製石器の産地について

岡山理科大学自然科学研究所

白 石 純

1. はじめに

ここでは荒神峯遺跡の弥生時代中期と推測される住居跡内から出土した黒曜石、サヌカイト製石器の産地推定を実施した。産地の推定方法は蛍光X線分析法により黒曜石、サヌカイトの含有元素の定量分析を測定し、その元素量から原産地を推定した。産地推定した石器は第1表に示した29点の試料である。また、サヌカイトに関しては荒神峯遺跡以外に西吉田遺跡（弥生時代中期中葉）⁽¹⁾、紫保井遺跡（弥生時代中期後葉）⁽²⁾の住居跡から出土した石器についても合わせて分析し原産地を推定した。

なお、黒曜石の分析は試料の形状を変えることなく非破壊で実施したが、サヌカイトに関しては試料表面の風化状態により定量性に欠けるため粉末にし、コイン状にプレス加工を行い測定した。測定装置は、卓上型蛍光X線分析計SEA2010L（セイコーアンスツルメンツ株式会社）を使用した。

2. 分析結果

荒神峯遺跡の住居址17内から出土した黒曜石製石器の産地について検討した。この結果、第1図K₂O-CaO、第2図Fe₂O₃-TiO₂の両散布図には黒曜石原産地である島根県隠岐島の久見、津井、加茂の各産地の分布領域が示されている。この分布域に荒神峯遺跡、有本遺跡の黒曜石をプロットすると、4点の黒曜石剥片とも久見産の分布領域に分布する結果となった。

次に、荒神峯遺跡住居址16・住居址17、西吉田遺跡住居址4・住居址6、紫保井遺跡住居址6・住居址7から出土したサヌカイト製剥片の産地について推定した。第3図K₂O/TiO₂-Fe₂O₃/TiO₂散布図にはサヌカイトの原産地である香川県五色台地域と広島県冠城地域の産地分布領域が示してある。そしてこの分布領域に各遺跡の住居址から出土した石器をプロットすると、すべての石器は金山の原産地に分布した。

以上のように、荒神峯遺跡の住居址16内出土の黒曜石は島根県隠岐の久見産に、また荒神峯遺跡住居址16・住居址17、西吉田遺跡住居址4・住居址6、紫保井遺跡住居址6・住居址7から出土したサヌカイトはすべて香川県の金山産にそれぞれ推定された。

この石材分析の機会を与えていただいた津山市教育委員会の職員の方々にはいろいろお世話になった。末筆ではありますが記して感謝いたします。

(註)

(1)行田裕美「西吉田遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集』津山市教育委員会1985

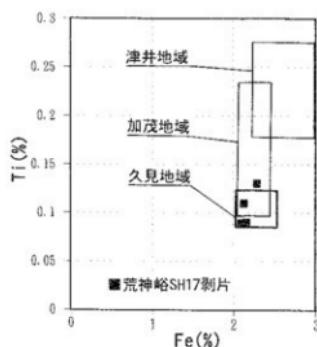
(2)中山俊紀「津山市紫保井遺跡と中期小住居群」『古代吉備第15集』古代吉備研究会1993

第1表 石器石核分析値一覧表(%) たとしRb・Sr・Zrはppm

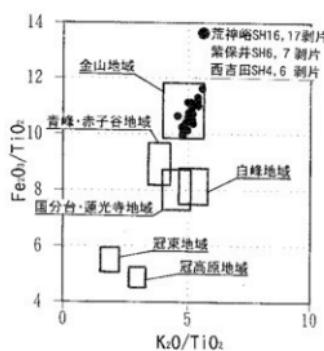
| 番号 | 遺跡名 | 出土地区 | 時代 | 期 | 石材・岩種 | SiO ₂ | TiO ₂ | Al ₂ O ₃ | Fe ₂ O ₃ | MnO | MgO | CaO | Na ₂ O | K ₂ O | P ₂ O ₅ | Rb | Sr | Zr |
|----|-------|-------|----------|---------|-------|------------------|------------------|--------------------------------|--------------------------------|------|------|------|-------------------|------------------|-------------------------------|-----|-----|----|
| 1 | 荒神裕遺跡 | 住居址17 | 弥生時代中期? | 黒曜石剥片 | 74.14 | 0.11 | 12.53 | 2.13 | 0.06 | 1.12 | 0.68 | 3.86 | 5.06 | 0.06 | 1757 | - | 359 | |
| 2 | 荒神裕遺跡 | 住居址17 | 弥生時代中期? | 黒曜石剥片 | 74.29 | 0.09 | 12.51 | 2.15 | 0.05 | 1.13 | 0.64 | 3.66 | 5.14 | 0.07 | 1817 | - | 413 | |
| 3 | 荒神裕遺跡 | 住居址17 | 弥生時代中期? | 黒曜石剥片 | 74.00 | 0.09 | 12.60 | 2.10 | 0.06 | 1.21 | 0.68 | 3.86 | 5.06 | 0.08 | 1656 | - | 397 | |
| 4 | 有木遺跡 | 1号墓遺土 | 弥生時代中期? | 黒曜石剥片 | 73.39 | 0.13 | 13.15 | 2.29 | 0.06 | 1.18 | 0.68 | 2.80 | 5.95 | 0.08 | 1911 | - | 413 | |
| 5 | 荒神裕遺跡 | 住居址16 | 弥生時代中期? | 黒曜石剥片 | 64.66 | 0.51 | 16.83 | 5.36 | 0.12 | 1.59 | 4.22 | 3.61 | 2.66 | 0.32 | 35 | 272 | 234 | |
| 6 | 荒神裕遺跡 | 住居址16 | 弥生時代中期? | 黒曜石剥片 | 64.87 | 0.52 | 16.81 | 5.27 | 0.11 | 1.55 | 4.30 | 3.52 | 2.61 | 0.34 | 58 | 271 | 252 | |
| 7 | 荒神裕遺跡 | 住居址16 | 弥生時代中期? | 黒曜石剥片 | 64.59 | 0.51 | 16.92 | 5.27 | 0.12 | 1.61 | 4.29 | 3.64 | 2.58 | 0.32 | 54 | 239 | 251 | |
| 8 | 荒神裕遺跡 | 住居址17 | 弥生時代中期? | サスカイト剥片 | 63.17 | 0.52 | 16.69 | 5.39 | 0.11 | 1.65 | 4.27 | 3.03 | 2.76 | 0.32 | 57 | 299 | 269 | |
| 9 | 荒神裕遺跡 | 住居址17 | 弥生時代中期? | サスカイト剥片 | 64.95 | 0.52 | 16.72 | 5.40 | 0.11 | 1.51 | 4.35 | 3.32 | 2.68 | 0.34 | 58 | 304 | 261 | |
| 10 | 荒神裕遺跡 | 住居址17 | 弥生時代中期? | サスカイト剥片 | 65.16 | 0.48 | 16.72 | 5.32 | 0.11 | 1.54 | 4.31 | 3.30 | 2.66 | 0.29 | 48 | 275 | 263 | |
| 11 | 荒神裕遺跡 | 住居址17 | 弥生時代中期? | サスカイト剥片 | 64.54 | 0.49 | 16.89 | 5.26 | 0.12 | 1.67 | 4.29 | 3.70 | 2.57 | 0.37 | 56 | 280 | 239 | |
| 12 | 荒神裕遺跡 | 住居址17 | 弥生時代中期? | サスカイト剥片 | 64.55 | 0.50 | 16.86 | 5.33 | 0.11 | 1.64 | 4.33 | 3.73 | 2.54 | 0.31 | 50 | 291 | 247 | |
| 13 | 紫保井遺跡 | 住居址6 | 弥生時代中期後葉 | サスカイト剥片 | 64.61 | 0.51 | 16.95 | 5.36 | 0.11 | 1.61 | 4.37 | 3.56 | 2.54 | 0.28 | 49 | 247 | 195 | |
| 14 | 紫保井遺跡 | 住居址6 | 弥生時代中期後葉 | サスカイト剥片 | 64.52 | 0.47 | 17.01 | 5.17 | 0.11 | 1.61 | 4.31 | 3.80 | 2.58 | 0.31 | 50 | 288 | 249 | |
| 15 | 紫保井遺跡 | 住居址6 | 弥生時代中期後葉 | サスカイト剥片 | 64.43 | 0.49 | 17.03 | 5.27 | 0.11 | 1.57 | 4.31 | 3.86 | 2.50 | 0.32 | 54 | 282 | 257 | |
| 16 | 紫保井遺跡 | 住居址6 | 弥生時代中期後葉 | サスカイト剥片 | 64.33 | 0.45 | 16.92 | 5.25 | 0.10 | 1.62 | 4.37 | 4.02 | 2.54 | 0.30 | 46 | 310 | 290 | |
| 17 | 紫保井遺跡 | 住居址7 | 弥生時代中期後葉 | サスカイト剥片 | 64.68 | 0.47 | 17.01 | 5.27 | 0.11 | 1.57 | 4.28 | 3.62 | 2.59 | 0.29 | 53 | 276 | 239 | |
| 18 | 紫保井遺跡 | 住居址7 | 弥生時代中期後葉 | サスカイト剥片 | 64.89 | 0.49 | 16.92 | 5.40 | 0.11 | 1.62 | 4.26 | 3.31 | 2.59 | 0.30 | 52 | 260 | 238 | |
| 19 | 紫保井遺跡 | 住居址7 | 弥生時代中期後葉 | サスカイト剥片 | 64.36 | 0.48 | 17.05 | 5.36 | 0.11 | 1.69 | 4.31 | 3.74 | 2.49 | 0.32 | 50 | 278 | 234 | |
| 20 | 紫保井遺跡 | 住居址7 | 弥生時代中期後葉 | サスカイト剥片 | 64.36 | 0.49 | 16.88 | 5.26 | 0.11 | 1.73 | 4.24 | 4.01 | 2.48 | 0.33 | 45 | 287 | 218 | |
| 21 | 紫保井遺跡 | 住居址7 | 弥生時代中期後葉 | サスカイト剥片 | 64.54 | 0.51 | 16.28 | 5.45 | 0.11 | 1.15 | 4.38 | 2.35 | 0.33 | 36 | 327 | 238 | | |
| 22 | 西吉田遺跡 | 住居址4 | 弥生時代中期中葉 | サスカイト剥片 | 64.60 | 0.48 | 16.72 | 5.39 | 0.11 | 1.65 | 4.37 | 3.61 | 2.55 | 0.36 | 49 | 269 | 223 | |
| 23 | 西吉田遺跡 | 住居址4 | 弥生時代中期中葉 | サスカイト剥片 | 64.54 | 0.50 | 17.06 | 5.34 | 0.11 | 1.69 | 4.45 | 3.34 | 2.55 | 0.32 | 45 | 256 | 238 | |
| 24 | 西吉田遺跡 | 住居址4 | 弥生時代中期中葉 | サスカイト剥片 | 64.87 | 0.47 | 16.92 | 5.33 | 0.11 | 1.60 | 4.34 | 3.36 | 2.55 | 0.35 | 50 | 263 | 238 | |
| 25 | 西吉田遺跡 | 住居址4 | 弥生時代中期中葉 | サスカイト剥片 | 64.25 | 0.49 | 16.83 | 5.39 | 0.11 | 1.65 | 4.36 | 3.90 | 2.55 | 0.37 | 47 | 258 | 227 | |
| 26 | 西吉田遺跡 | 住居址6 | 弥生時代中期中葉 | サスカイト剥片 | 64.81 | 0.53 | 16.82 | 5.41 | 0.11 | 1.58 | 4.32 | 3.47 | 2.54 | 0.32 | 48 | 265 | 227 | |
| 27 | 西吉田遺跡 | 住居址6 | 弥生時代中期中葉 | サスカイト剥片 | 64.71 | 0.50 | 16.88 | 5.36 | 0.10 | 1.59 | 4.33 | 3.54 | 2.54 | 0.35 | 50 | 262 | 235 | |
| 28 | 西吉田遺跡 | 住居址6 | 弥生時代中期中葉 | サスカイト剥片 | 64.63 | 0.51 | 16.71 | 5.32 | 0.10 | 1.62 | 4.37 | 3.75 | 2.56 | 0.34 | 48 | 255 | 243 | |
| 29 | 西吉田遺跡 | 住居址6 | 弥生時代中期中葉 | サスカイト剥片 | 64.55 | 0.49 | 16.84 | 5.41 | 0.10 | 1.65 | 4.34 | 3.70 | 2.51 | 0.31 | 49 | 265 | 233 | |



第1図 荒神峯遺跡出土黒曜石の原産地推定



第2図 荒神峯遺跡出土黒曜石の原産地推定



第3図 荒神峯遺跡他出土サスカイトの原産地推定

VII まとめ

1. 荒神峯遺跡の評価

(1) 弥生時代の集落の構造と時期

今回の調査で弥生時代の遺構としては、住居跡18、建物跡6、段状遺構13、欄列5、土壙（貯蔵穴など）多数などを検出した。遺跡は今回調査した調査区の東側にさらに続くものと考えられるため、遺構の実数についてはさらに増えるものと推測される。そのため今回の検出した遺構がすべてではないが、現状での集落の時期、構造などについて簡単にまとめる。

(時期)

時期について出土した土器を検討してみる。遺構数の割りには出土した土器の数は少なく、また破片が多い。そのため全体像を知れる土器も少ない。報告書にはできる限り実測可能なものについては載せている。その中で時期別に古いものから見ると、中期後葉の津山市西吉田遺跡Ⅲ期（註1）、西吉田北遺跡1期（註2）併行ないしはやや新しい段階と考えられる上器が、住居跡7・11と段状遺構10・13から出土している。特に住居跡11の土器は器台の特徴などやや新しい段階に入る可能性が考えられる。また、段状遺構13は後期の土器も出土しているので中期そのものの遺構ではない。そのためこの時期に確実に伴う遺構としては住居跡7と11の2軒と段状遺構10のみである。また、この時期の可能性があるものとして住居跡16・17などが候補として考えられるが、決めかねるのが現状である。

次の後期では、美作地方の土器編年は津山市大田十二社遺跡（註3）や小原遺跡（註4）、西吉田北遺跡などが発表され確立しつつある。ただ大田十二社遺跡以外は後期全般にわたるものではなく、これら各編年には地域色なども見られ、器形の細部の特徴などなかなか照らし合わせる事が難しい場合もある。また、資料も蓄積段階であるため、前回の有本遺跡（註5）の報告では、藤田恵司氏（註6）の編年を基にして述べて来た。今回も既存の編年及び氏の編年を参考にして検討した。以下のI～IV期は氏の編年に概ね符合する。

I期とII期の違いは主に高杯の形態が明瞭であるが、今回の調査ではほとんど比較資料がない。その場合、両者の区別は壺の口縁部の形態及び外面の凹線の退化現象などから区別してきたが、今回は破片が多くそれらも明瞭に区別できないものが多い。I期の高杯は土壙101や109（第51図24・34）で出土しているため、この時期の住居が存在した可能性は大きい。逆にII期の高杯はほとんど見られないため、このII期の住居が存在していた積極的な根拠は乏しい。そのため壺など他の器種も参考にしながら検討した。このI～II期の内、壺などの特徴からI期と考えられるものが住居跡3・6・12などから出土している。また、次のIII期は壺の口縁部の立ち上がりが垂直ないしはやや外反ぎみに立ち上がるるもので明瞭に区別される。この時期は土壙40の一括資料がある。全体像が明瞭なものはないが、壺、甕、高杯、器台などがある。壺には長頸で屈曲して口縁が外反するものと、くの字に外反するだけのものがある。甕の口縁の形態にもすんなり立ち上がるものと、屈曲部端を外方につまむものとがあり、前者が平からすると多い。この甕の屈曲部端をつまむものは有本遺跡B地区土器棺10に同様なものがあり、これについては副部の形態が卯形である事から次のIV期にあてている。ただこのような屈曲部を外方につまむ方がしっかりととした作りであり、逆に古い要素としてとらえた方がよいのかもしれないし、両者に制作者の違いなどが反映されているのかもしれない。いずれにせよ、この土壙40については、新旧の要素も若干含んでいるかもしれないが、全体的な特徴はIII期と考えられる。

以上より弥生時代の集落は大きく中期後葉と後期I・III期の時期があり、前述のように後期のII期に

問しては明瞭な資料がない。

(集落の構造)

集落を構成する主な遺構は住居跡、建物跡、横列、段状遺構、土壙（貯蔵穴）などである。住居跡については一覧表（第5表）にまとめている。これによると住居跡18軒の内建て替えがあるのが6軒あり、住居跡4以外はすべて拡張している。住居跡4は縮小している唯一の例であり、比較的めずらしく類例としては、津山市大畠遺跡住居跡10（註7）などがある。住居の規模（直径及び一辺）と柱数で比較したのが第61図である。これを見ると、直径7m前後で明瞭に二者に区別できる。7m以下の住居は柱も5本以下であり、4本が基本である。中には住居跡18のように2本柱と考えられるものがあり、この類例も大畠遺跡などにある。また7mを越える住居は7本以上である。特に住居跡12は外周に10本、中央穴の周間に4本の計14本が確認されている。おそらく直径9mを越えるような住居の場合、中央部にも支えの柱があった方が構造上しっかりとすると考えられる。ただこれが確認できたのは12のみである。また、このように7m前後を境に柱の数が変わる状況は、近接する津山市有木遺跡A地区や先の大畠遺跡、小原遺跡など後期の集落においてはほぼ普遍的に見られる事象である（第61図参照）。よってこの7mを境にしてこれ以下を小形、以上を大形住居と便宜的に呼称する。また、この大形の内直径10mを越えるものは第61図の中でも荒神裕遺跡にしかない。そのため超大形とも言える直径10mを越える住居は、普遍的ではなく特異的なものと言える。次に時期ごとの集落構成について述べる。

(I期)

I期とされる遺構は、住居跡1・3・6・12、段状遺構2・9・14、土壙101・109などが考えられる。この分布を見ると（第62図）ほとんどが丘陵の稜線上から東側斜面にかけて立地している。住居は大形住居の1・6・12と小形住居の3でかたまって分布せず、やや散在的に存在する。しかし、東斜面の調査区外に遺構が存在する可能性も考えられるため、これがすべての遺構であると即断はできない。住居以外では、稜線に直交する形で段状遺構2が作られる。この遺構の用途については明瞭でないが、内部には柱穴が複数存在することから、上層構造をもつ作業場的な建物を考えている。その他、土壙101・109など複数の貯蔵穴が住居などに伴う可能性がある。この貯蔵穴については後述する。

(II期)

この時期の遺構は、現段階では明瞭でない。

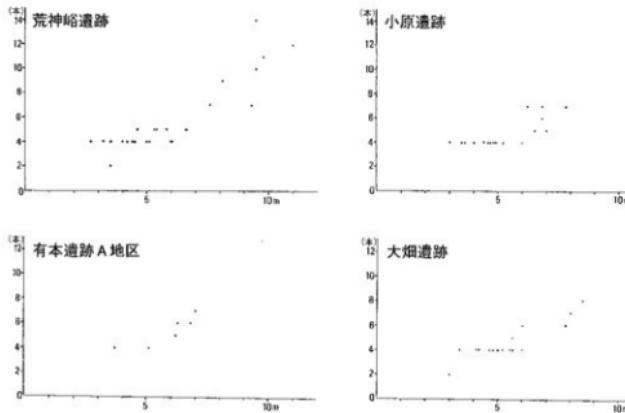
(III期)

この時期は住居跡4・5・8・10、段状遺構13、土壙40・64・65・69・108などがある。住居は5が大形で他は小形である。ただ5は2回の建て替えがあるため最終段階が大形住居である。この5以外の遺構のほとんどは丘陵の西斜面にややまとまって分布しているため、これらはひとつのグループ的なものと考えられる。

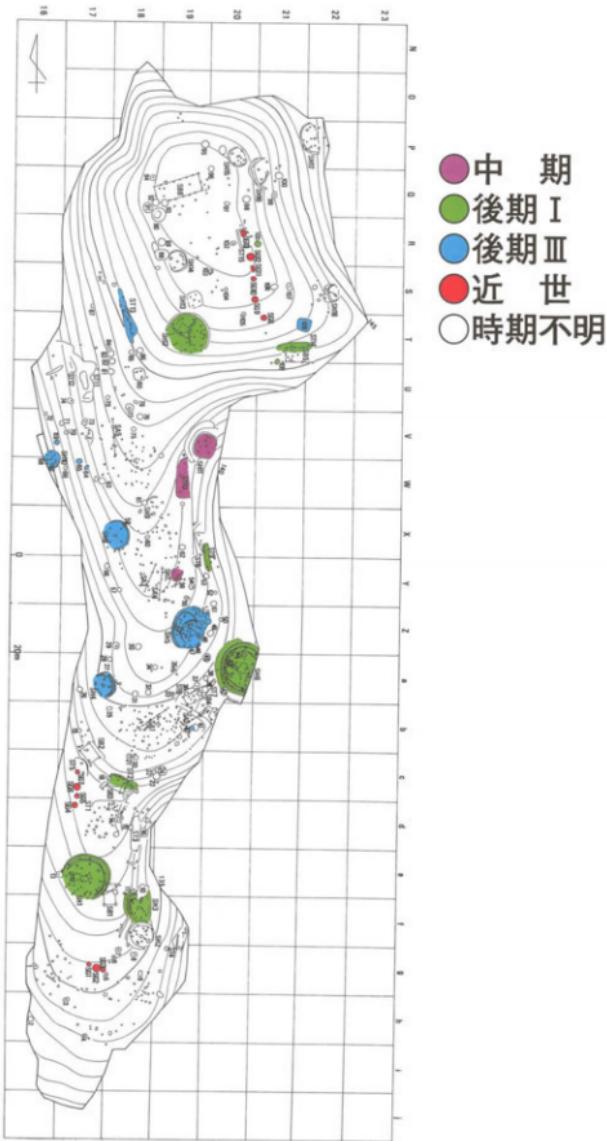
最後に丘陵の最高所にある住居跡15～17、建物跡など時期が明確でないものについても考えてみたい。住居跡16・17からは少なからず土器片が出土しているが、前述のように時期決定までには至っていない。ただ住居跡16・17の土器などその特徴から、もしかすると中期まで逆上の可能性が考えられるものもある。これら3軒の内16・17からサスカイトの剥片が多量に出土し、石器の製作跡と推測される。同様な住居は津山市西吉田遺跡や紫保井遺跡（註8）などにもあり、いずれも中期の所産であり後期まで下がる明瞭な遺跡はない。そのため石器の製作跡とすると、これらと同時期で中期の可能性を推測する事もできる。その場合、これら3軒（住居跡15～17）ないしは住居跡18を入れた4軒の中で1グループの存

| 住居番号 | 形 | 規模(m) | 柱数 | 出 土 遺 物(土器は除く) | 備 考 | 時 期 |
|------|---------|-------|------|--------------------------------------|----------|-----|
| 1-1 | 円 | 8.25 | 9 | | | |
| | 円 | 9.8 | 11 | 石包丁、砥石 | 拡張、外方溝有り | 後期Ⅰ |
| 2-1 | 円 | 5.2 | 4 | | | |
| | 円 | 5.85 | 5 | | 拡張 | 後期 |
| 3-1 | 方 (4×3) | 4 | | | | |
| | 方 (6×5) | 4 | | | 拡張 | 後期Ⅰ |
| 4-1 | 円 | 5 | 4 | | | |
| | 円 | 4.5 | 4 | 砥石 | 縮小 | 後期Ⅲ |
| 5-1 | 円 | 5.3 | 5 | | | |
| | 方 | 4.6 | 5 | | | |
| | 円 | 9.3 | (7) | 鉄器 | 3軒重複 | 後期Ⅱ |
| 6-1 | 円 | 7.6 | 7 | | | |
| | 円 | 9.5 | (10) | | | |
| | 円 | 11 | (12) | 石包丁、石鑿、砥石、石錐、鐵器、ヤリガシナ、ガラス製正規勾工・管玉・小刀 | 拡張、精円形 | 後期Ⅰ |
| 7 | 円 | 2.7 | 4 | 石斧 | | 中期 |
| 8 | 円 | 6 | 4 | | | 後期Ⅲ |
| 9 | (円) | (4.4) | 4 | | | 不明 |
| 10 | 円 | 3.5 | 4 | 石包丁 | | 後期Ⅲ |
| 11 | 方 | 5.4 | 5 | 石斧 | | 中期 |
| 12 | 円 | 9.5 | 14 | 銅鏡、砥石 | | 後期Ⅰ |
| 13 | 方 | 3.2 | 4 | 石包丁 | | 不明 |
| 14 | 円 | 4.45 | 4 | | | 不明 |
| 15 | 円 | 4.2 | 4 | | | 中期? |
| 16 | 円 | 6.6 | 5 | 石斧、石錐、石錐、サヌカイト剥片 | | 中期? |
| 17 | 円 | 6.6 | 5 | 石斧、石錐、サヌカイト剥片、黒曜石・水晶剥片 | | 中期? |
| 18 | 方 | 3.5 | 2 | | | 中期? |

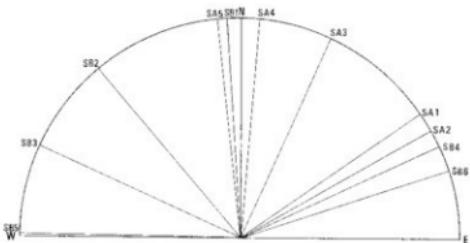
第5表 荒神崎遺跡住居跡一覧表 (規模は直径もしくは一边の長さ)



第61図 堅穴住居の規模と柱数



第62図 時期別遺構分布図 ($S = 1 : 1,000$)



第63図 建物・構列の主軸方向

在も指摘できる。この場合は小形の住居のみで1グループと言う事となる。また、建物跡1についてはⅠ期の住居跡1を切っており次のⅡ期の遺構が明瞭でない事からすると、Ⅲ期の可能性を考えられ、その場合丘陵の先端の平野部を見下ろせる所に立地し、1×1間で床面が正方形に近い建物である事から、見張り台的性格の建物と推測される。建物跡6については土器片も少量のため判断できない。そのためこの建物と構列の主軸方向を比べたのが第63図である。主軸方向で建物1、構列4・5と建物4・6、構列1・2の二つのグループにおおまかに分けられる。さらに前者と建物跡5、後者と建物跡2、さらに入り組んだ建物跡3と構列3がそれぞれ直角関係に近い。この場合、同一主軸や直角関係が同一時期におこなわれた建築上の共通観念とすると、前述で仮定した建物跡1がⅢ期であれば、同一グループの構列4・5や建物跡5が同一時期の可能性があると考えられる。また、建物跡3は段状遺構2（Ⅰ期）を切っている事から、次のⅡ期以降とすると建物跡3や構列3はⅡ期以降となる。そして残るⅠ期は建物跡2・4・6、構列1・2が考えられる。以上の推論でいけば、各時期に建物1～2軒が伴うという事となる。

（集落の変遷）

次に推測の域を脱しない部分も多いが、上記をふまえ集落の変遷を考えてみる。

中期では住居跡7・11、段状遺構10があるが、これらが同時期に存在していたとすると小形住居2軒で1単位となっていたようである。また、住居跡15～17がこの時期としても、小形の住居のみでグループを形成している。ただこの中期の段階には大形住居自体がほとんど存続しないので、住居の規模については再検討する必要がある。また段状遺構10については住居跡11と切り合っているため同時併存の可能性は明瞭でない。

後期では、Ⅰ期については丘陵の頂部付近の住居跡12のグループと東斜面の住居跡6を中心としたグループ、先端の住居跡1のグループの三者に分けられる。いずれも中心となる大形住居があり、住居跡12は小形の住居跡13・14で1単位、住居跡1は小形の住居跡3などで1単位の可能性が考えられる。出土遺物では12から銅鏡が、6からは石器（石包丁・石斧・石礫・石錘・砥石）や鉄器（鉄鎌・ヤリガンナ）、玉類（ガラス勾玉・管玉・小玉）が出土し、これら遺物の面でも住居の規模によってかなり差があるようである。ちなみに12は建て替えがないが、6は2回の建て替えがあり、その最終段階にこれら出土遺物は伴うものである。ただこの3グループの同時共存の可能性や住居跡6にこれだけ豊富な遺物がなぜ残されていたのかは疑問点が多い。もしかするとこの住居跡6は最終的には祭祠的な場として使

用されていたのかも知れない。

次のⅡ期になると、本集落内の構造は明瞭でない。この事は先の住居跡6に豊富な遺物を残さざるをえない事情が、この時期に生じたのかも知れない。この時期の集落としては本遺跡の北側に近接する有元遺跡で住居などが検出されているため、この時期集落が北側などへ移動していた可能性も考えられる。

Ⅲ期はふたたびⅠ期と同じ丘陵に集落が営まれる。大形の住居跡5を中心に丘陵の西斜面に存在し、大形住居1軒、小形住居3軒で同時に存在していれば、これがほぼ1単位と推測される。ただこの住居跡5も最終段階が大形住居であるので、ある時期は大形住居の存在しない時期があったのか、他の所に大形住居が存在する可能性も考えられる。

このように見て行くと、中期では現状で大形住居は存在せず、小形住居のみで1単位を形成していたものと推測される。後期になるとⅠ・Ⅲ期を通じて丘陵の棱線及び東側斜面→稜線及び西側斜面と集落が移動している事が伺える。そして各時期ともある段階には中心となる大形住居の存在、大形住居1に対し小形住居が1~2軒が併い、それぞれがグループを形成していたようである。

また、その他の遺構例えば建物や柵列については時期がほとんど明瞭でないが、前述した主軸の方向性に同一の企画があれば、ある程度の時期を類推することは可能である。また、貯蔵穴については、例えば住居10の周辺の上塙65・69のようにほぼ同時期と考えられるものがあり、住居1に対し複数存在していたものと考えられる。ちなみに、建て替えの数も入れると住居の数は全部で26軒、貯蔵穴の数は約43基、これを単純に住居の数で割るとおよそ1軒当たり1.7基となり先程の考えにほぼ符合する。

(2) 出土遺物について

a. 銅鏡

青銅製の鏡の破片が、住居跡12から出土している。出土場所は柱穴の埋土であるから、ほぼこの住居の時期ないしは廃絶時の遺物として解釈できる。この銅鏡は貝輪として使用されたものが銅器化したもので、形態によって分類される。本例は破片のため全体の形態は不明であるが平らな面が存在する事、欠損部分の状況からやや開きぎみになる形状と推測される事から、ゴホウラ製の貝輪を模した銅鏡の可能性が大きい。これは、木下尚子氏の分類でゴホウラ系鋼鏡（註9）、井上洋一氏のゴホウラ縦型貝輪型銅鏡（註10）に分類される。またその場合有鉤、無鉤でさらに細分されているが現状では明瞭でない。時期については供体する土器から弥生時代後期のⅠ期と考えられ、この型式が中期後半から後期と言う年代幅にも符合する。岡山県内での類例は2例あり、いずれも岡山市役所遺跡から出土している。1例は円環型と呼ばれるもので住居からの出土である。時期は後期のⅠ~Ⅱ期。もう1例はゴホウラ縦型の有鉤型で、土壙から出土し時期は後期のⅣ期である（註11）。本例と時期的に近いのは円環のものであるが、これは形態が大きく異なっている。また、有鉤型と比べると厚さがかなり異なり鉄型は違うものと考えられる。さらに中国地方では広島県で1例（淨福寺2号遺跡、註12）、鳥取県で2例（長瀬高浜遺跡、註13、土井歎遺跡、註14）出土し、前者はゴホウラ縦型の有鉤型で、形態的には平らな面の幅が狭く政所遺跡とも鉄型は異なる。時期は後期の中葉である。また、後者は2例とも円環型である。そのためこれら遺跡間との関連性は読み取れない。

銅鏡については全国で出土例は50遺跡程度あり、分布は九州北部から関東地方に見られ、北部九州と大阪地方に部分的に集中する。出土数も1例の場合が多いが、中には複数の場合もあり20点を超えるものや最近の調査では京都・大風呂南墳墓（註15）で鉄剣やガラス鏡などと共に13点（ゴホウラ縦型）出土し、日本海側の類例も増えてきている。

銅鏡の内、円環型については朝鮮半島に出土例があり、半島からもたらされたものもあり、さらに大阪・鬼虎川遺跡（註16）で鏡型が出土しているため、国産品も存在していたものと考えられている。ゴホウラ鏡型の有鉤については、福岡県などで鏡型が出土しているため、北部九州で主に生産された事は確実とされる。そのため本例も北部九州からもたらされた可能性も考えられるが、この時期銅鐸など他の青銅器が近畿地方でも製作され、近年山陰地方で膨大な数の銅劍・銅鐸が出土し、近畿地方以外に山陰地方も製作地のひとつと考えられている。これらの事からすると、本例はこれら各地の青銅器の製作工房で製作されたものが流通してきた可能性も考えられるが、流通ルートを特定するまでは至らない。

最後に、銅鏡出土の意義を考えたい。周辺の集落で青銅製品が出土した遺跡はほとんど知られていない（唯一水系の同じ鏡野町で銅鐸（註17）の出土が知られている）。当時貴重な青銅製品が出土した意義は大きい。完形であった可能性も捨て切れないが、破片そのものであっても本集落内の大型住居の構成員が青銅製品をもち得たことは、司祭的な指導者であった可能性が考えられ、銅鐸など青銅製品を用いた同一あるいはそれに類する祭祠形態をとっていた可能性も考えられる。この事は銅鏡の出土した岡山市市政遺跡に隣接する高塚遺跡（註18）で銅鐸が出土している事からも類推する事ができる。そのためこれら青銅製品が出土しない他の集落と本集落は祭祠形態ひとつをとっても区別されるものであり、そこに少ながらず集落間の格差が生じていたはずである。この事は遺跡の立地や鉄製品や玉製品の出土の在り方などからも考えられる。

b. ガラス製玉製品

ガラス製玉製品が住居跡6から出土している。勾玉1点、管玉1点、小玉23点である。勾玉は中央穴、小玉は床面からある程度まとまって出土している。時期は後期のⅠ期で先の銅鏡とはほぼ同時期である。流通センター内では有本遺跡A地区の住居跡4から1点（ガラス製小玉）、有本遺跡B地区の土壙墓8の1点（同管玉）、土壙墓12の4点（同小玉）、土壙墓49の17点（同管玉）、土壙墓113の1点（碧玉製管玉）、男戸嶋遺跡住居跡3が1点（同管玉）、住居跡6の2点（同管玉）がある。有本遺跡はいずれも後期のⅢ～Ⅳ期ごろ、男戸嶋遺跡は中期後半の所産であり、両者とも今回のものとは時期は異なる。また、津山市内の弥生時代玉類出土地の一覧表（第6表）を見ると、これら以外に5遺跡で出土例がある。中期後半の例は西吉田遺跡の土壙墓3があり、23点の碧玉製管玉と5点のガラス製小玉と共に

| 遺跡名・遺構名 | 点数 | ガラス製 | | | 時期 | 文献 | |
|-------------|----|-----------|----|----|----|-------|-----|
| | | 碧玉製 管玉 | 勾玉 | 管玉 | 小玉 | | |
| 荒神船遺跡住居跡6 | 25 | | 1 | 1 | 23 | 後期・前半 | 本書 |
| 有本遺跡 住居跡4 | 1 | | | | 1 | 後期・後半 | 註5 |
| 土壙墓8 | 1 | 1 | | | | 後期・後半 | |
| 土壙墓12 | 4 | 1 | | | 3 | 後期・後半 | |
| 土壙墓49 | 17 | | | 17 | | 後期・後半 | |
| 土壙墓113 | 1 | 1 | | | | 後期・後半 | |
| 男戸嶋遺跡住居跡3 | 1 | 1 | | | | 中期・後半 | 註20 |
| 住居跡6 | 2 | 2 | | | | 中期・後半 | |
| 野村高尾遺跡住居跡1 | 2 | | | | 2 | 後期・前半 | 註21 |
| 土壙墓 | 1 | | | | 1 | 後期・後半 | |
| 西吉田遺跡土壙墓3 | 28 | 23 | | | 5 | 中期・後半 | 註2 |
| 沼遺跡 A住居址 | 1 | | | | 1 | 中期・末 | 註22 |
| 小原B遺跡 1号住居址 | 1 | | | 1 | | 後期・前半 | 註23 |
| 高橋谷遺跡 3号住居址 | 1 | | | | 1 | 中期・末 | 註24 |

第6表 津山市内弥生時代玉類出土遺跡一覧表

し、量的に最も多いものである。また、ガラス製の小玉は荒神嶽遺跡住居跡6が最も多い。

流通センター内のガラス製玉類については分析をおこなっている。分析の結果、荒神嶽遺跡の勾玉と管玉、有本遺跡の管玉が鉛バリウムシリカガラスで、その他の小玉はカリシリカガラス（註19）であり、玉の種類によって材料が異なっている事が伺える。この事の解釈としては、両者に制作者や製作地の違いが反映している可能性も考えられるが、それ以外に玉本来の種類そのものに大きな意味合いが存在するものと考えられる。特に勾玉・管玉と小玉ではそこに大きな差が存在している。ただその意味について結論は現時点ではだせないが、小玉は比較的出土例が多い事、製作が比較的簡単である事からすると、入手はたやすくあったものと推測される。この製作地は判明していないが、もしかすると勾玉や管玉はある特定の工房で製作されたものが流通経路を通り本集落にもたらされ、逆に小玉は集落周辺地域などである程度生産されており、製作地及び流通経路が異なっていた可能性が考えられる。

C. 鉄製品について

鉄製品は、住居跡5から1点（器種不明）、6から3点（鉄鎌2、ヤリガンナ1）、土壙40から1点（鉄鎌）、64から1点（鉄鎌）、段状遺構2から2点（器種不明）の計8点出土している。この中で大型の住居跡6から3点出土し、この住居からは他の副葬品も多数出土しているため、本遺跡内では特異な遺構といえる。また、出土例の種別では鉄鎌とヤリガンナがあり、その内鉄鎌が多い。鉄鎌は形態から柳葉式が2点ある。また、器種不明の中にはヤリガンナの柄の部分と思われるものもある。この柳葉式の鉄鎌は出土上器から後期後半のものである。鉄鎌の研究（註25）によるとこの形式は布留式段階を下限とするものであるため、今回の時期も所属時期が符合する。また、比較するために津山市内の弥生時代の鉄器出土遺跡を一覧表（第7表）にしている。それによると、荒神嶽遺跡以外に、12遺跡で20例ある。器種別ではやはり鉄鎌やヤリガンナが多い。その他、斧や刀子などがある。点数をみても複数出土

| 遺跡名・遺構名 | 点数 | 鉄鎌 | ヤリ | 斧 | 刀子 | 不明 | 時期 | 文献 |
|--------------|----|----|----|---|----|----|-------|-----|
| 荒神嶽遺跡住居跡5 | 1 | | | | | 1 | 後期・前半 | 本書 |
| 住居跡6 | 3 | 1 | 1 | | | 1 | 後期・後半 | |
| 土壙40 | 1 | 1 | | | | | 後期・後半 | |
| 土壙64 | 1 | 1 | | | | | 後期・後半 | |
| 段状遺構2 | 2 | | | | | 2 | 後期・前半 | |
| 有本遺跡 住居跡1 | 1 | | | | 1 | | 後期・後半 | 註5 |
| 土壙墓24 | 1 | 1 | | | | | 後期・後半 | |
| 土壙墓39 | 1 | 1 | | | | | 後期・前半 | |
| 男戸鶴遺跡住居跡7 | 1 | 1 | | | | | 中期・後半 | 註20 |
| ビシャコ谷遺跡2号住居跡 | 1 | | | 1 | | | 中期・後半 | 註27 |
| 沼遺跡 A住居址 | 1 | | 1 | | | | 中期・末 | 註22 |
| 小原遺跡 住居跡8 | 1 | 1 | | | | | 後期・前半 | 註23 |
| 大畑遺跡 段状遺構30 | 1 | 1 | | | | | 後期・前半 | 註7 |
| 向林遺跡 S B 6 | 1 | 1 | | | | | | 註28 |
| 大開遺跡 住居址1 | 1 | | | 1 | | | 後期・末 | 註29 |
| 大田十二社遺跡2号住居址 | 1 | | 1 | | | | 後期・後半 | 註3 |
| 4号住居址 | 3 | | 1 | | | 2 | 後期・後半 | |
| 13号住居址 | 1 | | 1 | | | | 後期・後半 | |
| 貯蔵穴61 | 1 | | 1 | | | | 後期・末 | |
| 二宮大成遺跡 1号住居址 | 1 | | 1 | | | | 後期・末 | 註30 |
| 鮎込遺跡 住居址 | 2 | | 1 | 1 | | | 中期・後半 | 註31 |
| 押入西遺跡 | 1 | | | | | 1 | 中期 | 註32 |

第7表 津山市内弥生時代鉄器出土遺跡一覧表

した例は少ない。本遺跡以外では大田十二社遺跡の4号住居址があり、3点出土している。この遺跡はヤリガンナの出土例が多い遺跡である。次に時期別に見ると、一番古い中期の後半から末の例がビシャコ谷遺跡、沼遺跡などにある。特にビシャコ谷遺跡の斧は、鍛造鉄斧で鉄素材は鉱石系とされ、短冊型鉄素材を加熱して鍛造加工したもので、鉄素材は大陸産で鍛造加工は列島内でおこなわれた可能性を示唆している（註26）。また、後期の段階ではおそらく、鉄素材を加工する技術はかなり進歩していたものと考えられ、まだ発見はされていないが周辺地域に加工する工房が存在していた可能性も十分考えられる。

d. 黒曜石について

住居跡17の整溝内から黒曜石の製品1点（模形石器）と剥片2点が出土している。本住居からはサヌカイトの剥片が多量に出土している事から、石器の製作跡と推測される。本住居の時期は明瞭な土器片が少ないと、中期後葉の可能性を指摘した。黒曜石の剥片は有本遺跡A地区周辺からも1点出土している。これら4点については產地を推定するための分析を行った（第V章白石氏分析参照）。その結果、いずれも島根県の久見産との事であり、おそらく山陰を経由して入って来たものと推測される。次に時期の検討であるが、一般に黒曜石の使用は、旧石器から縄文時代にかけて流通したものがほとんどで、弥生時代まで下がる類例は周辺でも知られていない（註33）。この住居内のサヌカイトについては製品も出土しているため、石器の製作を行っていた事は確実である（产地は分析の結果香川県の金山産、白石氏分析参照）。逆に黒曜石については製品は出土しているものの剥片の点数が少ない。そのためこの住居で製品を作っていたとする根拠は乏しい。また、水晶の剥片も出土しこれら複数の石材ではたして石器を作っていたかは疑問がある。さらにサヌカイトによる石器の製作跡と考えられる住居跡16の共伴する石斧は風化も激しく、縄文時代の特徴をもつものであり、住居の周囲には縄文時代と考えられる落とし穴も數多くあり、出土した石器の中に縄文時代と考えられるものもある事から、これらを総合的に解釈すると、弥生時代の人が実際に黒曜石で石器を製作していた可能性と、これら周囲から採集してきた副産物の可能性も捨て切れない。

(3) 近世墓について

近世墓として土塚墓を13基検出した。分布状況からほほ土塚墓1～3、4～7、8～13の3群（第62回参照）に分けられ、これらを順にA・B・C群と呼称する。A群は形状が円形2基、方形1基、B群はすべて円形、C群は円形5基、長方形1基である。この方形については剣が多数出土する事が多く、棺桶の組み立て時に使用したものと解釈し、円形の場合も少数出土する場合があり、これについては蓋などに使用したものと考えている。ところが今回は方形の上塚墓3のみ針が出土し数は少ない。そのため棺桶の製作時に使用されていたものは判断できない。副葬品は、比較的少なく5基に見られ陶器と棺金具の出上が1基（11）、銭貨の出土が4基（1～3、5）である。銭貨はほとんどが「寛永通寶」と考えられ、最大で7枚、最小は1枚である。通常は5～6枚が多く六道銭と呼ばれている。この寛永通寶は鋳造された順に古寛永、新寛永などに分類され時期決定の目安となる。いずれも新寛永が含まれ背面にも文字が無い事から、この種の新寛永の鋳造（1697～1747、1767～1781、計34）以降が、これら土塚墓の時期と考えられる。ただこれら寛永通寶の出土したのはA群すべてとB群の1基のみである事から、その他のC群については時期が定かではない。C群については陶器も出土しているが1点のみであり時期決定はできない。このC群については時期が異なるのか、あるいは銭貨を副葬する風習がなかったのか、できなかったのか、群によって副葬品の種類が異なっている。この事は前回報告した有本遺

跡B地区で検出した16基の内15基に副葬品が見られる様相とは異なっている。この遺跡では16基が方形の区域内に密集しているもので、墓域として長期にわたり認識されていた地域と推測される。また、一概には言えないが副葬品も豊富である事からすると、今回調査した人々とは財力的に差があった可能性も考えられる。

2. 津山総合流通センター内の遺跡について

(1) 弥生時代後期の集落と墓地

津山総合流通センター内には約10遺跡存在し、その内弥生時代後期の遺跡は有本遺跡（Ⅱ～Ⅳ期）、荒神船遺跡（Ⅰ～Ⅲ期）、有元遺跡（Ⅱ期）、田邑丸山遺跡（Ⅲ期）、葡萄田頭遺跡などがある（第2図参照）。有本遺跡は墳墓群（B地区）と集落（A地区）とが明瞭に丘陵で別れ、葡萄田頭遺跡は中期の集落と後期の墓地、有元遺跡・田邑丸山遺跡は集落のみである。そのため現状では集落と墳墓は丘陵で明瞭に別れて存在するようである。検出した集落の時期は、ほぼ後期のⅠ～Ⅲ期で、墳墓の時期はⅡ～Ⅳ期であり若干の時期幅が見られるが、一定地域をほぼ統括的に調査しているため、ある程度同一集落とその墓地の関係を推測する事は可能である。

（集落の変遷）

集落の構造についてはすでに述べたように、大形住居（直径7m以上）1軒と小形住居（直径7m以下）1～2軒で1グループを構成していると考えた。時期的にはⅠ～Ⅲ期を通じて同様な様相であるものと推測される。ただⅠ期については直徑10mを越える超大形の住居が出現する。これら超大形の住居は前段階の中后期においては見られないもので、後期の段階になって新しく出現する。さらにすべての集落に存在するものではなく、ほぼ一定の地域ごとに存在するようである。例えば周辺地域では津山市福井遺跡（註23）、上郡遺跡（註35）、久世町上野遺跡（註36）、且山遺跡（註37）、鏡野町九番丁場遺跡（註38）、勝央町小中遺跡（註39）があり、それぞれ地域で中心となる集落である。時期は後期の中でも前半頃のものが多い。本地域ではⅡ期以降もこの超大形に匹敵する、直徑9m前後の大形住居が伴う。この住居の存在する集落をいわゆる稲作による共同体の単位としてとらえた場合、これらの存在しない集落間に少なからず格差をもたらす結果となる。このことは出土遺物などからも推測され、前述した銅鏡や鉄製品、ガラス製の玉類の存在が明瞭に集落間の格差を表現している。またこの事は次に述べる墳墓の中にも反映されている。少なくとも稲作を基盤としている集落であるものの、大形住居の有無、出土遺物の組成の違いは、そこに各集落（1グループ及びその集合体）を統括する集落の存在を伺わせる。まさしく本地域では荒神船遺跡がこの集落である。水田は検出していないがおそらく本集落の南に広がる平野部に存在していたものと推測され、本集落はそれを見渡せる絶好の立地条件である。逆に9mを越える超大形住居の無い有本遺跡A地区は奥まった地域での立地である。地域間の各差が立地面でも現れているものと推測される。

（集落と墳墓の関係）

後期の墳墓については、有本遺跡B地区、葡萄田頭遺跡があり、ここでは立地的に考えて前者との関連について述べる。詳細についてはすでに報告しているので省略するが、ほぼⅡ期の段階から作られはじめ、両側を伴う墳墓とそうでないものが共存する。両者は、副葬品にはほとんど差が無いが、少なくとも区画を施す所とそうでない所とに葬られる人々の差が、墓域規模などにより認識されていた事は十分推測できる。この墳墓に葬られたのはおそらく荒神船遺跡、有本遺跡A地区、有元遺跡、田邑丸山

遺跡などの人々と考えられる。おそらくⅠ期の段階には超大型の住居が出現している事から、この時期の墳墓があってもよさそうであるが、この時期はまだ明瞭でない。次のⅡ期の段階になり、区画をもつと考えられる墳墓が現れる。この時期については逆に集落の様相が明瞭でないが、有元遺跡などが候補として考えられる。つまりこの段階には少なくとも区画された墳墓が出現し、そうでないものと共存する。Ⅲ期になると区画をもつ墳墓とそうでない墳墓との関係がさらに明瞭となる。この時期にはⅠ期ほどの超大型の住居はほとんど存在しないが、大形住居がほぼ9mクラスに統一化されやや普遍的になるようである。つまり、各中心的な構成員の格差がなくなったと言うより、台頭してくる中心的な人物が増えてきたものと推測される。そのためこれをさらに統括する人物も出現していたはずである。このような人物などが区画された墓に葬られたものと考えられる。そして、次のⅣ期になると吉備地方南部の特殊器台が出土している事から、Ⅰ期の段階以降続いている者銅器を使用した祭祀形態から、吉備地方南部の特殊器台による祭祀形態へと、一般的には祭祀形態そのものが変化していったものと考えられている。しかし、現実にはその祭祀形態そのものは、地元の器台を中心とした中期から続く祭祀形態を排除し、新たに統括する程の力はなかったものと考えられる。この事は有本遺跡B地区の区画墓1の器台の出土状況など、吉備南部地方とは様相が異なった祭祀形態が以前色濃く残っていた事、また美作地方での特殊器台そのものの取り扱い方（特定の人物の墓に使用するのではなく、集団墓地に伴うものとして使用する例（註40）が多い）などからも推測される。

- （註1）行田裕美「西吉田遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集』津山市教育委員会1985
- （註2）坂木心平他「西吉田北遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第58集』津山市教育委員会1997
- （註3）中山俊紀他「大田十二社遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集』津山市教育委員会1981
- （註4）木村祐子他「小原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第38集』津山市教育委員会1991
- （註5）小郷利幸「有本遺跡他」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第62集』津山市教育委員会1998
- （註6）藤田憲司「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」『考古学雑誌第64巻第4号』日本考古学会1979
- （註7）小郷利幸他「大畠遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第47集』津山市教育委員会1993
- （註8）中山俊紀「津山市紫保井遺跡と中期小住居群」『古代吉備第15集』古代吉備研究会1993
- （註9）木下尚子「只輪と銅鏡の系譜」『季刊考古学第5号』雄山閣1983
- （註10）井上洋一「銅鏡」『季刊考古学第27号』雄山閣1989
- （註11）岡山県古代吉備文化財センターで実見させていただいた。なおその際、高畠知功、平井泰男両氏にお世話をになった。
- （註12）山田繁樹他「東広島ニュータウン遺跡群Ⅱ」「広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第97集」（財）広島県埋蔵文化財調査センター1993
- （註13）西村彰徳他「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書VI」「鳥取県教育文化財団報告書14」（財）鳥取県教育文化財団1983
- （註14）『浅井字土井敷遺跡発掘調査現地説明会資料』会見町教育委員会1981
- （註15）『速報展示 大鳳呂市墳墓資料』京都府立丹後郷土資料館1998
- （註16）半本隆裕他「鬼虎川の金屬器関係遺物」（財）東大阪市文化財協会1982
- （註17）昭和38年鏡野町で銅鐸2個の出土が知られているが、現在は所在不明である。
- （註18）岡本寛久他「高塚遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告20』岡山県教育委員会1990
- （註19）分析は奈良国立文化財研究所の肥塙隆保氏にお願いし、また倉敷埋蔵文化財センター鏡野早苗氏には分

析にあたっての便宜を図っていただいた。

- (註20) 安川豊史「男戸船跡地」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第65集』津山市教育委員会1999
- (註21) 行田裕美他「野村高尾遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第55集』津山市教育委員会1995
- (註22) 近藤義郎他「津山弥生住居址群の研究」『津山郷上越考古学研究報告第2冊』津山市1957
- (註23) 中山俊紀「小原B・福荷遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第35集』津山市教育委員会1990
- (註24) 1976、1977年に津山市教育委員会が発掘調査。報告書未完。
- (註25) 大村直「弥生時代における鉄錠の変遷とその評価」『考古学研究第30巻第3号』考古学研究会1983
- (註26) 大澤正巳「ビシャコ谷遺跡出土鉄錠及び鉄斧の金属性的調査」『ビシャコ谷遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集 津山市教育委員会1984
- (註27) 行田裕美「ビシャコ谷遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集』津山市教育委員会1984
- (註28) 安川豊史「向林遺跡・中鎌田墳墓」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第29集』津山市教育委員会1989
- (註29) 平岡正宏「大間遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第51集』津山市教育委員会1994
- (註30) 山崩康平他「二宮大成遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告6』岡山県教育委員会1973
- (註31) 1976~78年草加郡工業団地埋蔵文化財発掘調査委員会が発掘調査を実施。報告書未完。
- (註32) 1980~81年津山市教育委員会が発掘調査を実施。
- (註33) 津山市内での黒曜石の出土例は野村高尾遺跡・大田大正門遺跡・大田茶屋遺跡などがあり、大田茶屋遺跡では石核と細石刃が出土し、その他は剥片である。時期は旧石器から縄文時代早期とされるものが多い。
- 行田裕美他「野村高尾遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第55集』津山市教育委員会1995
- 岡本泰典他「大田茶屋遺跡2他」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告129』岡山県教育委員会1998
- (註34) 水井久美男「日本出土錢鑑1996年版」兵庫県藏錢調査会1996
- (註35) 安川農史「上部遺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第30集』津山市教育委員会1990
- (註36) 山崩康平他「上野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告91』岡山県教育委員会1994
- (註37) 渋倉秀昭「旦山遺跡」「最近の岡山県下における埋蔵文化財発掘調査概要の報告会」1997
- (註38) 兵平昭則「九番丁場遺跡」「最近の岡山県下における埋蔵文化財発掘調査概要の報告会」1996
- (註39) 二宮治夫他「中小遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告117』岡山県教育委員会1997
- (註40) 特殊器台の出土例は津山市有本遺跡・上原遺跡・下道山遺跡・権現山遺跡・落合町中山遺跡などがあり、いずれも集落墓地内の出土である。
- 近藤義郎「上原遺跡」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会1986
- 山崩康平他「中山遺跡」落合町教育委員会1978

図 版



竪穴式住居の復元

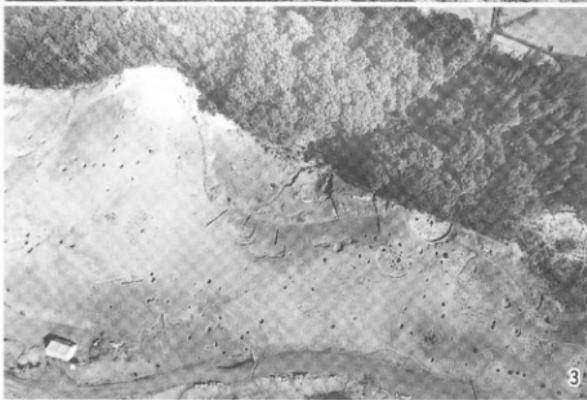
図版 1



1. 荒神峠遺跡遠景
(南から)

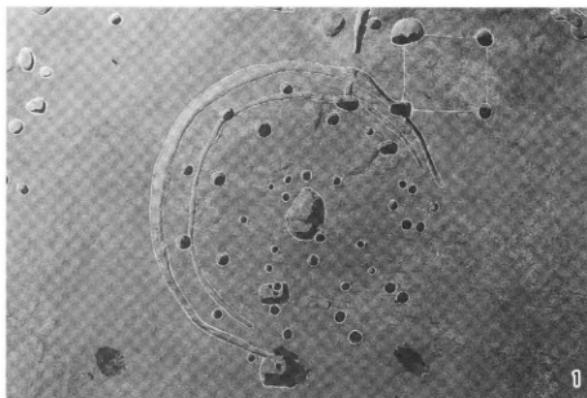


2. 荒神峠遺跡遠景
(北から)



3. 荒神峠遺跡全景

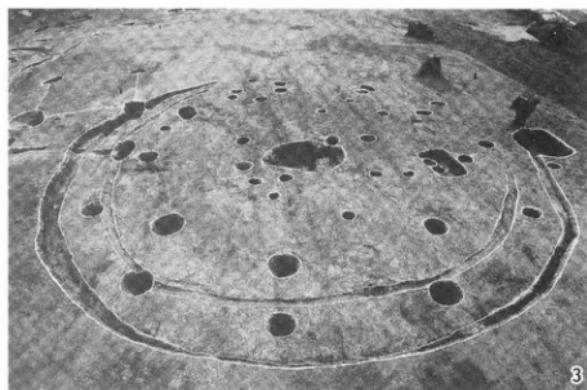
図版2



1. 住居跡1
迷物跡1 全景

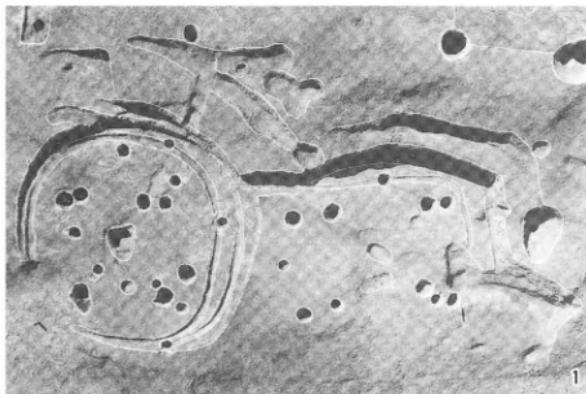


2. 住居跡1
調査風景



3. 住居跡1

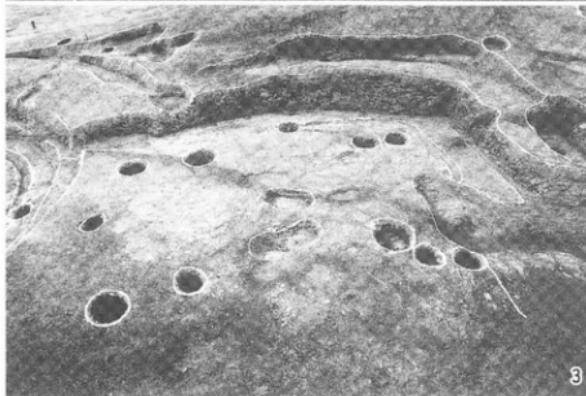
图版 3



1. 住居跡 2・3 全景

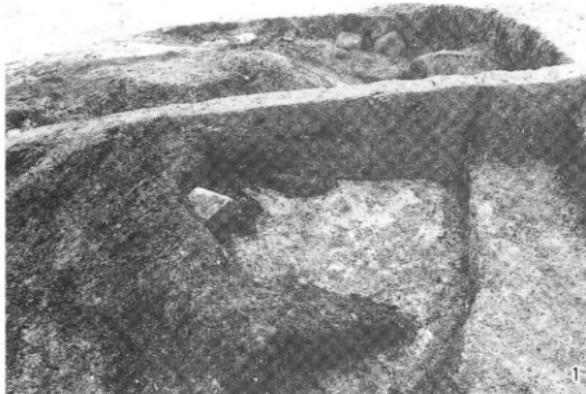


2. 住居跡 2

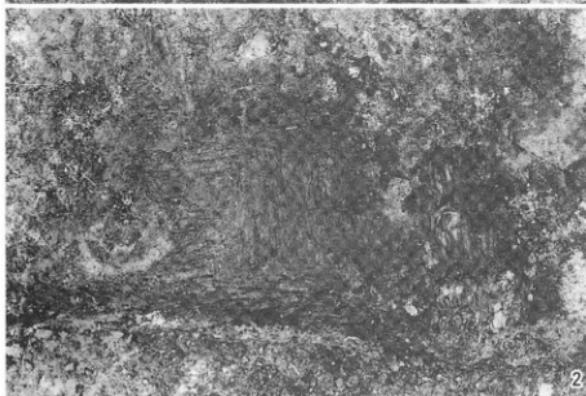


3. 住居跡 3

圖版 4



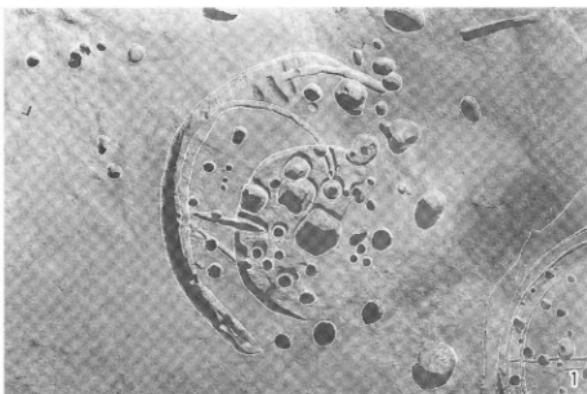
1. 住居跡 4 土層



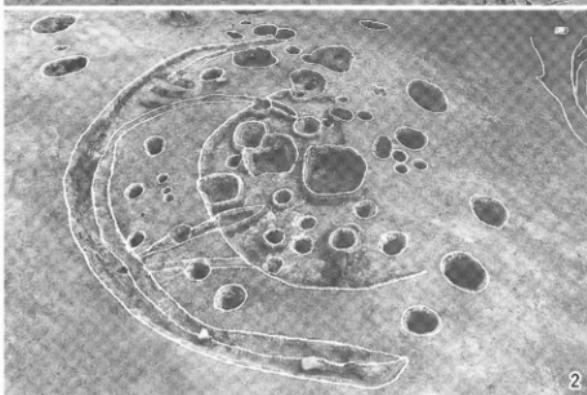
2. 住居跡 4 遺物
出土狀況



3. 住居跡 4



1. 住居跡 5 全景



2. 住居跡 5



3. 住居跡 5 遺物
出土状況